
気が付いたら転生してチートなりリカルだった。

めたるみーと。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら転生してチートなりリカルだった。

【Nコード】

N5813W

【作者名】

めたるみーと。

【あらすじ】

はい、初投稿。

めたるみーと。と申します。

さて、私の事なんかどうでもいいのでちゃっちゃか注意事項と行きましょう。

注意事項

・この作品はリリカルなのはの二次創作。及び主人公最強厨二病転生ハーレムヘタレご都合主義亀更新。

などというあまりにも酷いことになっております。

以上の事項がお嫌いである。または、作者がマジで社会のゴミ。
という方は今すぐに・・・！？

ブラウザバックしろ！ここは俺が押さえる！だから早くいけえ！！

・と、まあこうして暴走することがあります。

そのへんご了承ください。

prologue

きゅんくゅんかゅんくゅん

チャイムが鳴る。

教室から次々と出ていく小学生達。

窓側の一番後ろの席の両耳にピアスをつけた男の子は、カバンを手にとり、ドアへと歩き出す。

今日のご飯は何にしようかねえ・・・などと考えながら。

ここは海鳴市私立聖祥大附属小学校。

そう、リリカルなのはの世界である。

と、いうわけでこんにちは。幽亜勇と言います。

あんたなんでそんな世界に居るの？

とかって聞かないでいただきたい。

俺だって知らない・・・気が付いたらこの世界でピアス型のデバイスであるアビスとイモータルが耳に付けられた状態でソファに腰掛けてたんだ。

前世の記憶、そしてデバイス、さらにはチートな身体能力、戸籍、馬鹿でかい魔力。

家、金、何から何まで用意されてた。

恐らく二次創作でよく見かける転生って奴だと思う。

そういえばよく読んでた・・・ハーレムものとか読んで幸せになったフェイトとかを見てほんわかしたまんだ・・・。

で、チートな俺が原作に介入して原作をそげぶしてやんぜやっほう！！

ってんなことできまっせん・・・。

一つ、俺自身ひっじょーに面倒である。

二つ、俺が介入することで他のSSのように原作に歪みが出るのが怖い。

三つ、なるべく平和に暮らしたため。

以上、三つの理由により、俺は原作に介入しないことにした。
まあ、俺が存在するだけで原作が変わる可能性も捨てきれないが・・。

だ、大丈夫さ・・あの子たちみんな強い子だから・・。

と、まあそんな感じで原作には介入したくない俺だったが・・誤算が一つ・・。

「幽亜、塾いくわよ!」

「幽亜君、一緒に行こうよ。」

車で送ってくよ?」

原作無印のメインキャラアリス・バニングスと月村すずかと、通つてゐる塾が一緒なことだ。

なんだこの運命力は・・・。

『マスターはまるでチョウチンアンコウの頭のアレみたいに何かをを引き寄せますからね。

致し方無いかと。』

『そうだな、アビス。

マスターは基本巻き込まれ型に属するタイプの人間だからな。』

『おまえらマジで黙ってくんね？』

はい、こいつら俺のデバイスです。

先に話したチョウチンアンコウうんぬんかんぬんだったのがアビス。

巻き込まれ型だとか何とか言ってたのがイモータル。

どちらもデバイスとしては優秀らしいが、

いかんせん人をからかったり人間らしい面をのぞかせたりする。

長い時間をかけて熟成したデバイスが人間らしい一面を見せると言うのはSSを読んで知ってるのだが。

そんなに熟成しているのかはなはだ疑問である。

「えー・・・っと・・・バニングスさん、月村さん。

俺はあとからゆつくりいくよ・・・。

ちよつと夕飯の買い物もあるし。」

「そう・・・それじゃ、仕方ないわね。

行きましょ、すずか。」

「うん、じゃあまたあとでね、幽亜君。」

「うん、それじゃあまた。」

と、まあ二回に一回ほどこんな感じで御誘いを拒否っているのだが・・・。

なんだろうね・・・俺なにかあれですかね？

なんかやつちまったのかね？

「いえ、バニングス様、月村様、共に面倒見が良いようでしたので、フラグ的なアレは“まだ”建ってないと思います。」

「いや、アビスよ。

そうとも言いきれんぞ。

一目惚れ。

もしかしたら・・・ということも考えられる。」

「なるほど・・・！」

流石ですイモータル。

伊達に某小説投稿版で小説を書いているだけありますね。」

「おい、初耳なんだが。」

デバイスがなんで小説書いてるんだよ！？

っていつか何その無駄なスキル！

「この間試したところ、近所の銀行のセキュリティを掻い潜るまで2分程。」

アメリカ政府の核まで五分程でした。』

『二人でやればもっと早かったかもしれないイモータル。』

『いや、何？

ハッキングなんてお前らできたの？

つかやんな。割とガチで。』

『マスター、すみませんが私の個人的な趣味ですので、

そこら辺は黙認していただけると非常に助k『出来るかボケエ！

！』

マジでなんなんお前ら・・・？

おまえらマスターをなんだと思ってるん？

「さーと・・・今日の飯はなんにしようかねえ・・・。」

『お隣の奥さんから肉じゃがのおすそわけと三着目のワンピースも
らってましたよね？

あれおかずにすればいいじゃないですか。』

「いや、ワンピースおかずってどういうこと・・・？」

『いや、男性ならおわk『割るぞイモータル。』い、イエスマスタ
ー。』

現在、近場のスーパーまで移動中である。

晩飯買いに言っただよ。

親もないし・・・何故か周りからは

“不慮の事故で両親を亡くした男の子”という認識らしい。

そして、何故か皆家族がいないのに小3の子が一人で暮らしてるの

か疑問に思わないという……。
なんという御都合主義……。

「うーん……。どうしようかねえ……。
適当にコロッケにでもすつか。」

『いいんじゃないですか？』

あ、ほら、そこにありますよ？』

「お、ほんとだ。」

コロッケを取ろうと手を伸ばす。
すると、横から手が伸びてきた。

「ん？」「」

「ああ、すんまへん。」

お先にどうぞ？」

「え、ええ、これはどう……。も……。？」

そこには未来の夜天の主、八神はやてがいた。

prologue (後書き)

はい、始まってしまいました。

「気が付いたら転生してチートなりリカルだった。」

略して「チーリリ」(?)

微妙にわしゃわしゃ書いていきつつ頑張りますのでぬるま湯のような眼で蔑んで下さい。

それでは。

気が付いたら夜天の主（予定）の家で晩御飯御馳走になった。（前書き）

はい、亀更新の真髓きました。

それでは、お楽しみいただければ幸いです。

気が付いたら夜天の主（予定）の家で晩御飯御馳走になってた。

はい、皆様こんにちは。

幽亜勇です。

今、私は八神家のテーブルにて待機中。

え？原作に介入しないんじゃないかなかったのかつて？
いや、とりあえず俺の説明を聞いてくれ。

まずはやてと鉢合わせ。

←
とりあえず二人分のコロッケをとり、一つを渡す。

←
自己紹介

←
とりあえず晩飯買って、はやての車椅子を押して送っていく。

←
到着した途端「なあ、勇君。ご飯食べてかへん？」

←
やんわり断る

←
上目使い「……………だめ……………」

←
八神家テーブルにて待機中↑今ここ。

うん。

上目使いの恐ろしさ・・・たつぷりと味わった。

アレは卑怯だよ。反則だ。

断れるわけがない。

『マスター、女の子と間違われたを忘れてます。』

『うるせえよ忘れさせるよコノヤロー。』

頼むからさあ・・・。

「あの、八神さん？

何かお手伝いできることありませんかね？」

じーっとしてるのがちよっと居心地悪かったので、
はやてを手伝おうとした。

「ええよええよ。

勇君お客さんやからゆっくりしたらええねん。

せやからちゃんとテーブルに座ってまっててな？」

「でも・・・八神さん車椅子じゃないですか・・・ちよつとでも手伝いますよ。」

「こつみえてもこんなこと毎日やってんねんで？
せやから余裕や余裕。」

いや、それはそうかもしれないけど・・・。

「それにな？」

誰かと一緒に食べる晩御飯なんて久しぶりやから、
うちが上手く作っても他の人からみて美味しく出来てるか分から
へんから、

勇くんには毒見役もとい味見役になつてもらいたいねん。」

「お客さんを毒見役だと!？」

「おお・・・ええ突っ込み!

っていつかなんで敬語なん?

せつかく知り合えたんやし、タメ口でいこうや。」

・・・でも・・・。

原作に関わつちまうからあんまり関係持ちたくないんだけど・・・。

“誰かと一緒に食べるご飯なんて久しぶりやから”

・・・そういえば、原作では親もじいちゃんもばあちゃんも死んじ
やって・・・、

天涯孤独だったつけ・・・。

「・・・今の俺と同じだな・・・。」

何故かヤケクソ気味な笑いがでる。

この世に生まれた時から親なんていなかったのに・・・何でだろう?

「ん?なんかいうた？」

「いや、なんでもないよ、はやて。」

「お!敬語抜けたなあ。」

それでいいそれでいい!

よっしゃ！友達に遠慮はいらん！

手つだつてえな勇君！」

「はいはい。」

・・・偽善・・・でもいいか。

なんか楽しいし。

それに・・・。。。

「そうええ！？

勇君どんな包丁さばきしとるん！？

何？し、神速！？」

「いや、普通にやってるだけだけど・・・。」シュガガガガガガガガガ

僕の初めての友達だ。

「アビス、イモータルはさっきから反応が無いんだが・・・。」

「今、執筆中です。」

「は？」

「最近ブログ始めたみたいで・・・。」

「・・・・・・・・。」

気が付いたら夜天の主（予定）の家で晩御飯御馳走になった。（後書き）

はい、遅れました。

週一で投稿できたらいい方だと思って下さい。

チートな性能、一つだけ見せました。

え？何か分からない？

包丁さばきですけど・・・何か？

では、この次も見てくださいとうれしいです。

それでは、See you！

気が付いたらお隣がとんでもなかった（前書き）

まさかの投稿。

なんだ……頭が冴え渡る……！

気が付いたらお隣がとんでもなかった

幽亜勇です。

早速ですが、ヤバいです。

え？何故って？

目の前を見ていただけるとわかると思います。

「は、はじめまして、フェイト・テストロッサです。」

「あたしはアルフ・テストロッサ。

ま、せっかくお隣なんだからよろしくね。」

はい、お隣はテストロッサ家でした。

原作だとマンションじゃなかったか……？

え？マジこれどうなってんの？

あ、あれか？

よくある世界に俺というイレギュラーが混入したことによる改変ってやつか？

『となりに引越してきた美少女……よくあるラブコメテンプレそのままですね。』

いや、こういうのも熱くていいと思いま『黙れイモータル』い、
イエスマスター。』

「さて、ヤバいぞお前ら……。」

『何がですか？』

「なんかトラブルの匂いがする。」

『T o L o v e るの匂い……ですか？』

「イモータル……なんか違う気がするがまあいい。」

テストロッサ家の訪問から数分後。

デバイス共と会議中。

ちなみに軽く飯食らいながらです。

「個人的にあの子はトラブルを呼び込む気がする。」

というわけで挨拶もそこそこにして敬遠しようかと思う。」

『あの金髪の……フェイト様でしたか？』

先程スキャンしたところ魔力がA A A + ランク。

さらに雷の魔力変換資質持ち。

お姉様と思われるアルフ様もA A ランクはありました。』

『凄まじいな……まあマスターには及ばぬが。』

「俺はチートみたいなんだし、それに魔力もちゃんと“鍵”かけ
たはずだから今はD以下だよ。」

『その“鍵”が問題なんですよ……。』

そう、俺の三つある能力の一つ。“キーマスター”ってところか。

この世界風に言えば“希少能力”レアスキル。

魔力で“鍵”を作り出し、ロックしたい場所、モノ、に差し込み、捻る。

それだけで何かを封印できるスキル。

ただし、現在かけられる鍵は三個まで。

俺の魔力はSSS+オーバー。

流石の“キーマスター”でも

魔力は封印しきれなかったみたいで、

封印するために三つても俺のリンカーコアを封印するのに使ってる。

「いや、もう“鍵”使えないし。」

『残りの2つにも問題あるd「キヤアアアア!!!」っ!!!隣からですマスター!』

「うえ!?マジかよ!」

くそっ!

なんでこんなめんどいことになるかねえ!

気が付いたらお隣がとんでもなかった（後書き）

はい、やりました。

奇跡の投稿です。

さて、主人公のレアスキルについて解説したいと思います。

希少能力

名称 キーマスター

効果 魔力で“鍵”を作り出し、
鍵をかけたい場所、モノを指定。

それに差し込み、捻ること場所なら空間を固定。

モノならその機能を封印する。

主人公のリンカーコアはSSS+オーバーとなっているが、
実際、SSS+オーバーとしかランクがないので、
そうなっているだけである。

本当ならSランクのロストログアくらいなら“鍵”一つで封印できる。

とまあこんな感じの厨設定です。
では、ばいちゃ。

気が付いたらお隣を餌付けしてた（前書き）

はい、餌付けです。

バトル入れるのは結構先になりそうです。

気が付いたらお隣を餌付けしてた

皆さんどうも、幽亜勇です。

今どうなってるとおもいますか？

今僕は……。

「ふ、ふええええ……！」

勇、勇ッ！」

フェイトに泣きながら抱き付かれます。
どうしてこうなった。

く回想（あ、初めての回想だ。）

俺、全力でお隣に疾走中。

先程悲鳴が聞こえたためである。

悲鳴は恐らくさつき挨拶に来たフェイトのものだろう。

あれだったし、水樹奈々ボイスだったし。

ピンポン

「お隣の幽亜ですけど！何かありましたかっ！？」

反応無し……ならば……。

「入りますよ！（強行突破！）」

バンッ！

ボオオオオオオオオ！！！！

「ふえ、ふえ、フェイトお！はや、はや、はやっく、消して！火！火い！」

「む、無理無理無理！こ、怖いってばあ！だ、誰か助けてえええ！」

カオス。

その一言に尽きる。

コンロから燃え上がる炎。

慌てふためきまくっている金髪の少女とオレンジ色の髪のお姉さん。
なんだこの空間は。

「あーもう！慌てんなコラ！」

ずうずうしいとは思ったが、とりあえず火とフェイトの間に割り込み、

コンロを消す。

「ふう・・・もう何やってんだコラ！？」

火の扱いには「Y」「ふえええええええん！！！」ってグヴオ
アア！！？」

ってわけではい、冒頭に戻ります。

「ぐすつ・・・ひぐつ・・・。」

「あー・・・落ち着いたか？」

よしよし、と頭をなでる。

アルフは「べ、別にあわててなんかないよつ。」と何故かツンデしている。

何故。

「まあ、火災にならずに済んでよかったではありませんかマスター。」

「いや、まったく。」

さらにはお隣の少女との邂逅までばつちりで「何マジで普通に喋ってんだてめえらはあああああああああ！！！！！！」
「いや、おもしろくなりそうだったの？」

なんでいきなり喋りだしてんのこのデバイス共オオオオオオオオツ！！？

おい、お二人ぽかーん・・・って顔してんじゃねえか！！

「あ・・・あの・・・それデバイス・・・？」

「なんであんたが持つて・・・？」

っ！まさかあなた管理局の魔道士かい！？

そういつて何故か構えるアルフ。

「は？いや、ちがうよ？

待つて！？ねえ待つて！！

たのむから話きいて！

ちょ、まってまって！痛いのだから！

ちょ、助走つけないで！ふえ、フェイト！なんとかいってクルオボオ！！」

「だから違うつて、管理局とか魔法とかめんどくさくていやだから。あと今ので痛いのがもつと嫌になった。

あー、駄目だわ。

なんかアルフの分のご飯失敗しちゃいそうだわ。もう凄い勢いで焦げそうだわ。

卵焼きじゃなくて可哀想な卵になりそうだわ。」

「さ、さつきからごめんって謝ってるじゃないか……。

機嫌直してくれよ……あとご飯は肉がいい。」

『無駄ですよアルフ。』

『そうそう、マスターはあんがい根に持つから。

ほら、今にも肉がただの炭n「そんなことしないからね!？」』

はい、なんとか和解致しまして、テストロッサ家にてお食事です。発火の原因？

お腹すいた↓ご飯作ろうとしてフェイト頑張った。↓ゴマ油を何故

かコンロに直入。↓火遁の術。↓俺来た。

こんな感じ。

通りでなんか香ばしい匂いがすると思ったわ。

一応ですがフェイトやアルフには管理局の魔道士ではないと信じてもらえました。

それで、何故ご飯作ってるのが俺かというと。

余りにお腹がすいていたらしく、俺がアルフにぶん殴られた後、フェイトから「ぐっつ」と音が。

『う、ごめん……お腹……空いちゃって……／／／』

そして棚から取り出しましたるはカロリーメイト。もうね、なめてんのかと。

『なんでカロリーメイト！？』

何？バカなの？死にたいの？』

『え？いや、でもこれも以外と美味しいよ？』

『美味しい以前の問題だこのバカ！』

ゴスッ

チョップを喰らわす。

『ゝ！？？？』

『そんなんじや栄養もままならんし、下手すりゃ太っていくばかりじゃアホ！』

・・・しゃあない！俺が作る！待つとけコラ！』

『え？え？』

とまあこんな感じである。

フェイトは終始困惑していたが。

『めんどくさいと言いつつ面倒見のいいマスターが大好きですよ私は。』

「ハッ、アビス、デバイスに言われても嬉しくねえよ。」

「おら出来たぞ！

運ベアルフ！

特に肉を慎重に！」ポイツ！

「うおおおい！！

慎重にって言うてんのにあんたは何故投げる！？」パシッ

うつせ、さっきの仕返した。

『やっぱり根に持つタイプじゃないですか。』

それくらいいいだろが。

「「いただきまーす。」」

「うまつ！うまつ！？」

「うまーい！！」

「ほんとだ・・・美味しい・・・。」

「お、そうかそうか。」

「まだまだあるからガッツリ喰え！」

「そしてでかくなれ！」

ガツガツガツガツ

はむっ、もきゅもきゅもきゅもきゅもきゅ

性格が食べ方に表れているようだ。

「ほら、アルフ、がつつくな。」

「おい、こぼすなっつての！」

「あ、悪い。」

「でもなんでこんなに美味しいものがコイツから・・・。」

「あ、フェイト、米粒付いてるぞ。」

「え？嘘？」

「ほんとほんと、ほらよ。」

フェイトの口の端についでる米粒を取って喰う。

「・・・・・・・・あ・・・・／／／」

『ほうほうほう・・・・流石はマスター・・・・良い感じにフラグを乱立いたしますなあ・・・・。』

イモータルがなにか言ってくるけど無視。

やべえ、やっちまった。

と、とりあえず誤魔化そう。

「ほら、食わないのかフェイト？」

「え？あ、ああ、た、食べます・・・・／／／」

そう言つて食べるのに戻るフェイト。

顔真っ赤・・・・やべえ、もしかやフラグ立てたか・・・・？

だ、大丈夫！これくらいで立つほどやわ（？）じゃないさ！

あれ？

これあれじゃね？

餌付けしてね？

完全に介入してね？

気が付いたらお隣を餌付けしてた（後書き）

気が付けばお気に入りが13件・・・本当にうれしい事です。

コメントして下さったおーたん様、A V E E 様。

励みになりました。

これからもこのような作品でよろしければ、主人公共々よろしくお願いたします。

気が付いたら原作始まってたからのんびりしようと思ったたら神社で魔王に会った

頑張れてる。

俺頑張れてる。

今回は戦闘らしきものが入りませ。

気が付いたら原作始まってたからのんびりしようと思ったたら神社で魔王に会った

じゃんぼ！おーべーか！

自重します、幽亜勇です。

昨日、テストロッサ家の餌付けに不本意ながら成功いたしました。
そして、しばらく考えたんですが……。

もう原作始まってね？

だってフェイト降りてきたし。

そつえばなのはも念話してるわ、魔法についてユーノとお話（O

H A N A S H Iではない）してるわ。

ジュエルシードやらなんやら言ってたわ。

ってことはさ、これもうグータラしてりゃ終わるよね？

よし、なんかやる気出てきた！

今日は全力で寝るぞ！

俺はいつも昼寝するときによく行く神社へと足を向けた。

『ふふふ……さてさて、ほんとに面倒事に巻き込まれないんですかねえ……マスターは。』

『イモータル、急に話し方を変えないでください。』

そう、この時は忘れていた。
そういえば二つ目のジュエルシードって神社だったなあ・・・って
ことを。

SIDE なのは

学校からの帰り道に、ジュエルシードの反応を感知した私とユーノ
君。

山の上の神社で発動したらしいの。

「なのは！レイジングハートを！」
「うん！」

首から下げたレイジングハートを手に持つ。
階段を一気に駆け上がると、そこにいたのは大きな犬みたいなもの。

「原住生物をとりこんでる・・・！」

ユーノ君が険しい顔で言う。

「ど、どうなるの？」

「実態がある分手ごわくなってる！」

「大丈夫！・・・多分。」

何の根拠も無かったけど、でも、そんな気がした。

「なのは！レイジングハートの起動を！」

「へ？起動て何だっけ！？」

「え・・・？」

き、起動って何？

な、なんだっけ？

そうして悩んでる間にもジュエルシードの思念体さんはこっちに向かってきた。

えーっと・・・えーっと・・・！

「我は使命をから始まる起動パスワードを！」

「えええ！？

あんなの覚えてないよぉー！」

どどどどど、どうしょー！！

「も、もっかい言うから繰り返して！」

「わ、わかった！」

「グオオオオオオオオアアアアオアアオアアオア！！！！！！！」

そうこうしてる間に思念体さんはこちらに突っ込んできた。
もうだめだと思ったその時だった。

「我、地獄の使者、邪なるの眼まなこを持ちし者。

紅くれないのその眼に映るは我に仇なす者か、我が友か。
仇なすものには銃弾を、友には我が命を。

“アビス” set up

“yes master stand by ready set
up.”

どこからか聞こえたその声。
透き通るような声だった。

その次の瞬間、思念体さんは吹き飛ばされた。

「・・・まったく・・・。」

ふと、後ろを見た。

「めんどくせーことになった・・・完全に忘れてたわ・・・そういや俺って魔力感知できないの？」

『我々はきづいていましたが、マスターがお気づきにならなかったようなので、放置いたしました。』

『その方が面白くなりそうだったからですが。』

「お前らマジでいつか壊す。」

そこに居たのは、額に真っ赤な眼のような物が埋め込まれて、その下の二つの眼を隠すように真っ黒な仮面を付けて。

血みたいに真っ赤な服を着て、肩に大きな箱みたいなものを付け、両手に赤黒い銃を持った私と同じくらいの男の子が立っていました。

「さて・・・お前ら。」

「は、はい!？」

「ぼ、僕たちですか!？」

ユーノ君があわてる。

それはそうかもしれない。

だってあの恰好からして、凄く怖い。

「そ、お前ら。」

あのさ、あいつぶつ飛ばすのは簡単なんだけど、封印が出来ないんだわ。

それ、お前らに頼んでも良い？良いよね？異論とかマジ認めないから。

Do you understand ?」

「あ、は、はい！」

つい答えてしまう。

緊張していたのか、声が上がってしまふ。

それを聞いたその人は、ちよつと笑つて。

そして、思念体さんに向かつて、

「？キーリリース。」

その声と共に感じたのは。

「な、なんて魔力・・・！」

その人から発せられるとっても大きな魔力。

今の私なんか、比べ物にならないほどの、膨大な魔力。

「アビス、ショットソウルミラージュ。」

『All right my master .
shot soul mirage .』

そうつぶやくと、思念体さんの周りに出来るバリアみたいな球体。それはふわりと浮くと、その人の目の前に。

「悪いが・・・俺の昼寝の時間を邪魔した報いってことにしといてくれや・・・。」

シュート。」

そのバリアに向かって放たれる紅黒い弾。

その弾がバリアの中にずぶつと入った。

次の瞬間、バリアの中で弾は乱反射。

思念体さんを一つの弾が何度も何度も攻撃する。

「バースト。」

『Burst』

ズ・・・・・・パン！

バリアが小さくなったと思ったら、破裂。

バーストと言った割りには見た目が地味だった。でもわかる。

その破裂に込められた魔力を。

「おい。」

「ひゃ、ひゃい！」

「封印頼んだわ。」

「あ、はい！」

「え、えっと……じゃあなのは、パスワードを……。」

パスワードを教えてくださいようとするユーノくん。でも、その人が止めた。

「んなパスワードなんぞいらんだろ。」

お前のデバイスの名前は？」

「え、えっと、レイジングハートです。」

「じゃ、レイジングハートセットアップでいいだろ。」

言え。」

「れ、レイジングハート、セットアップ！」

「stand by ready set up」

途端、光に包まれて、私の手には杖になったレイジングハート。

「パスワードの詠唱を省略した……？」

ユーノくんは驚いてた。

その人は特に驚いた表情も見せず、指でジュエルシードを指した。

「封印。」

「は、はい！」

急いで封印する。

封印は無事に終わって、

その人に振り向く。

お礼を言わないと。

仮にも助けてくれたんだから。

「あ、あの！あ、ありがとうござい……？」

振り向いた先には誰もいなかった。

残ったのはバリアが破裂したときにできた魔力の残照。

なんでかわからないけど、その紅黒い光を見ていると何か心があつたかくなるような気がした。

気が付いたら原作始まってたからのんびりしようと思ったたら神社で魔王に会った

アビス

意味・地獄、深淵

主人公のインテリジェントデバイス。

バリアジャケットは紅い服。

外見を例えるなら戦国無双の雑賀孫一。

デバイスモードは二丁銃。

人格データは女。

普通に勇をからかつてはイモータルを援護したりもする。

戦い方も性格も後方支援。

とまあこんな感じ。

起動パスワードが難産であった

主人公のプロフィール紹介（前書き）

めたるみーと。（以下めたみ）「そっぴやさあ・・・。」

勇「ああ。」

めたみ「お前のプロフィールまだ紹介してない。」

勇「うん。薄々気付いてた。

なんかこいつ忘れてんなーと思ってたわ。」

めたみ「っつーわけで今からやるけど、能力についてはまだいっさい触れぬ。」

勇「ほう、それは何故に？

十文字以内で簡潔に答えよ。」

めたみ「ネタばれるから。」

勇「八文字とな。」

めたみ「いや、もういいから紹介しちゃうよ?。」

主人公のプロフィール紹介

名前 幽亜勇

性格 (自称)めんどくさがり 自分勝手 世話焼き

外見 髪色は黒。

大抵は寝癖が付いてる。

セツトアップ時には自動的にオールバックになる。

家族構成 なし

気が付いたら転生して、いつのまにか耳にデバイスがついてて、家族もいなくて、身体的に廃スペックになってて、チートで、なのはの世界に来てて、原作に介入しないように頑張ってるのに、運命力としかいえないものに引き付けられてる&本人の性分で原作に巻き込まれる。

なのは達とは同級生だが、必死で目立たないように頑張ってる。一軒家に住んでる。ローンは死んだ親が完済してくれたらしいことが判明。

家の隣が何故かテストロッサ家。 「いつの間にか餌付けが完了していた・・・な、何を言っ t (r y」

前世は高一のオタク。ちょこつとアニメみたり、ゲームしたり、s t s はつべのを見ようと思ったけど成長したなのは達がなんかアレだったので断念した。

ルックスは普通ちょい上。我流で剣練習中。

管理局はあんますきくない。

「だってなんかむかつくじゃん・・・時空管理局・・・プッwwおまwwほんとに管理出来てるんでwwすwwかwwww」

クロノとかアースラ組はきらいじゃないむしろ好きなのでエイミーとクロノの仲は応援してる。

ちなみにいっとくと勉強の点も赤点にならないように五十点くらいで調整し、チートな魔力を放出しないために鍵をかけて魔力を抑え

込んでる。

運動もチートな身体能力見せつけるわけにもいかなえので手抜いてる。

翠屋にはケーキとシュークリームがおいしいので個人的に通ってるが、なのはたちと顔は間違っても合わせないようにしている。

味覚は子供。料理はそれなりに（自称）できる。

家庭科は手を抜かないでもいいのですごく好きな教科らしい。

乙メンとか言わないでください・・・orz

顔立ちが中性っぽいので割とガチで女と間違えられる。

近所のおばはんにマジでワンピースプレゼントされたことがある。

現在三着のワンピースと、五本のニーソックスが、幽亜家のタンスに眠っている。

主人公のプロフィール紹介（後書き）

勇「・・・おい、めた。」

めたみ「何？」

勇「最後、何人の秘密暴露してんだよ・・・。」

めたみ「いや、俺作者だし・・・。」

勇「着てないからね!？」

絶対来てないから!!」

めたみ「そんなこと言ってー」

ホントは着たいく・せ・に」

勇「死ねやあああああああああつ!!!!」

めたみ「はっはっは!!」

効かないねえ・・・!!

こんな攻撃じゃ、あと一万回は攻撃しないと満足できないよ。」

勇「くっ・・・何故・・・!?!」

めたみ「伊達に“めたる”みーと。は名乗ってないってことさ!」

というわけで、プロフィールなんぞおいてみましたが如何なものでしょうか。

いつのまにかお気に入りが28とかいつて若干引いたと共にとてもうれしかったです。

これからも主人公共々よろしく願います。

気が付いたら夜の一族とツンデレが誘拐された（前書き）

前後編にわけた。

気が付いたら夜の一族とツンデレが誘拐された

皆様こんにちは。前回、魔力感知が出来ない事に気が付いた幽亜勇です。

ええ、特訓いたしました。

念話はできて魔力感知が出来ないじゃ洒落になんねえ・・・と思ったのですが、

あいにく、魔力探知が出来ませんでした。

できて半径4mってことです。

某ハンター漫画の旅団にいる侍の円の間合い位です。

狭いです。

富樫仕事しろ。

「あゝ・・・くそっ・・・どうにかして範囲ひろげられねえかな・・・。」

『念話が出来て魔力感知が出来ない、いやぁ・・・あれじゃないですか？』

ねえイモータル？』

『ああ、恐らくはアレだ。

マスター故に、あまりに強力すぎる力を持ったせいか・・・。

才能のメモリーを使い果たしたか・・・？』

「おい、なんでヒ。力なんだよ。」

富樫仕事しろ。

（最近はお仕事されてます。）

帰り道。

ついでなのでフェイト達にも飯作ってやろうと思い、スーパーで買

い
物。

「今日はどうしますか・・・。」

中華でいくか？」

「いいんじゃないでしょうか。」

フェイト様もアルフ様も食べたこと無いでしょうし……。

「じゃ、チンジャオロース……お、ピーマンハケーン。」

うお、牛安い・・・。

あとではやてんちにおすすそわけでもすつか？」

是非しましょう。

はやて様もお喜びになるはずです。

そんなこんなでホントに帰り道。

すっかり夕焼けになって、明日は天気によさそうである。

ふと、横を見ると、真っ黒なリムジンが走っていった。

あ、なんかみたことある……。

ああ、あれだ。アリサとすずかだ。

そういやこないだ塾行つたときに乗つてもらつたわ。

ん？そういえば……なんだっけ……なんかイベントあったよ

うな・・・。

SSで読んだ……ような……？

あれ……？なんかとてもじゃないが許せないことだったような……

● ○

次の瞬間、ワゴン車がリムジンの隣に密着。

ワゴン車の窓から、銃口がこんにちは。

ドンッ！パン！キキキィ！

タイヤに着弾。

さらつとドアを開けて「ちよ、はなしなさいよっ!!」「や、やめてください!!なんですk」ばたん!ブ□□□□□□□□□□
 ・・・さらっていった。

「・・・ああ・・・思い出したわ・・・。

これアレだわ、絶対阻止するから。」

『ま、マスター？』

とりあえず魔力でHMD作成。これで眼は隠せる。

・・・ホント、こんな使い方は出来るのによお・・・なんで魔力感知はできないんかねえ・・・。

「はあ・・・ま、無理やりなんて許せねえ性質たちでさあ・・・。

アビス、認識障害を貼れ。」

『い、イエスマスター！』

「イモータルはあいつらのアジトをつかみ次第警察に連絡。」『もうすでに発見しております。

マイマスター！。

私といたしましても、無理やりは許せませんので・・・。」

「へっ・・・さて・・・じゃ、いこうか・・・。

skill on" gravity master"」（重力操作）」。

俺のレアスキルの一つ。

重力操作。

俺が指定した場所の重力の方向を変えたり、強めたりできるスキル。ただし、出来る範囲は俺の半径二メートル内なため、遠距離には向いてない。

が・・・。。。

「なんてことはねえ・・・ちょっと重力を傾けて・・・ただ走るだけえっ！！！！！」

走りだす。

「イモータルッ！」

ガイドしろぉー!」

『Yes master!』

アリサSIDE

私はずかとふたりでリムジンに乗ってた。

塾の帰りにずかと車で話しながら帰って、いつもと同じ。

「そつえば、今日も幽亜君来なかったね。」

「まったく・・・私たちがせっかく送ってやるうって言ってるのに毎回毎回やんわり断ってきて・・・。」

私たちと行きたくないっての!？」

「あはは・・・なんか恋する乙女みたいだねアリサちゃん・・・。」

「Σは、はぁ!？」

ななななな、何言いだしてんのよすずか!」

「じよ、冗談だつてば・・・。」

「まったく……最近はなんかなのはまで付き合い悪いし……。」

最近のなのは何か変だ。

ぽーっとしてたかと思えば、急に真っ赤になりだすし。

「なんか悩みでもあるのかな？」

「悩みがあるなら私たちに話してくれてもいいじゃない・・・なのはの馬鹿。」

本人が聞いたら、「にゃっ!？」とかいいそうなセリフ。
思わずちよつと笑ってしまった。

「まあ、そのうち話してくれると思うよ？
多分今は事情があつて話せないだけだよ。」

「そうだといいわねえ・・・。
ま、気にしてたつてしようがないわ。

明日当たりすずかの家でお茶会でもしようかしら？」

「あ、いいねえ。」

なのはちゃんと恭也さんも呼ぼうか。

あ、あと幽亜君も呼んだらどうか？」

「あいつが来るとは思えないけど・・・駄目もとで誘ってみましようか？」

あいつは何回も私達と一緒に塾に行くことを断っている。
何故かはわからないがなんとなく避けられてる気がして、少し悲しかったりする。

「なんであいつは私たちを避けるのかしらねえ・・・。」

「うゝん・・・どうなんだろうねー。」

なんか事情があるんじゃないかな？」

「あいつも事情抱えてんの・・・？」

はあ・・・相談ぐらいなら受けてやるのに・・・。」

これはなのはにも幽亜にもどちらにも言えることだが。

そう考えてふと、外を見ると、一台のワゴン車が近づいてきた。

「・・・？」

なにかしら・・・？」

「・・・！！？」

アリサちゃん！アレ！」

「！？拳銃！？」

隣のワゴン車の窓から拳銃の銃口が突き出てきた。
下に向かつてるから狙いは……タイヤ？

ズダァン！パァン！

「「キヤアアアアア！！」」

大きな音と共に車体が傾く。

タイヤがパンクしたんだろう。

キキキイ！

リムジンが止まる。

「いたた……。」

「だ、大丈夫？ ずずか……。」

「な、なんとか……。」

「あーさ、鮫島！？ 大丈夫！？ 鮫島！？」

「う……………」

鮫島はどうやら頭をぶつけて気絶しているらしかった。
少しほっとする。

だが、安心したのも束の間。
ドアが開く。

その先には黒ずくめの男達がロープを持って立っていた。

「アリサ・バニングスと月村すすかだな？」

ロープを持った男が聞いてくる。

「だったら何だったのよ！」

「あ、アリサちゃん！」

「おい、乗せろ。」

「ちよ、放しなさいよ！」

「暴れんなガキ！」

「止めて下さい！何なんですkΣふぐうつ！？」

「すずか！？」

あんたらすずかに何すんんんっ！？」

タオルの様なもので口を塞がれる私とすずか。
ワゴン車が発車した。

私たちは一番後ろに縛られたまま放置された。

気が付いたら夜の一族とツンデレが誘拐された（後書き）

後半へ続く。

（ち。まるこちゃん風に）

気が付いたら前後編に分かれていた。な、何を言っ t r y

続いてアリサSIDE

今、私とすずかはどこかの部屋に監禁されている。
手も口も縛られたままだ。

（多分私達の家から身代金をとるのが目的でしょうけど……。）

隣にいるすずかの方を見る。

その眼が少し怯えているように見えた。

（大丈夫……あれだけの大通りで誘拐なんて大それたことしたんですもの。）

誰も見てないはずがない。

誰かが警察に通報してくれるはず……。

ガチャ

「おーおー、大人しいもんだ。」

誘拐犯の一人が部屋に入ってきた。

相変わらず黒い覆面をかぶっている。

その男は、私とすずかの口のタオルをほどいた。

「ゲホッゲホッ！」

「ハア……ハア……あ、あんた達、何が目的!？」

「何と言われてもな、金としか言えねえなあ。」

ニヤニヤと気色悪い笑みを浮かべる男。

「ま、俺がここに来たのは他でもない。

ちよつとバニングスさんちに脅迫のためのビデオメールでも送ろうと思つてなあ?」

男がパチンと指を鳴らすと、

数人の男達が撮影機材らしきものを抱えて入り込んできた。

「大丈夫大丈夫、ちいといたずらするだけだからよ。」

「な、やめなさい!

離しなさいよ!!」

「あ、アリサちゃん!?」

最悪だ。

こんなやつらに……怖いよ……怖いよお……!

「ひっ……ひぐっ……うええええええ……!?!」

「おほっ、こいつ泣いてやがる!

いいねいいねえ!そそるよ!それ!」

「お前……相変わらず変態だなあ……眼がやべーぞ?」

『いや、お前らの変態度も群を抜いてるぞ?』

突然聞こえてくる声。

私達と同じくらいの男の子みたいな女の子みたいな声。

「だ、誰だ!？」

どこにいやがる!」

『あゝ……なんか楽しいわゝ……こういうの一回やってみたかったんだよなあ……。』

「だからどこにいるつつつてんだろ!」

「上だよ上。」

犯人が上を見る。

そこに、は人がぶら下がっていた。

いや、人が立っていた(……。)。

逆さまに、人が立っていたのだ。

「な、なんだあ!？」

「あはははは、なんかいいねえ!昭和のヒーローものみたいでさあ!」

目に何か機械を着けて、

天井に立つそいつは自分に銃口が向けられているのにも関わらず、へらへらと笑っている。

「うゝん……じゃ、例のあの人のセリフパク……リスペクトしようかな?」スタ

天井から私達と犯人の間に降りてくるそいつ。

背丈は私達より少し高い位だ。

「……幼き少女を己が欲望のままに弄び、

さらには辱めようとした。

人それを……

“ペドフィリア”と言う。」

何だろう、なんか某天空宙真拳の人が見えた。

「だからなこといいからてめえは誰だって聞いてんだよ!!」

あ、それ言っちゃうと……

「貴様等に名乗る名はないっ!」

完全に某天空宙真拳の人だ……。

「悪いけどよ、無理やりって許せないんだわ……つつうわけで、大
人しくしてくれば危害は加えないが……抵抗するかい?」

「は……ははははは!」

こいつはお笑いだ!

俺等が今てめえに向けてるもんをわからねーってのか!?

そう、犯人達は銃を向けてるのだ。

それもいくつも。

それでも、

「いやいや、んなもんで俺を殺せると思ってるなら止めたほうがいい。
い。」

死なないまでも骨五、六本は覚悟しろ?」

余裕綽々。
声も震えてない。

「ふざけやがつて……。」「ジャキ
「なあ……。この部屋狭いなあ？」
「ハア……？」

突然何だつてんだ？」

「いんや、なんもない。」

さて、早速だが。

何も理解することなく、
何も記憶することなく、

……………“沈め”。」

ズガン！！！！

瞬間、犯人は床に叩きつけられた。
何も見えなかった。

何が起きたのか理解もできなかった。

「あ……。かは……。っ？」

「あっははは、急に静かになったなあおっさん。」

大丈夫かーって聞いてないか。
そういつて少し笑って、こちらに向かってくる。

「怪我ないか？」

「え、えと、大丈夫……。」「

「ん、そっちは？」

すずかSIDE

「ん、そっちは？」

私達を助けた人。

今まで気が付かなかったけど、片手にレジ袋を下げているのがわかった。

「……………」

「ん？どした？」

目を覆い隠すように装着されたHMD。

「おーい見えてますか？」

黒い髪。

「ダメだこりゃ。

……………」

「ひゃあああつー！！」

「よし、猫だまし成功！」

びつくりした。

この人を見るのに夢中で気が付かなかった。

「はい、お二人さん、御生還おめでとさん。

一応警察は呼んだけど、僕のこと色々言われちゃ困る訳なんだが……………」

言わないでくれるかにゃ？」

ぶんぶん。

首を縦に振る。

「うわ、凄い勢い。」

「じゃ、お願いしますわ〜。」

「……………あ。」

私は彼を観察しているとあることに気が付いた。

「ち、血が……………出てますよ?」

「え? あ、ほんとだ。」

右手の袖から血がポタポタと流れ出していたのだ。

「も、もしかして撃たれたの!?」

アリサちゃんも気付いたらしく、うろたえている。

「ん……………違うんだなあ……………ちょっと力使っちゃったからさ。」

「まだ軽い方だし別に構わん。」

「軽い方って……………」

軽い方には見えない。

血がだらだら出て来ているのだから。

「あ、警察も来たみたいだし、そろそろ行くわ。こいつらは外に全員持っていくからあと君らがやる仕事は、警察への言い訳を考えること。」

OK?」

「は、はい。」

「うつし！！んじゃ、また縁が有ったら。」

そう言うのと、彼は六人いた犯人を片手に三人ずつ持って引きずって行った。
ボタン。

アリサちゃんも私も、

彼が去って行ったドアを見て、しばらくポーツとしていた。

「アリサちゃん……。」

「何……すずか……？」

「名前……聞きそびれちゃったね。」

「………あ。」

「また……会えるかなあ………？」

「………どうかしらね………縁があればって言ってたし………縁があれば会えるんじゃないかしら？」

「………うん。」

気が付いたら前後編に分かれていた。な、何を言っ t (r y (後書き)

はい、お楽しみいただけましたでしょうか。

なんと10000アクセス突破です。

どういうことだ w w

お気に入りも40いった w w

こ、怖いよう w w

お気に入りして下さった方々、

これを読んで下さった方々に、精一杯の感謝を。

ありがとうございます。

ロム兄さんは思い付いたから即実行しました。

ごめんなさい。

気が付いたら何故か月村家に拉致された（前書き）

17000アクセスありがとうございます。
お気に入り55件、本当に嬉しい限りです。
楽しんでいただければ幸いです。

気が付いたら何故か月村家に拉致された

Здравствуй 幽亜勇です。

え？何語？ロシア語・・・らしいよ？

さて、皆様、私は今・・・月村家にいます。

は？サッカーイベどしたって？

無視だ！

「あんた・・・異常に猫に好かれまくりじゃない・・・。」

「あはは・・・うちの猫たちが一斉に・・・。」

「にやははは・・・（こ、こんな光景は生まれて初めてなの・・・。）」

「きゅ・・・。（い、一歩間違えれば僕もあんな風になってたってことか・・・。）」

「み、見てないで助けて下さいよお願いですからあっ!!」

・・・猫に蹂躪されております。

「はあ・・・はあ・・・Σってまだ寄ってくるんかいっ!？」

「あっははははは・・・あ、あんたなんか猫に好かれる呪いでも受けたの？」

ぷっ・・・あはははははは!!」

「わ、笑い事じゃないってーっ!!」

う、うおおおおおおお!!!!!

逃げ切ったるわああああああ!!!!!」

ズドドドドドドドドドドドドドドド

走れ！走れ俺！

どうしてこうなった！

あ、そうだ！

すずか&アリサに拉致られた

途中でなのは&恭也のつけた。

自己紹介した。

「幽亜勇といいます。

一応同じクラスですが知りませんよね？」

「うっん、アリサちゃんとかすずかちゃんに色々聞いてるの。」

「高町恭也だ……。」

この間恭也さんに睨まれまくり。こんな感じ

屋敷到着。

つづいて、メイドさんのファリンさんが紅茶持ってきた瞬間猫襲来。

猫と鬼ごっこと言う名の闘争開始。↑いまここ

あ、今の闘争と逃走をかけたんだ。

うまくね？

『早く逃げないと追いつかれますよ』

「『おまえらは現実逃避もさせてくれねーのかあああああああああ
ああ！！！』」

不幸だあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

某そげぶの人の口癖がつい出た。

「はぁ・・・はぁ・・・に、逃げ切ったか・・・？」

『反応無し。』

逃げ切ったようです。

おめでとうございますマスター。』

『マスター、ああいうのは擬人化を妄想すると受け入れられるらしいd』ほほう、そこまでして割られたいようだなイモータル。』 N
O s i r ! ! 』

なんとか逃げ切ったみたいだ。

さて・・・

「ここはどこだぁ・・・？」

迷った。

だって無駄に広いんだもの・・・。

「っていうかさぁ・・・これ来るよな？

運命力ガッツリ感じるんだけど・・・。」

『ま、それがマスターですからね。』

あ、ジュエルシードの反応をキャッチしました。

それに伴い、フェイト・テストロッサ。及び、ユーノ・スクライ
ア、高町なのは。

動きました。

如何なされますか？マスター。』

「もちろんスルーだ！」『残念ですがマスター。
そうはい神裂。』

「キーリリース！」

「は？」

「ちょ、おま！？

いつの間に俺のキーのリミッター握ってやがった！？」

「やってみたらできました。」

「すげえなてめえ！！

ってかどうするんだよう！

これ完全に魔力感知されたる！

ああ！もう！！

このアホデバイス！」

「って、おい！？

あれあの猫だよな！

「で、でか……。」

生でみるとやっぱり違うもんだなあ……。

「ってんなことしてるばあいじゃねえ！」

『フェイト・テストロッサ、高町なのは、両名共に到着。

フェイト・テストロッサ、猫に対し、攻撃を開始しました。

如何致しましょうマスター。』

あゝっ！もう！

少しは考えさせろよ！

フェイトside

目の前の白い魔導士の女の子が余所見をした。

わたしが撃った猫が呻いたのを心配したんだろう。

でも……その優しさが命取り。
バルディッシュに魔力を込める。

「……………ごめんね。」
『fire』

魔導士に向かって雷の魔力弾が走る。

「……………我、不死者、邪なる眼持ちし者。

漆黒のその眼が捉えるは我を貶めんとする者が、
己が盟友か。

貶めんとする者あらばその者には斬撃を。
盟友には我が拳と剣を。

“イモータル” set up
『yes master stand by ready set
up』

ズガアアアアン!!!!!!!!!!

「……………バルディッシュ……………行k「オイコラ」!？」

魔力の塊。

今の私でも……母さんも勝てるかどうか分からない位の魔力の量。

「……………新手の魔導士……………？」

私が撃った白い魔導士を庇うように、誰かがそこにいた。
私と同じくらいの背丈。

額に黒い眼のようなものが埋め込まれ、
紅いサングラスをかけて、黒い鎧のようなものを纏っている。

腰には剣のようなものが付いていた。

「あのさあ……とりあえず言っけどさ。」

「え、は、はい。」

「ジュエルシードもう貰っていい？」

「!？」

驚いた。

何故か私には分かった。

目の前にいる彼は私の味方は勿論。

庇ったはずの白い魔導士の子の味方でもない。

「あ、勘違いすんな？」

「ここでお前らと戦うなんてしねーから。

だから構えるのを止めれ、フエレット。」

「でも、それは危険なものなんだ！」

「そう簡単に渡すわけには……！」

「うつせーぞユーノ・スクライア。」

「!？」

この人から敵意を感じない。

敵ではない。

でも味方でもない。

「はあ……ま、いいや。」

一つ溜め息をつく、猫のほづに手をかざした。

「ジュエルシード、シリアル??……封印。」

『yes master』

猫からジュエルシードが出てくる。
ジュエルシードを失った猫は、小さくなると、どこかに行ってしまった。

「……貴方は……封印出来ないハズでは？」

「人の言葉を信じるのは勝手だが、信じることで、利用されることもある。」

つまりはそういうことだ。」

彼の手のひらから額の眼にジュエルシードは収納された。

彼は強い。

有り得ない位に。

でも……。

「すみませんが……私も引く訳にはいきません。」

「この間助けていただいたいてなんですけど……ジュエルシードはユーノ君の大切なものの……だから渡すわけにはいかない！」

私はバルディッシュを構える。

向こうの白い魔導士の子もデバイスを構えた。

「……………はあ……………」

『これも運命ですマスター。』

『そう、運命力です。』

はあ……………。と、もう一つ溜め息をつく。

彼は拳を構えた。

「……………かかってこいよ……………お前らが俺に勝てたら、こんな石く

れてやるよ。」

額の眼が蠢き、こちらを睨む。
黒い眼。

全てを見透かすかのような眼。

おそらく私やこの白い魔導士の子でも、彼にはかなわないだろう。
しかし……。

「……バルディッシュ！」
『ScytheForm』

今、私はどの位強いのか知りたい！

「とりあえず……ここは三人掛かりでいくの！」
『ShootingMode』
「分かった！」

白い魔導士の子とフレットも構えた。

「……行くぞ。」

「ハアアアッー!!」

バルディッシュを構えたまま、突撃する。

「よつと。」
「ヒョイ
くっ……!!」

精一杯速く動いても、やはり、かわされる。
白い魔導士の子がデバイスに魔力を込める。

「デイバイイイイイン……バスタアアアアア！！」

「“月喰”」

『eat barrier』

バシユウウウ……。

「もー！さっきからその盾反則なの！」

「んな危ない魔法ぶっ放してくるからだ……『Move』ろっ！」
ズガン！

「キヤアアアアアア！！」

そう、あの“月喰”という盾。

私達が放つ砲撃をことごとく吸収してくるのだ。

私の鎌も当たらないし……どうしたら……？

「考える暇があったら相手の動きをよく見るフェイト・テストロツ
サアッ！！！」

「！？」

『protection』

「“拳墮”アッ！！！」

ズガアン！！

「……………かはっ……………！！」

プロテクションを破ってバリアジャケットの上からで尚この威力……。
……。

ただのパンチじゃない……？

「いつけえ!!」

『Divine Shooter』

彼が私に集中してる間に、

白い魔導士の子が誘導弾を展開する。

「バインドッ!!」

「……。」

フレットのバインドが彼を捕らえる。

しかしながら、その表情は落ち着いていた。

「シューーーート!!」ガガガガガ!!!!

白い魔導士の子の誘導弾が決まった。

「まだまだ……!!」

彼がこれでやられる訳がない。

追い討ちをかけるべく、魔力を込める。

「サンダアアアア……」

「デイバイイイイイン……」

「レイジッ!!!!」

「バスタアアアア!!!!」

ズギアアアアアアン!!!!

私の雷と魔導士の子の砲撃が轟音と共に彼に炸裂する。

「……やった……かな？」

「わからない……でもまだ用心して……えーっと……」

「あ、私なのは。」

高町なのは。

「僕はユーノ。」

ユーノ・スクライアだ。」

「フェイト・テストロッサ。」

よろしく。」

「自己紹介は終わったか？」

「「「！？」」」」

煙が一瞬にして吹き飛び、彼が現れる。

彼は一步もそこを動いてなかった。

腕を組んで、相変わらず額の眼がこちらを睨んでいた。

『マスター、いい言葉をお教え致しましょう。』

「ほう、なんだイモータル。」

『“ご都合主義”です。』

「今の状況は違うな。」

何故なら俺が意図的に自己紹介が終わるのを待っていたのだから。」

『oh……そうでした……。』

うんうん、仲良きことは良きことかな。

と一人頷きながらデバイスと漫談のようなこともしている。

「さて……せつかくのバトルなんだ……。」

「……来るよ、なのは、ユーノ。」

「ふえ？あ、うん！」

私達はデバイスを構え直す。

「少しは楽しまねーとな……いくぞお前ら……しっかりガードしろ？」

そう言うとは、右手を前に突き出すと、小さな魔力弾を3つ作り出した。

『lock on』

「どん。」

魔力弾が私達に迫る。

余り速くもなく、込められている魔力も少ない。余りに拍子抜けだが、私のバリアジャケットは薄いのでガードはしなけければならぬだろう。

「バルディツシュ。」

『protection』

私の前に円形の盾を張る。

これでも薄いだが、あの魔力弾ならこれでも大丈夫。盾に着弾した瞬間。

シュルルルル！

「え！？」「」

私達の身体はバインドに縛られた。

「さっきユーノに言わなかったか？

素直にガードしろって信じて……。

弾速が遅いからって油断してちゃ駄目だぜ？

例えば、俺の“絡弾”（からめだま）みたいに、

着弾した瞬間にバインドが発動して、

そうやって動きを止められ……。」「

キン！

「「「！？」」」」

「そうやって魔力を喰われたり。」「

バリアジャケットが強制的に解除された。

飛行機能も解除されたらしく、落ちていく私達。

「レ、レイジンググハート！」

『すみません、マスター。』

魔力がギリギリ足りません。』

「そんなっ！？」

「バルディッシュ！」

『右に同じですマスター。』

「くっ……。！」

もうダメ……。！

そう思い、目をつぶった。

……あれ？

「慌てるねえ……」

「可愛いもんだ。」

耳元から彼の声が聞こえる。

目を開けると、目の前に彼の顔があった。

一瞬ドキツとしてしまった。

「あ、あの……お目々さん……下ろしてなの……／＼／」

「あ、わり……って誰がお目々じゃ！」

「あの……僕も下ろして……／＼／」

彼はなのはを背負い、

男……の子？（いたっけ？）と私を片腕ずつ抱きかかえていた。

バリアジャケットは消え、魔力もほとんど吸収され、ほぼ残ってない。

「……完敗です。」

「三人掛かりでも無理だったの……」

「ってあれ、僕いつの間にか元の姿に……？」

「魔力だけじゃなく魔法まで喰っちゃまうからなあれ。」

変化とかも解けるぞユーノ。」

彼はバリアジャケットを解かずに目の前に仁王立ちしている。
 つてユーノ？

「ええええええ！！！！？」

「ユーノくん、人間だったの!？」

「あれ、なのはにはこの姿見せてなかったっけ？」

「初見なの！」

ユ一ノって人間だったんだ……。

「さて、じゃ、ジュエルシードはいただくが……異存ないな？」

負けたのは事実。

彼も勝てたらジュエルシートを渡すと言っていたし。

「負けは負けだから……。」

なのはも同じ意見のようだ。

「待って下さい！」

ただ、ユーノは何かしら文句があるらしい。

「はい、ユ一ノ君。」

意見があるなら手を上げた後で、

語頭に“来いよベネット”語尾に“銃なんて捨ててかかってこい！”と言いつつ述べるがよい。「なにそれ!？」

「いや、ノリ。」

閑話休題。(↑一回使ってみたかったB Y作者)

side out

「ジュエルシードは凄く危険なものなんです。

人の願いに反応して暴走してしまう。

やっぱり僕達に引き渡してくれませんか？」

ユーノの言い分も最もだな。
しかしだ。

「お前ら……負けたんだろ？」

「……うっ……！」

「敗者は敗北感と悔しさを味わって、勝者に嫉妬してりゃいいんだよ。」

「そ、そんな言い方は「んで、だ。」……？」

「もう一度奪いに来い。」

もっかい鍛え直して、俺に勝てるようになったら……もう一度……な。

そんなときまで、これも、お前らのも預かっておく。」

何かしら罪悪感感じたので、とりあえず言っておく。

多分、これでこいつらは鍛えてくるだろう。

ま、俺も全力は出さないが、本気ではやる。

それに勝てるようになれば、

恐らく原作より強くなっちまうだろうが、

それもいいだろう。

「……………わかりました。」

「次は……………勝ちます。」

「頑張るの！」

うんうん。

良きかな良きかな。

あ、あれ？

俺自分で魔王、死神、狼、淫獣、執務官とのリンチフラグ立てた？

その後、テストロッサ家にて。

「あのね、勇。

今日初めて勇以外に友達ができたんだよ！」

「ほうほう、フェイトも大きくなったのだな……………おじさんは嬉しいぞフェイト。」

「あんたのどこがおじさんだいどこが。」

でも良かったねえ、フエイト。

プレシアもアリシアも喜ぶよ。」

「うん、いつかお家に招待できるといいなあ……。」

「なん……だと……？」

プレシアは原作通りではなさそうです。

気が付いたら何故か月村家に拉致された（後書き）

イモータル

意味：不死者

バリアジャケットは黒い鎧。

外見イメージは鬼武者、明智佐馬乃助。

今回使用しなかったが、

腰には一振りの刀が刺さっている。

基本的には、魔力を吸収する技を使う。

攻撃手段は殴るか蹴るか斬るか小さな魔力弾を撃って縛るか。

当初は主人公に忠実なデバイスだったが、

作者の独断と偏見で魔改造したら、

2ちゃんねるやVIPでそこそ有名なSS作家になった。

ブログもやっており、

様々なジャンルにチャレンジする、ある意味で高性能デバイス。

アビスと同じくらいの性能ではあるが、

アビスよりもハッキング技術に優れ、

こないだ旅行がてらスイスの銀行のシステムに2日間滞在したらしい。

いっぱいお金あった。

気が付いたら今度は高町家に拉致されていた（前書き）

寝てないです。

眠いです。

しかし頑張ります。

まったく・・・つべでアニメ見て設定合わせ頑張るしかねえ！

気が付いたら今度は高町家に拉致されていた

カポーン

「ふいふ……。」

「きゅ……。」

只今、ユーノと絶賛入浴中です。

朝、俺がデュエルマスターズ（何故かこの世界にはあった。）のデッキを調整していたら、突然チャイムが鳴った。

「はいはい、今開けますよ。」

ガチャ

「勇くん、おはようなの。」

満面の笑みで、魔王様がそこにいた。

「は、はあ……おはようございます……？」

えーっと……今日はどういったご用件で……？」

早く無敵城シルヴァーグローリーとリーサで無双したい……。

あ、でも相手がダークルピアのドラゴンデッキだったら死ぬしかねえや。

でも相手のデッキの回りが悪ければいけるか？

「一緒に温泉行くよ！」

「拒否権無しですかそうですか。」

「え？でもアリサちゃんはどうせアイツは休みの日用事ないからって……。」

アリサエ……………。

確かに用事無いけど！

暇すぎてデッキ調整してたけど！

新しく遊戯王（これも何故があった。）も始めようかなと思ったけども！

植物デッキの新風を起こそうとしてたけども！

「失礼ですが、今回は断らs「ほう、なのはの誘いを断ると？」恭也さん……。」

彼女持ちのシスコン御神流の剣士。

でもシスコンは二次創作の中だけじゃなかったか？

「まあ、行こうじゃないか。

聞いたとこ一人なんだろう？

男同士裸の付き合いなんてどうだ？」

恭也さんぐいぐいきます。

何？何が目的なん？

ま、まさか……高町流 O H A N A S H I を……。
いや、むしろここで断れば O H A N A S H I が来るのでは…
…。

「な、いくよな？」

「勇くん、いこ？」

「……………はい……………」

人生諦めが重要。

今日の重要語句なこれ。

『諦めて原作に絡めばいいのに……………』

イモータルはとりあえず自重しようぜ？

と、いうわけで。

「ユーノ……きんもちいいなあ……………」
「きゅ……………」

ユーノと勇。

これはもうユーユーコンビ結成しかない！
と、いうことで温泉にコンビの仲を深めるために入浴中であります。

「よし、ユーノ。」

おじさんが背中をながしちやろう。」

「きゅ？」

「遠慮すんな遠慮すんな。」

ほれほれ、ごしごしと。」

「きゅ、きゅううん・・・／＼／」

「お、気持ちいいか？」

よっしゃ、もつとやっтар。」

くそう・・・動物状態だめつさかわええ・・・。

いや、アニメで見てた時は凄かったけど。

立派な男の娘っぽかったけど。

「ユーノと仲良いな勇。」

「ま、ユーユーコンビですんでね。」

恭也さんは・・・家族風呂で月村さんのおねえさんとイチャイチャしたりしないんですか？」

「ブハッ!？」

しよ、小学生が知ることじゃない!！」

「そんなこといつて・・・《もう、照れ屋さん》」

「や、やめる!」

忍の声真似はやめる!」

っていつかなんでそんな似てるんだ!」

「《はっはっは・・・よかったのか?」

ホイホイついて来て・・・。》」

「お前の声帯どうなってるんだあああああ!!!??」

うん。

怖い人かと思いきや、意外と面白い人だ。

ちなみに、声真似は俺の前世からの得意技だったのをこないだ思い出した。

出そうと思えば結構出るもんだ。

ちなみに、某やらないか漫画はあった。

そして某動画投稿サイトも存在していた。

遊戯王もシンクロ・エクシーズあったし・・・。

何これ。なんで色々時間ごっちゃになつてんの？
ま、いいけど。

「ま、いつも一人なんで・・・こういうのもたまにはいいですね。」

「ははは、そうかそうか。」

「いや、それならさそつたかいがあつたよ。」

士郎さんが頭を洗いながら話しかけてくる。

ちなみに俺の右隣に士郎さん。

左隣に恭也さんという感じである。

「あ、そうだ。」

士郎さんも桃子さんといちゃねとするんですか？

「ブフォオオオ！！？」

ね、“ねと”ってなんだ“ねと”って！？」

「《いやあねえ、あなた♪

決まってるじゃないの。》

恭也さんより大人ですから大人のいちゃいちゃでしょ？

つまり“ねつとり”するんじゃないですか。」

「や、やめてくれ！

桃子の声から、そんな純粹な眼でみないでくれ！

っていつかどこでそんなこと知った!？」

「《禁則事項です》」

「だから声帯どうなってるんだ!？」」

うむ。

親子で面白いとは・・・ネタに困らん。

「ふいっ・・・ユーノ。

フルーツ牛乳飲むか？」

「きゅっ!」

ユーノが駆け寄ってきたので、とりあえず器に入れる。

「うまいか？」

「きゅー!」

「うんうん。」

そうかそうか。」

ほんとこいつかわいいな・・・。

動物になるとその本能故に動物に近くなるってことか？

「あんた・・・ユーノの言葉わかるの？

すっごい親しそうに話してたけど。

っていうかあんたいつまで敬語なの？」

「・・・バニングスさん、動物の声は聞くものではありません。」

もしくはすぐく大胆な行動をして見せた。
等という普段とは違うことをギャップという。

マスターは、普段は敬語を使い、さらに容姿は男の娘。

そのマスターが敬語ではなく、タメ口で、しかも呼び捨てにした行為が、

何故かこの御三方のツボにクリーンヒットしたのだと私は推測する。」

『お前、馬鹿なの？』

もうイモータルはほつとこう。

それが一番だ。

つてかさつきもイモータルでちょっとしたオチになってなかった？

夜、夜である。
つまり……。

『マスター、ジュエルシードの反応をキャッチしました。』

『………寝たい……。』

『そうはいきませんよマスター。』

？キーリリース。』

『ですよね〜（泣）』

じゃ、行きますか……ジュエルシード奪いに……。

「アビス、setup」
「All right master setup」

「お眼々さん!？」

「お眼々さんじゃ・・・ないんだけど・・・。」

到着いたしました。

いやぁ・・・流石にアルフがいるやん?

匂いではれたらやばいやん?

匂い消すためにフアブリました。

「あんたが・・・ジュエルシードを奪っていく奴かい？」

「ま、そんなとこだよおねーさん。」

とりあえず、いつまでもお眼々さんじゃアレだし。

名乗ろうかな?

フェイク
俺は贋作。

と、自己紹介もおわったところで・・・頂いていきますが・・・

抵抗するかい？」

「勿論!！」

「だろうと思った!」

「デイバイイイイイイン・・・!」

「サンダアアアアアア・・・!」

「ブラッディ・・・!」

「バスタアアアアアアアッ!!!!!」

「スマツシヤアアアアアツ!!」
「ドレインツ!!!」

アビスから放たれた小さな八つの珠。
その珠はとても小さく、とてもじゃないがこいつではあの砲撃は破壊できない。

そう、“破壊”できないが・・・。

ズチュ!!!

「「「え!?」」」

驚くのも無理はないだろう。

俺の“ブラッディドレイン”は文字通り“吸収”する技。
その珠に触れた魔力を“喰い”肥大化していく魔法。

「あ、その珠に触れない方がいいよ?」

そう言つて、俺は彼女たちの砲撃を全て吸収した珠に一発魔力弾をぶち込んだ。

ドゴオオオオオオオン!!!!!!

「こんなふうに爆発するから。」

で、この状態を俺は“ブラッディバルーン”って呼んでる。
それからそれから・・・。」

そう、この珠はトラップ系。
相手の砲撃を喰い、そして爆発する。
が、

「操作も出来ちゃったりするんだなコレが。」
「！？みんな僕の後ろに！」

一斉に向かっていくブラッディバルーン。
お、ユーノ、止める気だな？
漢だねえ・・・よっしゃ、乗ってやるか！

ズドドドドオオオオオオオオオオオン！！！！！！

煙が晴れた。

そこにはいまだ健在のユーノの盾と後ろにいるのはとフェイト。
・・・アルフは・・・？

『マスター、後ろです。』
「らあああああつ！！！！」

殴りかかってくるアルフ。
でもなあ・・・。

しゅるるるるるるる！！！！！！
「くっ！？」

「後ろは死角。」
煙に乗じて後ろに転移して殴りかかってくる可能性を、
考えなかったと思った？」

設置していたバインドがアルフを縛る。

「アルフ！？」
すぐにほどこいて逃げて！」

「残念ながら少しばかり時間がかかるかな・・・。」

このバインドは捕獲したものの魔力を強制的に放出させる技。いつもより大きくなった魔力に慣れるには、少しばかり時間がいえると思うよ?」

「くっ・・・な、なんで・・・ただほどこうとしてるだけなのになんでこんなに魔力が・・・。」

制御が上手いかな・・・ぐっ・・・!」

アルフが苦しそうにうめき声をあげる。

こりゃ、魔力が放出されすぎてバインドが魔力を吸収したか? 若干強くなってるな・・・。」

「バスタアアアアアアアア!!!」

「おおっとお!!」

ドオオオオオン!!

「・・・不意打ちとは卑怯なり!」

「にゃ!」

だってフェイクさんもやってたじゃない!」

「あ、そうだった。」

「忘れてたの!」

ま、いいか。

「おらあああああつ!!!!」

「!」

ドゴン!!

「ぐっ・・・！」

いつのまに抜けだしてやがった・・・！
「まだまだあっ！！」

いつのまにかバインドから抜けだしていたアルフが向かってくる。
ちっ・・・そうか・・・なのはディバインバスターはバインドを
解くのが狙いか・・・。

「ならば・・・重くなれっ！！」

「ぐっ！？（急に体が重く・・・！？）」

レアスキル重力操作。

実はコレ、自分にも少し被害が来る。

地球の自転を少しばかり変えるため、いくら俺がチートでも傷が付く。

まあ、傷で済むのに感謝すべきだと割り切ってはいるが。

「“拳墮”ッ！！」ズガアン！！

「キヤアアアア！！！！」

動けなくなったアルフをとりあえずぶん殴って落とす。
さて、あと3・・・。

「バインドッ！！」

「！？・・・しまった・・・！！」

ユーノがバインドを仕掛けてくる。
流石にユーノ・・・補助系が得意なだけあってかなり強固だ。

「ディバインバスター・・・！！」

「アルカス・クルタス・エイギアス！
疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかれ！
バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・！」

ちっ！来るか！

「だったらコイツだア！！
アビス！！」

『All right master" laser launch
her mode" open』

肩のランチャーを起動させる。

こいつは俺の魔力を収束して、一発一発をその威力のまま拡散砲として撃ってくれるサポートデバイス。

アビスの一部なので、初めてみた時はアビスって多才・・・（？）
って感心したもんだ。

「地獄の王をも焼きつくす焰！
その焰にまかれ灰塵となれ！！
ヘルアンドオオオオオオ！！！！」

収束しきつた魔力をランチャーに注ぐ。

「バスタアアアアアアアア！！！！！！」
「フォトンランサー・フランクスシフトオ！！！！ファイアアアアアアアア！！！！」
「アビイイイイイイイ！！！！！！」

拡散したヘルアンドアビスは二人の砲撃に向かっていく。
合計15発の紅黒い魔力砲はうねりながらフランクスシフトを貫

き、デイベインバスターとせめぎ合っている。
ってかフランクスシフトでるのはええよ!!
なんでこの場面で出したの!?

この後フェイト倒れるだろこれ!?

「でも・・・負けるわけにいかんのよなあ!!--!!!--!!」

ドシユウウウウウ!!!

「にやつ!?!」

「くっ・・・!」

デイベインバスターを貫いた。

フランクスシフトは、次々と落とされて行き、ついには最後のフ
アランクスシフトも、

うねり続けるヘルアンドアビスに落とされた。

「二人とも下がって!!」

もういつペン守るつもりか・・・。
だがっ!

「アビス!回転をかける!!」

「yes master!」

ギュルルルルル!!!

回転をかけ、貫通力を高くした砲撃。
勿論・・・。

「その程度なら・・・!」

「貫ける!!」

「く……!」

「まだ……まだ……!!」

相当耐えてんな……流石ユーユーコンビの片割れ！
しかし！

「まだ……ちょっと甘い。」

「ミシイ……ペキキ……!」

「!!!!くそっ!」

ユーノのプロテクションにひびが割れ始める。

「………焼きつくせ!」

「「「キャアアアアアアアアアアアアアアア!……!」」」
（うわあああああ
あああああ!!!!!!）「「「

フェイト SIDE

「ん………。」

なんかあつたかい……。

「んふう……。」「スリスリ

これなんか好き……。♪
でも……。これなんだろう？

「おーい・・・てく・・・よー。」

何か聞こえるなあ・・・。

でもコレ気持ちいくてまた眠くなってきたあ・・・」

「起きねーとキスするぞコラ。」

「！！？」ガバツ！！

「おはようフエイト。」

俺の膝でよくお眠りになっておられましたね。」

「え？」

ってことは・・・。

「お前は今まで俺の膝枕で寝てたんだよ。」

「どうだ！屈辱であろう！！？」

「・・・／／／」

・・・恥ずかしい・・・。

でもなんでだろう・・・不思議と嫌じゃ・・・ないかな？

「・・・何故顔を赤らめる・・・。」

「え？あ、いや、その・・・／／／」

「ま、いいか・・・。

とりあえず、こいつら頼んだ。」

そして彼のもう片方の膝を見ると、なのはとアルフが寝ていて、あぐらをかいていたので、その中にユーノがいた。

「んじゃ、行くかね・・・。

ジュエルシードはもらって行くから。

もつと強くなって・・・また奪いにおいで。

一応回復魔法は使ったけど、まだ完治してるかどうかは分からないからしっかり食ってしっかり寝ること。

OK?」

「は、はい。」

「ん、いい子だ。」ナデナデ

「んっ・・・。」

あ、撫でてもらうのも気持ちいいかも・・・母さんとは違う感じがする・・・／／／

「んじゃ、またな。」

そう言っただけ彼は飛び去った。

魔力を追ってみたけど、途中で完全に魔力反応がロストした。

「・・・・・・フェイク・・・。」

つまり、偽物・・・ってこと?

ってことは偽名・・・だね。

「フェイク・・・フェイク・・・フェイク・・・。」

口に出してみた。

なんでだろう、ただ口に出してるだけなのに・・・体があつたかいような気持ちになった。

おまけ

アリサがデュエルやってるらしいので勝負した。

結果。

「うし。」

バーフェクトデュエル
完全決闘。」

「シルヴァーグローリーとリーサにアルカディアスなんて最低よ・
・！」

最終的にダイヤモンドカッターで総攻撃されるし・・・！」

火と自然のライザーと刃隠でドラゴン連召喚するデッキでした。

でも俺のmana加速からのシルヴァーグローリーには勝てなかったよ
うで・・・。

「もう一回よ！」

今度こそコテンパンにしてやるわー！」

「はいはい、シールド展開・・・。

っ
て
い
う
か
ボ
ル
メ
テ
ウ
ス
剣
聖
で
も
入
れ
た
ら
い
い
ん
じ
ゃ
な
い
の
そ
れ
？
さ
て、
負
け
先
ど
う
ぞ
？
」

「
む
・
か
・
つ
・
く
〜
！
！
！
！
！
！
！
」

気が付いたら今度は高町家に拉致されていた（後書き）

デュエルはノリで入れました。

自分自身、シルヴァーグロリーにはフルボッコにされました。

僕、すつげえ弱いんで・・・。

気が付いたら管理局がいらっやいませ。
(前書き)

頑張った結果。

多少投げやりになったかもしれないです。

気が付いたら管理局がいらっしやいませ。

どうも、先日は柄にもなくガチで暴れた幽亜勇です。
ま、まあ一応本気だったけど全力じゃないし！

で、今ですが・・・フェイトが、テストロッサの城に飛ぶのを待ってるんですが・・・。

「な、なんか違う・・・原作と違うよ・・・。」

ダメだ。

ダメだよあの子。

飛びそうにないよ。

ど、どうなってるんだ・・・。

あ、素手封印は無いみたいですね。

だって、なんか仲良くなってたし。

原作みたいに奪い合うとかないからですかね？

ちなみに、その時ははやてと晩飯食ってました。

『ジュエルシード、発動しました。』

『うーん・・・今回は・・・スルーってわけにもいかない・・・かな？』

イモータル、管理局は？』

『こちらに向かっています。』

艦名は『アースラ』。

どうやらジュエルシードの回収が目的のようです。

搭乗者の中に、クロノ・ハラオウン執務官の存在を確認。
いかがいたしましたよう。』

『・・・今日は俺が自分の意思で行く。』

『ほう、これまた珍しい。

何故でしょう。』

『もう関わっちまったからなあ……。』

めんどくさいけど、関わっちまった以上は、とりあえず出来る限り助ける。

それに、クロノともちよつと顔合わせておきたいかな。

俺みたいなのがいるぜ？ 的なことを管理局に知らせると、

フェイトを逃がすため……。かね？』

『フェイト様……。何をなさったのですか？』

『恐らくはフェイト様が人造魔道士であることの露見を恐れているのだらう。』

人造魔道士の技術は、犯罪らしいからな……。』

『ま、そんなとこだね。』

んじゃ、まあ行きましょうか。

管理局さんにご対面……。』

なのは SIDE

「アークセイバー。」

いくよ、バルディッシュ！」

『Arc saver』

フェイトちゃんがアークセイバーを発動する。

私はとにかくもつと高く……。！

そして、ジュエルシードの暴走体にレイジングハートを向けた。

『Shooting mode』

「行くよ！レイジングハート！」

レイジングハートに魔力を込める。
下を見ると、アークセイバーの鎌みたいなものが、木の暴走体さんの根っこを切り刻んでいくのが見えた。

「貫いて!!」

「デイベイイイイイイイイン・・・!」

『blaster』

この間のフェイクさんのブラッディバルーンを見て思いついた技。
デイベインブラスター。
デイベインバスターの着弾地点を起点に、その周囲に爆発を起こす魔法。

ほんとに、フェイクさんと戦ったびに少しずつ強くなってるような感じがするのは気のせいではないと思う。

レイジングハートが考案した魔力弾で缶を空に撃ち上げ続ける特訓も、

もうすでに百五十回を超えた。

ズドオオオオオオン!!!!!!!!!!

「よし、成功した!」

実はぶつつけ本番なこの魔法。

正直成功するかどうかは不安だった。

でも、レイジングハートの助けもあるし、威力は確実に上がるから大丈夫だと思う。

「貫け! 轟雷!!」

『Thunder Smasher』

フェイトちゃんのサンダースマッシュが放たれる。
しかし、木の暴走体さんのバリアは、まだ破れない。

「っ……！あと少しなのに……！」
「……まだまだ……！」

でも次の瞬間、私たちの砲撃はバリアを砕けないまま終わってしまった。

バリアの再生を後回しにして、木の暴走体さんは私たちを標的にしたみたいで、根っこが私たちに迫る。

「っ！バルディッシュ！」
「レイジングハート……！」
『protection』

ガガガガガガガガガ！！
根っこをガードする。

ガンッ！ガンッ！

その根っこを何度も振り回し、プロテクションに叩きつけてくる。
ピシ……ピシ……！

「くうっ……！」

プロテクションも持たなくなってきた時だった。

「イモータル、“白道”スタンバイ！」
yes sir.

” protection blitz ” hakudou ”
standby ok!”

二つ目のジュエルシードを取った時の神社で聞いた声。
・・・ああ、来てくれた。

「月の軌跡に沈め・・・“白道”^{はくどう}!!」

後ろから紅黒い球体が木に向かって突っ込んでいった。
紅黒い魔力光の人は私は一人しか知らない。

「「フェイク(さん)!!」」

「ジュエルシード!! シリアル?!! 封印!!」

ギヤオオオオオオオオ!!

木はジュエルシードを失い、叫び声をあげながら消滅した。
今回は、どうやら黒い近接型の方で来たみたいだ。

「いやぁ・・・危なかったねえ・・・。

俺が機動戦艦ナデ。コ見て、この技思いついてなかったら危なかったかもね?」

「「それってアニメが元なの!?!」」

そっいえばディストー。ヨンアタックみたいだった・・・!

「さて・・・今日もこいつは頂いていくけど・・・抵抗は?」

「勿論させてもらうの!」

「今日こそ覚悟です・・・!」

二人でデバイスを構える。

フェイクさんは少し笑って、拳を構えた。

「じゃあ・・・行くよ!!」

フェイクさんは拳を、私たち二人はデバイスを振りかぶる。
そして、今まさに接触しようかという時。

「!!」バツ!

「!!?」

フェイクさんが急にブレーキをかけて、後ろに飛んでいった。
瞬間、大きな光と共に魔方阵が現れる。

ガキーン!!

「ストップだ!!」

魔方阵から出てきたのは男の子。
黒いバリアジャケットの男の子は、私たちのデバイスを杖で受け止めていた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!

時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ!

・・・詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

男の子はクロノくんと言っらしい。

そうか、フェイクさんはこの人が来るのを感じたから後退したんだ・
。。。

「・・・・・・・・。」

フェイクさんは若干不機嫌なオーラを放ってる。
戦いを邪魔されたからかな？

「まずは三人とも、武器をひくんだ。

このまま戦闘行為を続けるなら・・・。」

「ふむう・・・なんかヤバそうな感じ・・・逃げるかねえ・・・。
フェイト、なのは！

今回はお開きだ・・・またな。」

そう言つて飛び立っていこうとするフェイクさん。

「待て！」

「！？」ズガン！！

クロノくんがフェイクさんを撃つた。
つて直撃！？

「ゲホ、ゲホ・・・おいおい・・・時空管理局の執務官様が、一般人に向けて威嚇攻撃も無くぶち当てちゃっていいのかよ・・・。
クソツタレ・・・馬鹿だろお前・・・。」
「あ・・・。」

煙が晴れたそこには無傷のフェイクさんがいた。
クロノくんは、やってしまった。つて顔をした。

「あゝあ・・・。」

お前コレ完全に不祥事だろ。

今の記録したか？イモータル。」

『ばつちりです、マスター。』

画質、音質共に最高の出来です。』

「あいかわらず無駄にスキルがあるが・・・よかる、GJと言って
おこつ。」

さて、管理外世界の民間人に魔法を向け、あまつさえ無抵抗の俺
に直撃させた執務官殿・・・？

どんなご用件かな？」

・・・黒い・・・黒いよフェイクさん・・・。

何だか知らないけど黒いよその笑み・・・。

「・・・くっ！

そ、その件については謝罪する。

だから、一度こちらの誘導に従ってもらえないか・・・。」

「・・・ま、よかる。」

どうせ、魔力調べられるだけだしな。」

「ああ、いつまでもそれでは窮屈だろう。」

ここではバリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ。」

「あ、そっか・・・そうですね。」

それじゃあ……。」

ここは次元航行船の中。

フェイトちゃん、アルフさん、ユーノくん、フェイクさんと五人でクロノくんの誘導に一応従ってます。

一応というのは、フェイクさんが、「気を付けた方がいい。」って言ったから。

とりあえずレイジングハートを待機状態にさせる。

フェイトちゃんもバルディッシュを待機状態に、ユーノくん、アルフさんも人間の姿に戻った。

フェイクさんは……。

「悪いが俺はバリアジャケットを解除する気はない。

また撃たれたらたまらんからな。」

「だからそれについては謝罪してるじゃないか……。」

先ほどからそのネタを引っ張るフェイクさん。

よっぽど撃たれたのむかついたんだね……。

「……で、では、こちらへ……。」

ご愁傷様ですクロノくん。

「艦長、来てもらいました。」

連れて行かれたその部屋には、盆栽、盆栽、盆栽。
火鉢に獅子脅しもあった。

・・・なんかこう・・・色々間違った和風だ・・・。
部屋を中心に正座している緑色の髪をポニーテールにしているおねーさんがいた。

「おつかれさま。

それに、皆さん。どうぞどうぞ、楽にして？」

勇 SIDE

なのはの事情はユーノのお手伝いだとして・・・ひそかに気になっていたのは、フェイトのジュエルシードを集める理由だ。
フェイトは、家族とは上手くいっているというし、特に集める理由がない。
一体なぜ・・・ジュエルシードを集めているのか。
普通に気になった。

「私は・・・ごめんなさい。

黙秘させて下さい・・・。」

うわ、結構後ろめたいことらしいね・・・。

「すまないが、そういうわけにもいかないんだ。
教えてくれな」《あらあら、クロノ？無駄に詮索するのはよしな

さい。》「か、かあさん!？」

「え!？え!？」

わ、私何もいってないわよ?」

そりゃあそうだろ。

だって、俺が言ったんだから。

「《まったく・・・女の子の秘密を無理矢理知ろうとするなんて・・・僕は変態だなあ・・・。》」

「お、お前か!？」

な、なんだそれは!？」

「なんだそれは・・・って言われても・・・。

《ただの声真似なの。》」

「にやつ!？」

今度は私!？」

弄りがいありすぎるだろこの世界の人・・・。

たかが声真似で・・・。

とりあえずクロノの首に腕を回し、ひそひそ声で忠告しておこう。

「あのな、クロノ。

女の子の秘密を無理に吐かせるってのはさあ・・・マジで止めておけ。」

「な、なんでそんなことキミに言われなくちゃならないんだ・・・。

「俺は一回だけそれを行ったことがあるが・・・。

その後、十数人の女子に囲まれ、軽く私刑を受けたことがある・・・。

己の身が惜しくば・・・やめておけ。」

「・・・わ、わかった・・・。」

実際、あれはやばかったです。by 作者

「で、あなたのことなんだけど・・・。」

「俺？」

「そう、なんでフェイトさんとなのはさんとジュエルシードを奪い合っているのか。」

その理由を知りたいんだけど・・・。」

ま、普通はそうくるわな・・・。

「うん、別に困ることじゃないし、話してもいいか。」

俺の行く先々で発動して、俺が巻き込まれるからさあ・・・もういい加減うつとーしくてな？

もう自分で集めてどっかにポイしちゃおうかなあ・・・と。」

「・・・それだけ・・・ですか？」

「ん、それだけ。」

あ、あとは体がなまらないように運動・・・的な？」

あ、みんなぽかーんってしてる。

まあ、それだけでロストログア集めようなんて呆れるしかないわな？

「で、用は終わったよな？」

帰っていいか？」

「いや、まだちょっとだけ。

ジュエルシードの回収についてですが、時空管理局が全権を持ちます。」

「……………！」

で、そう来る……………原作通り……………。

だがここから……………すこしばかり“種”を植える。

「まあ、いきなり言われても気持ちの整理が付かないでしょうから、一晩ゆつくり考えて、それから改めてお話ししましょう？」

「へえ……………一晩ゆつくり考えるねえ……………」

「……………何が言いたい？」

「いや、別に？」

管理局が全権持つって言うてんのに、

一晩ゆつくり考えたところで、管理局に良いように使われんのがオチだなーって思ってたさ。」

「…………………………！」

「か、母さん！？」

「！？」

やどりぎのタネセット完了。

あとは、こいつが広がってくれるのを待つ。

これで、少しは危機管理能力とかつくかね？

「じゃ、そういうことで……………あ、俺はこれからもジュエルシードの場所に出てきて、

ジュエルシード奪っていくからそのつもりいてくれ。

イモータル、転移頼んだ。」

『All right master.』

さて、はたしてどう相成りますやら・・・。

「勇、ごはん。

主に肉！」

「わ、私はなんでもいいよ？」

「しょうがねえなあ・・・。

鶏の唐揚げにするぞ？

いいな？」

「やつほう！

だから大好きだよ勇！」ギュ

「はいはい、

火、使ってるからあっち行っててな？

フェイトもそれでいいか？」

「う、うん。」

今日の晩御飯。
鶏のから揚げ。

気が付いたら管理局がいらっやいます。(後書き)

技名

白道：意味

月の軌道のこと

プロテクションを纏い、突撃する。

ぶっちゃけるとディストーションアタック。

眠いよ！

眠いよ！

これで後書き書くの三回目だよ！

寝ぼけてけしちやったりしてたよ！

10/12

誤字修正しました。

指摘していただいたDai様、ありがとうございました。

気が付いたら未確認だった三つ目の能力が判明した。(前書き)

気が付いたらお気に入りが二百件突破。

六万アクセス&一万ユニークも突破。

え?・・・ん?

って感じで二度見しました。

気が付いたら未確認だった三つ目の能力が判明した。

「……………！」

何かがきた。

この感覚を俺は知ってる。

「最後の能力……………」

実は、俺は三つの能力を全て把握していた訳じゃない。

それぞれの能力が必要不可欠な状況下の場合に発現する。

現に、キーマスター魔力を隠さなければならぬ事態に陥った時（
実は管理局に追い回された。）に。

重力操作は逃げる過程で高いところから落ちた時に発現した。

……………今考えてみれば飛行魔法使えばよかったかなと思う。

「勇くん、どしたん？」

あ、もしかしておいしくなかった？」

「ん？ああ、違うよ。」

ちつと考え事だ。

料理は美味いぞ？」

よしよし、おじちゃんがほめてやろう。「ナデナデ

「ふにゃー……………」

あ、今はやてとご飯食べてます。

言っただよね？

たまに食べてるって？

……………言っただよ？

「まるで猫……いや狸？」

「ふにゃー……って誰が狸やねん!!」

「はいはい、んなカッカしないの。」

ホレ、わしゃわしゃ……。」

「くうくん……」

犬と狸の狭間だな。

「さて……この能力……なんで今出てきたんだ？」

出てきた能力は“再生”。

どうやら死んだ細胞や、肉体の一部を再生させる能力らしい。

その力は、自分の魔力を直接注ぎ込み再生させるので、自分は再生できないらしい。

「……使い道が限定的だな……。」

『いや、でもなんか他人限定ですけど結構便利じゃないですか。』

「まあ、そうだけど……。」

何に使えばいいんだ。

はやての足か？

はやての足の再生か？

あれは呪いだろ？

細胞は元々ちゃんとしてるだろ？

「まあ、しかたあるまい。

手に入れた能力は能力。

大切に使うとするかね。」

「マスター、ただいま帰りました。」

「お帰りなさい、イモータル。」

「どうだった？」

「バッチリです。」

テストロッサの城、見つけて参りました。」

イモータルにはテストロッサ家の城の場所を調べて貰っていた。
調べるときはイモータルの眼は閉じて、

イモータルにセツトアップできなくなるんだけど、
ま、その分の情報は手に入るし構わん。

「さて……んじゃ、行くか。

イモータル、転移頼む。」

「はい、マスター。」

とうとうフェイト様の御実家にご挨拶ですか。

なかなかどうしておやりになりm「そんなに割られたいか？」

OK、その手に持ったハンマーを下ろして下さい。

そつとです。」

イモータルなんでもこうなった？

はやて side

今日は勇くと晩御飯を食べる日。

勇君とは、最近スーパ―で会った。

私と同じ位の男の子。

両耳にはピアスをしてるけど、

不良って感じじゃない。

っていうか主夫やなあれは。

私と同じで、小さい時に親を亡くしている。

「おい、はやて。

出来たぞ。」

「はやっ!？」

まだ焼けてへんねんでこっちは!」

相変わらず料理作んの早いなあ……。

第一あの包丁捌きはなんやの？

人間技ちゃうで？

私と勇君。

週に二回くらいのペースで晩御飯と一緒に食べてる。

私の足が動かないから、お皿を運んだり色々して手伝ってくれる。

「ん？

あ、やけてない？

あいよ、んじゃ何かしらもう一品追加するわ。」

そういつて取り出したのはマグロの切身。

刺身にでもするつもりなんやらなあ。

シヤラララララララ！！！！！

「だからなんやねんその包丁のスピード！？
奥義？奥義なんか！？」

「一体何流の奥義なん！？」

食事中。

その日あったことを話したりする時間。

「でな、結局全勝。

そいつブチ切れてな？

俺に関節技喰らわしてきたんだ。」

「うわ・・・凄い人やなあそれ・・・大丈夫だったん？」

「女の子に負ける程墮ちてはいませんか？」

大抵話すのは勇君。

今日はデュエルである女の子に全勝した話しやった。

え？私もデュエルするの？

するよ？入退院繰り返し返して、一人でつまらなかったから病院の先生にも教え上げてやってたわ。

「それにしても、勇君意外とリア充しとんなあ。」

「ぶっ！

おめーいつのまにんな言葉覚えやがった・・・。」

「だってそやる？」

毎回毎回ほとんどの話が女の子絡みやん。

妬けるわぁ・・・。」

「妬けるってお前・・・。」

「あ、そや、前々から気になってたんやけど・・・。」

とりあえず、聞くだけ聞いてみよ。

「なに？」

「勇君はそんな中に好きな人とか居るん？」

「・・・もはや定番ともいうべき質問だなはやてよ。」

「ま、聞けるもんは聞いた方がええやろ？」

「そういう話題、結構興味あんねん。」

「夜通し恋愛小説読みふけてるからだろバーロ。」

「つてえ！何で知ってんねん！！」

「ストーリーか！！」

「一回お前の部屋でデュエルした時に本棚のほとんどが恋愛モノだった。」

うかつやった・・・まさかそこまで洞察力が高いとは・・・。

「さすがは勇君・・・私が認めただけの事はある・・・。

ま、デュエルはまだまだ私の方が上やけど。」

「へっ、言ってる。」

すぐに王者の座、ぶんどってやるよ。」

楽しみにしてんでえ？」

ま、当分負ける気はないけど。

「お、もうこんな時間か・・・。

そろそろ帰るとしよう。」

「あ、ほんまや。」

時計を見るともうすでに夜の七時を過ぎていた。

「んじゃ、俺帰るわ。

飯、うまかった。

ごっそさん。」

「何言うてんねや、半分以上自分で作ったクセして。」

「だからその半分以上のはやての料理を評価してんだろつが。」

そんなセリフ普通に言えるなんて反則やろ？

なんやねんもう・・・／＼／

「え、ええからはよいき！／＼／」

「なんだよもう・・・せつかくほめたのに・・・。

ま、いいや。

おやすみ、はやて。」

「うん、おやすみ。

勇君。

またきてやー。」

そう言い残すと、勇君は自分の家の方向に走っていった。

私は、勇君の姿が見えなくなるまで玄関にいた。

「・・・・・・・・勇君。」

あったかい。

いままではひとりだったけど。

今は違う。

友達ができた。

冗談を言い合って、お話して、一緒に料理もして、一緒に遊べる友達。

「えへへ・・・勇君・・・。」

上を見た。

お月さまがまんまるで、とっても綺麗やった。

私は、こんな日常がいつまでも続きますようにと願って家に入った。いつもみたいに一人の家だけど、不思議と寂しくは無かった。

気が付いたら未確認だった三つ目の能力が判明した。（後書き）

主人公の三つの特殊能力が全て明るみに出たところで、ここに乘せておこう。

能力No.1

名称 キーマスター

効果 魔力で“鍵”を作り出し、鍵をかけた場所、モノを指定。

それに差し込み、捻ることで場所なら空間を固定。

モノならその機能を封印する。

主人公のリンカーコアはSSS+オーバーとなっているが、

実際、SSS+オーバーとしかランクがないので、

そうなっているだけである。

本当ならSランクのロストロギアくらいなら“鍵”一つで封印できる。

能力No.2

名称 重力操作

効果 文字通り重力を操作する能力。

ただし、範囲は半径二メートルより広げられない。

ちなみに、実は引力を操作するのも可能だったりする。

が、某千年に一度の魔界の王を決める戦いにでてきた重力を操る魔物みたいな感じに、

いや、能力の使用に身体が若干耐えきれていないので、使うたびに身体のだこかが少し断裂する。

怪我の程度としては軽い切り傷くらいだが。

能力No.3

名称 再生

効果 人間や生物の死滅した細胞を再生することが出来る。

が、自分の魔力を他人に与えることで効果を発揮するので自分は再生できない。

気が付いたらちょっとシリアスになっていた。(前書き)

シリアス苦手すぎて描写が無理やりっぽい感じになってるような気がする・・・ああ、やっぱり俺は社会のゴミであつたか。

気が付いたらちょっとシリアスになっていた。

プレシア side

「……プレシア。」

「ええ。」

城に侵入者。

微弱だが、感じ取れる。

どうやら転移してきたみたいだが……フェイトではない。

「行ってくるわ……。」

アリシアを御願い。」

「ええ、気を付けてプレシア。」

side out

「さて……着いたはいいものの……どうするべ?」

テストロッサ家に転移出来たはいいものの、
どこがプレシアがいるところかわからない。

「これじゃ八方塞がりだな……。」

「ん……?」

「どうした?アビス。」

「いえ、魔力ランクSS反応。」

こちらに近付いてきます。」

「……お出迎え……ってわけじゃなさそうだな。」

「ええ、どちらかと言うと魔力をぶち当てて恐怖を与えて逃がそう

としているみたいです。』

怖い怖い。

最初から臨戦態勢かよ。

「ったく……でも、アレだよな。

“ 和平の使者は武器を持たない ” らしいし……ゆっくり待とうか? 」

『 yes master 』

そう言つて俺はとりあえずHMDを装着した。

プレシア side

「あなたが侵入者ね? 」

「 侵入者とはひでーよなあ……ま、そつちからしたらそうなんだろうけども。 」

私が放つた魔力に怯えもせず、ただへらへらと笑っている。

力の差がわからないうつけなのか、それとも私程度なら倒せると思つているのか。

どちらにせよ……

「何をしにきたのかしら? 」

返答次第では、貴方を殺さねばならない。 」

「 怖っ! おいおい、そう殺気立たないでくれよ……ちょっと話にきただけだろ? 」

『 ええ、あ、プレシア様、先日テーブルに置いてあつた残り物と思われるケーキ。 」

「ごちそうさまでした。」

「喰ったんか!？」

何人様の家の食い物漁ってんだバカデバイス!」

……で、デバイスって物を食べるのかしら……。

「いや、すいませんねえ、うちのバカデバイスが。」

「え? え、ええ、別に大したことではないから構わないけれど……。

」

『すみません、相方がとんだご無礼を…… あ、こちらつまらない物ですが。』

彼のデバイスらしき紅いピアスが光ると、私の手に一つの箱が現れた。

「あ、それうちの近所で評判の喫茶店のシュークリームなんだよ。

めっさうまいから大事に食べるように。」

……そんなに美味しいのならアリシアに食べさせたいわね。

これは取っておきましょう。

「で、本題に入りたいんだが…… あんた、フェイトの居場所を知ってるか?」

「! ? 何故貴方がフェイトのことを! ?」

「そりゃあ友達だし?」

お隣だから。」

「お隣……?」

「そっ、お隣。」

「ご近所さん。OK?」

「え、ええ。」

「ってかその様子だと知らないみたいだな？」

フェイトは今、地球でジュエルシードを探してあっちこっち駆けずり回ってる。

あんたに聞きたいのはそれについてだ。

何故だ？何故あいつはジュエルシードを集めてる？

あんなに必死になって、何故？」

……ジュエルシード……？

まさかあの子……。

「……その話は本当なのね？」

「ああ。」

「……少しだけ聞いてもいいかしら？」

「構わんが……なんだ？」

「あの子、向こうで友達は出来た？」

「……ああ、女の子の友達が一人出来てたよ。

もちろん俺もだが。」

「そう……よかった……。

来なさい。

推測だけど、あの子の目的を教えてあげる。」

「うわ……………」

『これはこれは…………』

『大きいだろう？これがこの城自慢の図書館だ。ま、管理局の無限書庫には叶わ「なんでお前が自慢してんだよ。」いや、なんというがノリですマスター。』

だが、確かに大きい。

国立の図書館並にでかい。

城の大きさからしてここまでいけるのかとも思ったが、空間に何かしらの細工がしてあるようで、あまり気にしないことにした。

「ここには、古い古い言い伝えの本から魔法理論の本。

中には料理のレシピなんてものもあつたりするわね。

そんな様々な本が並べられているわ。」

「無限書庫もびっくりなスケールだなオイ…………。」

ほんと、呆れたもんだ。

「その中で…………これね。」

プレシアが、魔法陣を展開する。

恐らく検索魔法みたいなもんだろう。

一冊の本がプレシアの手元に届いた。

「…………“宝石の種”…………？」

表紙には、そう書かれていた。

「これは……まさか、ジュエルシード……」お母様、ここにいるの
く?」……?」

後ろを振り向いた。

そこには、車椅子に乗った金髪の子と、その車椅子を押す猫耳の女性
性がいた。

「プレシア……その方は……?」

「ああ……この子は……そういえば名前聞いてなかったわね?」

「あ、今気付いたんだ……俺は贋作。^{フェイク}

本名は幽亜勇。

一応、フェイトの友達だ。」

「私はプレシア・テストロツサ。」

あの子は私の娘でアリシア。

車椅子を押してるのが私の使い魔でリニス。」

ご丁寧にどうも……。

「で、彼が侵入者だったわけですか。」

「ええ、フェイトの居場所を知らせにきてくれたらしいの。」

「え? フェイト? フェイトが帰ってきたの?」

アリシアが叫ぶ。

よく見ると、眼が何かに覆われていた。

……!?

「プレシア!」

「な、何!?」

「今からアリシアに俺が何かする。
が、2つ程約束を頼む。」

一つ、俺には何もしないこと。

例え何があるうと……だ。

二つ、俺とアリシアをリニスと一緒に結界に閉じ込める。

全力だ。魔力が毛の先程もでないように！」

「貴方一体何を……」「いいから早く！」わ、わかったわ！リニス！」

「し、信用するんですか！？」

「いいから！やるわよ！」

リニス、プレシアの結界が俺とアリシアを包んだ。

「……何があっても結界を解くな。

いいな。」

「……何をするつもりなの？」

プレシアが心配そうに結界越しにこちらを見る。

「任せろ。」

これがうまくいきや皆幸せやっぽうだ。」

「……？」

何がなんだかわかってないアリシア。

「……さて、アリシア。

俺は贗作。
フェイク

フェイトの友達だ。」

「ふえ？そうなの？」

「ああ、ところで、アリシア。

お前、義手だな？」

「……！」

「それに眼が見えてないし、義足か……」。

ヒュードラ事件の後遺症つてどこだな？」

「なんでそんなこと……。」

ま、色々見たし、それに、俺には新しい能力がある。

「成長も何故か止まってる……。」

これも後遺症……か？」

「し、知らない！」

知らないよ！」

おっと、怖がらせたみたいだ。

一々本題から外れるのは悪い癖だな。

「さて、ここで君に質問だ。

もう一度、走り回りたくないか？

母親の顔を見たくないか？」

「え……？」

アリシア side

「え……？」

何を言われたのかさっぱりだった。

この眼は、いくらお医者さんに見せても治らなかったのに。
足なんて義足で、歩くのがやっとなのに。

「何……言ってるの……？」

「俺にはその身体を治す術がある。

だが、そのためにはお前さんの力も必要だ。
いや、お前さんの心が大事……って感じか。

もう一度言う。

もう一度、走り回りたくないか？

母親の顔を見たくないか？

……自分の妹の顔を見たくないか？」

見たい。

走りたい。

最近できた私にそっくりだと言う妹と遊びたい。

でも……有り得ない。

「そんなの……無理だよ……」。

どこのお医者さんも駄目だつて言つたんだよ？」

「俺は出来ないことは出来ると言わない。」

「……ほんと？」

ほんとに……また見えるようになる？」

「もちろん。」

フェイトの顔も見れるぞ。」

「ほんとにほんと？」

「おう、ほんとにほんとだ。」

インディアンウツカナイ！」

おかしな人だ……」。

でも、ほんとにできちゃうかもしれない。

そう思った。

「じゃあ……どうすればいいの？」

だから、任せてみよう。

また、お母様に会えるなら。

お母様の優しい顔が見られるなら。

私のわがままで産まれたと言う妹を見ることが出来るなら。
この人を信じてみようと思った。

「どうすればいい……簡単だが、大変なことだ。

俺が治療をする間、痛みに耐えてくれればそれでいい。

時間は……アビス、イモータル、どの位だ？」

『恐らく5分から15分かと思われます。』

『“鍵”の管理はお任せ下さい。』

こんな時が来ると思ってマスターのキーシステムを把握したので
すから。』

「へっ……本当にそれだけか？イモータル。」

『勿論、マスターをTo Loveるの渦中に放り込むことにも役
立ちm「カチ割る。」ok、もちつけ。』

デバイスらしき機械音声と漫才もする人。
凄く面白い人だった。

「さて……覚悟はいいか？

相当痛いと思うから……頑張れよ。」

「……うん。

大丈夫。」

「それじゃ……いくぞ？

再生箇所、特定開始。」

『search』

『key release ready?』

「キー、？・？・？全て開放しろ。

再生箇所、両腕の肘から先、及び眼に連結している全ての神経。

そして両足の膝から先、リンカーコア。

再生は骨から神経、筋肉、コアの最大魔力値まで今のアリシア・
テストロッサの物になったであろう物を再生。」

『yes master』
『“reverse” All systems are go
master.』

『3, 2, 1 key all open』
「くっ……なんて馬鹿魔力なの……？」

外でお母様が頑張ってる。

待っててねお母様。私頑張るから。

頑張って全部治すから。

そしたら……一緒にまた遊びに行こうね？

「いくぞ……アリシア……！」

再生開始……！」

そう言つて、彼の手が私の肩に触れる。

その瞬間、

「ぐ、が……アアアアアアアアア……！」

痛い。

痛い痛い痛い痛い。

イタイ。

「頑張れ……！」

終わったら……おじさんが美味しいケーキごちそうしちやるかな！」

「あがつ……う……ん……！！が、がんば……る……！！

ギ……アアアアアアアアア……！！！」

腕の付け根、足の付け根、眼、胸、これらすべてに激痛が走る。

がんばるんだ……お母様にもう一度お花の冠作ってあげるんだ。
フェイトと一緒にリニスにお料理を習いながら一緒につくったり、
フェイトと魔法の練習をしたり、
いっぱいいっぱいやりたいことがあるんだから……。

「まげない……ぜっだいになおずの……！！！」

「ああ……まけんな……！！」

「気休めだ……けど……俺が付いてるから……！」

そんな痛みが永遠みたいに続いた。

リニス side

「アリシア……！アリシアアアアアアアア！！」

「ぶ、プレシア！！」

「結界に集中してください！！」

「私たちが結界を維持しなければこの城は次元震で倒壊します！！」

今、アリシアに治療らしきものを施している彼。

彼の魔力量が問題すぎた。

結界をはれとはそういうことだったのだ。

彼の魔力量は巨大を通り越して極大。

恐らく、プレシアの数千倍の魔力。

ロストロギアなんか目じゃないほどの魔力がこの結界の中で渦巻いている。

「プレシア！！」

「しっかりしてください！！」

「離してリニス！！」

アリシアが痛がつてるの!!」

「このままではアリシアと一緒にあなたまで死ぬことになるんですよ!!」

みんなで仲良く虚数空間にピクニック!? そんなのごめんです!!
いいからさっさと手伝いなさい!!」

「アリシア……!」

待っててね……すぐに終わらせて迎えに行くから……!!」

そう言っただけで結界の維持に加わるプレシア。

結界の中のアリシアを見る。

「……!？」

なんですかアレは……?」

彼の放つ紅黒い力がアリシアに叩きつけられる。

いや、アリシアの中に入り込んでと言った方が正しいか。

アリシアは激痛が走っているのだろう。

泣き叫んでいる。

「……の……なお……!!」

時々、何かを叫びながら泣き叫ぶ。

正直、見ていられなかった。

結界の話は聞いていた。

彼はアリシアの体を治す術があると言っていた。

それには痛みが伴うとも。

でも、これほどまでとは聞いてなかった。

「……頑張って……アリシア……!!」

勇side

「はあ……はあ……。」

終わったぞ……アリシア……。」

「お……わった……？」

なあった……？アリシアの……からだなあったの……？」

アリシアが少し幼い口調で言う。

「ああ、終わった……。」

でも、今はとりあえず……寝とけ……？」

な？」

頭を軽く撫でてやる。

んっ……と少しだけ声をあげると、うつすら目を開けた。

「……あは……。」

フェイク……全然おじさんじゃないじゃん……。」

そう言つて、気を失う。

とりあえず、首筋に手を当てる。

……よかった……生きてる。

『両腕、両足、眼、リンカーコア。

どれも正常です。

動くには多少のリハビリは必要ですが、問題はないでしょう。』

『おめでとございますマスター！』

ですが、今はゆっくりおやすみなさいませ。』

「ああ……そうさせて……もらうかな……？」

イモータル、“鍵”、頼ん……だ……。」

ばたりと倒れる。

うつすらと『心得ております、マスター。』と、馬鹿デバイスの声
が聞こえた。

気が付いたらちょっとシリアスになっていた。(後書き)

いつのまにか七万アクセス越えててびっくりしてデュエマのナイト
デッキをなくしました。

10/26

誤字修正いたしました。

居倉 高夫様、ありがとうございました。

気が付いたら知らない天井だ……。 (前書き)

F様、ウルキアガ様、Mr.kk様。

感想ありがとうございます。

そして十万PV。

いや、まさかそんな……。

嘘だろ？

ありがとうございます。

これからも誠心誠意心を込めて書かせていただきます。

気が付いたら知らない天井だ……。

勇side

「知らない天井だ……。」

言ってみたかった。
後悔はしていない。

『おはようございますマスター。』

『やはりそのセリフはテンプレですね。』

「……否定はしないな。」

俺どうなったんだっけ？

えーっと……確かアリシアの身体を再生したところまでは覚えてるんだけど……。

「あ、起きたみたいですね。」

ドアからでてきた猫耳のおねーさん。
リニスだ。

「おう、おはようさん。」

アリシアはどこだ？ちゃんと再生したか確認しなきゃならん。」

一応治した手前、しっかり看ないと。

「はい、こちらです。」

歩けますか？」

「ん。問題ない。行こう、案内頼む。」

「あの……フェイクさんでしたっけ？」

「あ？ああ、本名で呼んでもいいぞ？幽亜勇。」

「では、幽亜さん。」

貴方は何故あんな事をしたんですか？」

「あんな事？」

「アリシアの事です。」

再生か……。

……なんでだろう？

「なんでかな？」

「なんでかなって……。」

「いや、多分わかるんだよ。」

俺には合計で3つのレアスキルがあるんだ。」

「3つ？」

リニスが足を止め、振り向く。

うん、ナイス猫耳。

「その能力は皆が皆俺が必要な時に出てきた。」

で、この“再生”は、今日、この城に来る直前に発現した能力なんだ。」

「今日!？」

使ってみたり試したりもしなかったんですか!？」

驚いてるな。

ま、普通は練習とか鍛練をしてからだしな。

「うん、急なことだったからな。

今までの能力は俺が必要な時に出てきた。

つまり、この“再生”は、今、この瞬間、アリシアを治すために生まれた能力だと思った。

そう思ったら、身体が勝手に動いてたよ。

気付いたらアリシアの肩に手を置いてた。」

「あなたは……初対面でよくあんなことができましたね……。」

リニスは呆れ顔でこちらを見る。

ま、結局は良かったんじゃない？

アリシアは直せまし。

「はい、OK。

アリシア、もう細胞もリンカーコアも傷一つ無し。

動くには、多少リハビリが必要だから無理するなよ?。」

「うん、ありがとうフェイク。」

アリシアの診察中。

再生したからと言って、すぐ動けるようになるわけじゃない。

ただ、眼だけはすぐに慣れたらしく、俺の顔をぺたぺたしてはにっこり笑ったり、

プレシアの顔をぺたぺたしたり（その最中プレシアはずっと嬉し泣きしていた。）本を読んだりしていた。

曰わく、自分で本を読んでみたかったらしい。

お前、文字わかるのか？と聞いたところ、

私はプレシア・テストロッサの娘だよ？

と、返された。

幼い頃から英才教育でも受けていたのだろうと確信し、そして納得した。

「で、フェイトの件なんだが……。」

診察が終わり、プレシアの部屋で本題に入る。

アリシアの治療で一杯一杯だった俺は、

フェイトの目的について聞きそびれていた。

「で、“宝石の種”だったか？

その絵本がどうかしたのか？」

あの時プレシアが差し出してきた絵本。

タイトルは“宝石の種”。

タイトルからしてジュエルシードに関しての本だろうとは思っただが……。

「ええ、まずはこの本の第七章を見て頂戴。」

そう言うプレシアに従い、その第七章を開いた。開いたページには挿し絵があった。

ある青年が、少年の身体にジュエルシードらしき光り輝く宝石を押し当てている。

「昔々、あるところに二人の兄弟がいました。」

プレシアが語り出す。

「彼等は非常に仲のよい兄弟でしたが、弟は不治の病を患っていました。」

プレシアのほうを向く。

プレシアは少し微笑みながら語っていた。

「兄は弟を助けようと必死で働き、国中の名医に弟を診せましたが、医者は総じて首を傾げるばかりでした。」

再び挿し絵に目を向ける。

そういえば、兄と思わしき青年の後ろに白衣の男がいるのがわかる。

「ある日、兄が湖にきました。」

湖の畔には美しい花が咲いていたので、弟に持ち帰ろうとしたのです。」

「兄が花を摘もうと屈むと、そこにあった美しく輝く種のような物を見つけました。」

兄は見舞いにちょうどいいと思い、弟にそれを持ち帰ろうと、手を延ばしました。

上機嫌で帰宅した兄は担当の医者に軽く礼をしたあと、弟に花と、種を渡しました。

すると、種が眩い光を放ち始めました。

そして、兄は意識を失いました。

数時間後、兄は身体を揺すられる感触に眼を覚めました。

眼を覚ました兄を起こしたのは弟でした。

弟は寝たきりでベッドから出れなかったはずなのに、弟はベッドから這い出て、その足で立ち上がると、兄の元へ駆け寄ったのです。

兄と弟は泣きながら抱き合いました。

医者がその後診断すると、不治の病だった筈の病はすっかり治り、弟はかつてと同じ、いや、それ以上に元気になっていたのです。

きっとあの種のおかげだと思った兄弟は、その宝石のような種を“ジュエルシード”と名付け、祠に大切に奉りました。

「その絵本……フェイトとアリシアがよく読んでくれてせがんできたのよ。」

語り終えたプレシアが口を開く。

「つてことは、フェイトはこの絵本を信じてジュエルシードを集めてたのか？」

「その可能性は十分あるわ。」

じゅ……

「純粹すぎる……！」

「私の子は可愛いでしょう？」

……ちょっと子供すぎるけど。」

ジュエルシードでアリシアを治すため。

しかし、身体を再生するなんてことだから数が必要。

どうせなら全部集めちゃえ。

そう言う思考がフェイトの頭の中で渦巻いたのだろう。

「まあ、予想に過ぎないのだけど……当たってると思っわよ？」
「っばいな……。」

「で、お前等どうする？」

フェイトの目的もわかったところで、再びアリシアの寝室。

「何がよ？」

「いや、フェイトだよ。」

連れ戻すのか？」

「うーん……そうね……引っ越しでもしようかしら？」

フェイトが住んでるところに。」

「……はい？」

波瀾万丈。

波乱万丈。

明日もまだまだ騒がしい1日になりそうです。

おまけ

「帰ってきたぜ我が……家？」

なんか御屋敷みたいなんだけど……。

で、なんでアリサとすずかがいるの？

なんでトランプしてるの？

しかもポーカ―ってどうなの？

あ、アリサスリーカードだ、なかなかどうしていい手だな。

「あ、あんた……どこから入ってきたの勇！？」

あれ？

「俺HMDつけてない！？」

そつえばアリシアも「フェイク全然おじさんじゃない」とかなんとか言ってたような……。

「い、いつからHMD外れてやがった！？」

『魔力を限界まで再生に回したからでしょう。』

「昨日から外れてましたよ？」

『うむ、転移先を失敗したようだ。』

申し訳ありませんマスター。』

「もっと早く言え！！」

結局、誘拐事件の時のことやらなんやらバレました。

気が付いたら知らない天井だ……。 （後書き）

ご都合主義が発動致しました。

駆け足でした。

イモータル？はい、意図的ですよあいつ。

アリサ達にバレました。

そして、次回、テストロツサ家引っ越します。

フェイト、強く生きる……。

同時投稿でゼロの使い魔の予告（？）の方も宜しくお願いします。

気が付いたら外部とのコラボが決定していたので、漫才ってかショートコント

はい、激闘魔法バトルアクション小説 Lie Ahead Wa

111 立ちはだかる壁

の、陰里 愛様とのコラボ・・・とも言えなくもないかもしれない
感じのあれです。

外部ですが・・・？

いいんですか？

気が付いたら外部とのコラボが決定していたので、漫才ってかショートコント

「あ、どうもこんにちは。」

「ん、お主が幽亜勇殿か？」

「あ、うっす。

で、えーっと・・・あなたの名前は・・・ミンウ？でしたっけ？」

「FF2には出て来んぞ？」

僕は『神雷の導き手』ミンウツェンド・J・E・ジュリインツメルト。

雷帝と呼ばれておる。」

「あ、二つ名付いちゃってる感じですか？

えっと・・・じゃあとりあえず自己紹介を・・・。

僕は・・・えーっと・・・。」

「いや、強引に二つ名考えなくても・・・。」

「あ、思いついた。

僕は、『深淵の不死者』幽亜勇です。

フェイクって呼ばれてました。」

『マスター、それ、私達の名前足しただけじゃないですか？』

「さっそくばれやがったコンチクショウ。」

『はじめまして。』

ミンウツエンド・J・E・ジュリンツメルト様。

めんどくさいですね。じゃあ雷帝様でよろしいでしょうか?」

「あ、ああ・・・構わぬが・・・。」

『では雷帝様。』

私、紅い方のピアスがマスターのデバイスのアビスで御座います。

』

『黒いほうの私がイモータルと申します。』

『以後お見知りおきを。』』

「あ、ああ、よろしく頼む。」

「で・・・今日はなんか漫才をするということとで・・・。」

「うむ、なんか・・・急に言われてな?」

「お互い大変っすね。」

「まったくじゃ・・・。」

「で、ネタなんすけど。」

どうでしょうか?

なんかもうあれでしょ?

いちいち考えんのめんどいから芸人さんのパクリ安定かと思うんですか?」

「パクリというな。」

リスペクトと言えリスペクトと。
ふむ・・・まあpak・・・リスペクトするにも誰をリスペクトする
かであろう？」

「今、パクリって言いそうになったよね。

絶対言いそうになったよね。

ま、そこが問題っすよね。」

どうしますかね？ちよつと懐かしいけどオリエン・ルラジオさん
とかどうですか？」

「互いの武勇伝でも語りながらの漫才でもするつもりか？

それに、キャラではないのだが・・・。」

「いや、そこがいいんじゃないっすかね？

あれですよ。

どうせお互いの本編には関係無いですし。別にかまわねえ！！

ってか恐れながらたまにははっちゃけた方がいいと存じ上げます
が？」

「・・・・・・・・・・。」

「でんでんでんでんでんでん。」

でんでんでんでんでんでんでん。

でんでんでんでんでんでんでんでんでんでん。
「」

「深淵雷帝です。」

「御願ひ申す。」

「雷帝さんいつものやつたげて。」

「おお、聞きたいか儂の武勇伝。」

「その凄い武勇伝をやったげて？」

「儂の伝説ベストテン！」

「Let's go!!」

「魔道士数人と大立ち回り！」

「仲間になつたらリンチに加わる！」

「武勇伝!ぶー」ちよつと待て。」「え?あ、はい、なにか?」

「儂は私刑などした覚えは無い。」

「え？あれ？ちがいましたっけ？」

「あ、基本一人一殺の構えでしたっけ？」

「いや、そういうことではない！
ああ、もういい！お前がこっちの役目をやれ！！」

[illegible]

「深淵雷帝じゃ。」

「おねげえしやす！」

「幽亜よ、いつものをやってやれ。」

「おお、聞きてえか俺の武勇伝。」

「その凄い武勇伝を言つてやるがよい。」

「俺の伝説ベストテン！」

「Let's go!!」

「魔王と死神二人落とした！」

「そっちの方でも五人才トした！」

「武勇伝！武勇d「ちょっと・・・すみませんマイクとめて！」な

んじゃ一体……。」

「いや、オトした覚えはないんですけど？」

「いやいや、意味分からんし。」

「全く持つて意味分からんし。」

「お主……。」

「いやいやいや？そんなフラグ立てた覚えはないですって。」

「たしかにアレだけど、餌付けしたけど。」

「フラグとか皆無だし。」

「いやいやいや？」

「一人で寂しかったであろう少女の前に現れた男の子が？」

「しかも一緒に遊んでくれて？」

「完璧な旗立てお疲れさまとしか言いようがないじゃろっか？」

「誰の事言ってるんですか？」

「ちょっつと記憶にな……あれ？」

「もしかして……？」

「記憶にあったようじゃが……一応言い分を聞いておこうか？」

「フラグハナイヨ。」

「片言で言っても説得力が皆無じゃな。」

気が付いたら外部とのコラボが決定していたので、漫才ってかショートコント

えっと・・・。

なんかほんとすみませんでした。

あの、ほんとごめんなさい。

なんか・・・いいの思いつかなくて・・・。

短い・・・なんかあれだし・・・。

オリエンタ・ラジオさんにも申し訳ないかと・・・。

はい、以後反省します。

はい、ゴメンナサイ。

あ、雷帝さんは女の子です。

ごめんなさい。

のじゃロリです。萌えます。

ごめんなさい。

気が付いたらもう海のジュエルシールド×6封印(前書き)

どうやら外部とのコラボは可能なようです。

お咎め無かったので。

……油断させておいてアク禁とかないよね？

気が付いたらもう海のジュエルシード×6封印

「さて・・・今俺が持つてるジュエルシードはいくつだアビス。」

『月村家の件で一つ。』

温泉で一つ。

管理局乱入の時の一つ。

合計三つですかね？』

「意外と少ないな・・・。」

次で稼ぐしかないか？

って俺何真面目にジュエルシード奪おうとしてるんだよ・・・。」

『まあまあ、丁度いいじゃありませんか。』

プレシア・テストロツサがアリシアとリニス連れてこっちに來るって言うついでに正体もバラしましょうよ。』

「なんで正体ばらす必要があんの？

ねえ、なんで？」

帰還しました。

帰って來た時、イモータルがミスって月村家に轉移してきました。
何から何までバレマシタ。

『マスター！！』

マスター！！

出して！！いや、ホント洒落になってないツス！！

煮込まないで！！ほら！なんか隣の南瓜とかいい感じになってΣ
あつつ！！！！？

いやいやいや私がデバイスだからとかマジ関係無いっしょコレ！！
熱い熱い！！オーバーヒートするってこれ！！

ヤバイヤバイヤバイく、来るなこんにく！！

お前の熱さは尋常じゃない！！私はリアクション芸人じゃなくほ

あああああつ!!!!」

反省している。

今日はアビスで行く。

フェイト side

「アルカス・クルタス・エイギアス……。」

海上。

恐らくこの下に……残りのジュエルシードがある。

「煌きたる天神よ……今導きの元、降り来たれ……。」

今、手元にあるジュエルシードは四つ。

本当ならもう少し手に入るはずだったけど、フェイクのたび重なる妨害で予定よりも数が下回っている。

ま、まあ彼と戦うとなんか強くなれるしいんだけど……。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル……。」

ジュエルシードを全部持って帰れば、姉さんの傷も全部治る。

そう、本に書いてあった。

母さんも姉さんも喜んでくれるはずだ。

姉さんもしかしたら魔法が使えるようになるかもしれない。

そしたら一緒に空を飛ばう。

リニスや母さんに魔法を教えてもらったりする光景を浮かべて、楽しそうだと幾度思ったことが。

「撃つは雷・・・響くは轟雷・・・!」

でも、その前にまずはやることをやらなくちゃ。

管理局なんて関係ない。

私は、自分の夢と家族のために。

だから、ごめんね。なのは。ユーノ。

「アルカス・クルタス・エイギアス・・・!」

魔力を電撃に変え、海に撃ちこみ、それでジュエルシードを強制発動させて、位置を特定する。

あまり褒められた作戦じゃないけど・・・やるしかない。

「はあああああっ!!!」

撃つ。

雷が海に着弾した。

途端に飛沫が上がり、私も、アルフもびしょぬれになる。

「はあ・・・はあ・・・。見つけた・・・のこり六つ・・・!」

魔力が足りない。

私の魔力じゃ、残りの六つを封印することはできない。

そんな気がした。

でも、やる。やるしかないんだ。

こんな危ない真似をしたら、多分母さんは怒るかな。

アリシアは泣くかな。

リニスは・・・勉強の時間が増えそうだ・・・。

「アルフ！」

空間結界とサポートを御願い！」

「ああ、任せといて！」

アルフは本当に頼りになる。

ここまで付いて来てくれたんだから。

全部終わったら、いっぱいいっぱい食べさせてあげるからね。
嵐が巻き起こる。

合計六つの嵐。

「いくよ、バルディッシュ・・・がんばろう。」

バルディッシュを構える。

ジュエルシードの反応・・・と来れば、あの人も来るだろうけど。

「うはー・・・嵐巻き起こりすぎだよねえ・・・？」

なにこれ。自然災害軽く超えてね？」

『米国のハリケーンの方がよほど危険かと思われませんが？マスター。』

「ま、あれで映画出来たくらいだからね。」

いつもの彼の声。

が、真後ろから聞こえてきた。

後ろを向く。そこには予想通りの彼・・・ではなく・・・？

「・・・・・・・・勇？」

「おう、幽亜勇。

いや、フエイタク贗作。

って名乗った方がお前にしちやいい方か？」

お隣の友達がそこに浮いていた。

なのは side

「・・・・・・・・へ？」

モニター越しにフエイトちゃんを見ていた。

アースラの人たちも気づいたのはつい先ほどだった。

クロノくんが転移しようにも、嵐の影響かポイントが特定できず、エイミイさんが転移できるようにがんばってはいるんだけど、時間はかかるようだった。

だから、せめてフエイトちゃんを応援しようともモニターを見ながら祈ってたら、

「なんで・・・・勇くんが？」

そこに現れたのはこの間も一緒に温泉に行った友達、幽亜勇君だった。

「知り合いなのか？」

なのは。」

「と、友達です・・・・。」

「な、なんで勇が・・・？」

勇君はフェイトちゃんの真後ろに仁王立ちしている。
いや、仁王飛び？

「そんなことはどうでもいい。
あいつは、魔道士なのか？」

クロノくん、自分で聞いて来て、それは無いと思うの。

「あの人は、魔道士では無かったはず・・・魔力反応もなかったし・・・。」

ユーノ君がまるで信じられないと言った顔で説明する。

そういえば、ユーノ君、フレットモードのとき、フルーツジュースもらってたね。

ちよっとうらやましかったよ。

「ああ、こちらでも魔力を測定してみたが・・・ほぼ0に等しかった。

一体彼は誰なんだ・・・？」

side out

「・・・勇？」

「おう、幽亜勇。

フェイク
いや、贋作。

って名乗った方がお前にしちやいい方か？」

結局、ばらすことに決定。

クロノとエイミィ、リンディさんその他アースラの皆様に、お披露目タイム。

何でバラしたか？アビスに、

『どうせ後で消せばいいんですから。

そういうの気にしない方がいいですって。』

って言われたから？

そりゃそうだ。

こつちには多少性格に難はあるが、イモータルがいる。管理局の中枢にもバカンスに行ったらしい。

ただの巡洋艦のシステムに乗り込むなど、お茶の子さいさいだろう。

「なんで勇が・・・ここは危ないよ！
下がって！」

「でもなあ・・・フェイト疲れてるし・・・ってか俺俺。
フェイクだって。」

気づかな・・・ああ、魔力ないし、気づかんか。」

「?・・・フェイク？」

勇・・・勇じゃないの？」

なんでこんなセリフが出るんだ。

しかも首を傾げるな。

頼む。可愛いから。

「俺は幽亜勇。

偽名で・・・贋作・・・つまりフェイクって名前を使ってる。

ここまで、理解おk？」

「え？あ、うん。」

「で、こないだまでお前らの邪魔みたいになしてたのが俺。」

「・・・・・・ええ！？」

「お、驚いた？

驚いてくれた？

それなら隠したかいがあつて「ああああああつ！！！」・・・・・・
おおつと。」

横によける。

アルフが人間形態で拳を振るってきた。

いやはや、こないだより少し早くなってるね。

「勇！！

あんた、だましてたのかい！！

フェイトの邪魔をして、嘲笑って楽しんでたのかい！！？」

「はい？

いやいや、違つて。

お前らが巻き込んできたんだろ？

ジュエルシードジュエルシード・・・・いちいち目の前にくんなよ・・・・
つて感じ。」

本心です。

ジュエルシード、マジで俺の行くとこ行くとこ来ました。

がんばったんだ・・・・俺だってがんばって回避しようとしたんだ・・・・。

その証拠に、サッカーイベは回避できたんだぜ！
どや、すごいやろ。

「あ、そうだ。

ひとつ伝言を頼まれてたんだった。

でも、その前にこいつら封印しないとな。」

「ゆ、勇がフェイク・・・？」

あ、でも会った時の端々にアビスとかイモータルとか聞こえてたような・・・。

あれって勇のデバイスなのになんでフェイクが使ってるの？

なんて思ったりもしなかった私って一体・・・。」

「おい、フェイトー。」

帰ってこーい。

封印しないとまずいぞー。」

フェイトを揺さぶる。

ダメだ、帰ってこねえ。

「アルフ、手伝え。」

そろそろ、次元震来ちゃうよ。」

「ふん！だれが手伝うかい！

フェイトをだましてたあんたに貸す手は無「今日のご飯はピーマンスペシャルにしようかなあ・・・。」さあて！張り切って封印しようか！

ね！勇！」

餌付けしといてよかった。

そう思った瞬間だった。

「さあて・・・コレはちと・・・骨が折れるなアビス。」

『まあ、いつもよりは折れますね。』

でも、マスターならいけるでしょう？』

「まあね。」

一応出来はすっけどさ。

疲労したとこ見せないと・・・クロノ来ないっしょ。

一応・・・だけでやるぞ。」

『yes master “key master system
” first key release』

「うし、いくぞ。」

アビス、セットアップ。」

『all light master set up』

クロノ side

奴だ。

紅いバリアジャケットを纏ったあいつ。

両手には銃を持ち、へらへらこっちの弱みを責めてきたりなんとなくで事件に首を突っ込んでくるあいつ

しかし、いつものようなバイザーのようなもので顔を隠しておらず、ジュエルシードの暴走の中にいると言いつのにその顔はぼーっとやる気の無さそうな顔だ。

「・・・・・・ジュエルシードを奪う気のようなね・・・・。」

「あ、あの数のジュエルシードをですか!？」

エイミィは驚きを隠せないようだが、あいつならやってのける。
何故かそう感じた。

『マスター、ポイント特定できました。
いつでも転移できます。』

行きますか?』

『ほんと？』

出来る？レイジングハート。』

『おまかせを。』

『僕も連れて行って！』

サポートくらいはできる！』

なのはとレイジングハート、ユーノの念話が聞こえる。

『待て！！なのは、僕も連れていってくれ。』

『ふえ？クロノ君？』

side out

「さて、アルフ、空間結界はそのまま維持。

あとは俺のサポートに回れ。

ご褒美は、今日の晩御飯でステーキだ。

フェイトも手伝えよ？」

「は、はいっ！」

「あいよっ！」

デバイスを構えて、いまだ嵐になって暴れるジュエルシードに向き
なおる。

「まったく……アビス、この嵐規模はどの位だ？」

『計測、恐らくアルフ様の結界がない場合、海鳴市を軽く飲み込んでいたかと。』

「厄介だな……。」

「あ、あの……ごめんなさい。」

フェイトが頭を下げる。

が、俺はその頭に拳骨を落とした。

「……っ!？」

「馬鹿やろ。」

謝る暇があるなら手伝え。

やるぞ。」

「う、うん!」

フェイトもバルディツシュを構える。

「さて、お立ち会い!

観客はゼロではありませんが!

題目は“宝石の種の封印劇”!

皆様様方、心ゆくまでお楽しみ下さい!」

気が付いたらもう海のジュエルシード[×]6封印(後書き)

120000PVってなんの冗談だww

ありがとうございます。

気が付いたら魔王、淫獣、執務官と乱戦（？）（前書き）

170000アクセスってどういうことなの。

っていうかまだ終わらないのこの戦い。

ゆ、勇は悪くない！！

俺の文章力が悪いんだ！！

気が付いたら魔王、淫獣、執務官と乱戦（？）

「フエイト、アルフは右から2つの封印！

俺は左の4つを封印する！

アビス、血の代償スタンバイ！」

「了解！」

『yes master!!』

血の代償。

文字通り俺の血を媒介にキー解放せずに一時的に魔力を上げるアビス専用の機能。

それはアビスの色に関係するのかと思ったが、よくわからん。

つてか、使えるもんは使う。

それについての過程なんざ二の次だ。

額の眼、アビスに手を触れる。

「痛つ……！」

『すみません、マスター。』

「いや、いいって。

発動条件なんだからしゃあない。

それよりも、術式。」

『はい、術式、“混沌”発動。

全魔力、額に集中致します。』

眼を閉じる。

ここからは、自分の眼では見ない。

アビスを通して、アビスの視点でジュエルシードを見据える。

『合計4つのジュエルシードを確認。』

「ロックオン。」

アビス、魔力チャージ。」

『yes master “chaos BREAKER” see t』

アビスの視点でジュエルシードに照準を合わせる。

いまだに荒れ狂うジュエルシードを大人しくさせるために。

「さあて……管理局の方々に、どでかい一発お見せいたしやしよう！」

『魔力収束開始。』

俺自身の目を開き、アビスに魔力を収束する。

こんなときになんだが……、俺の技って厨二率非常に高いよな……。

「血に染まるは我が魂！」

深淵と地獄の先に眠るは深き混沌！

カオスブレイカー！！」

『fire』

リンディ side

「な、なんてめちゃくちゃな魔力……。」

エイミイが哑然としている。

モニターに映るのは、頭のデバイスから収束魔法を放っているフェイクと名乗った少年。

「エイミイ！ポイントはまだ特定できないの！？」

「あ、ま、まだもう少しかります！」

そんな……エイミイでもまだかかるなんて……一体どうなってるの……？

映像は映ってるはずなのに……。

それにいくら嵐だからと言って、こんなにかかるはずは……。

「艦長！（リンディさん！）」

「？クロノ？なのはさん？」

振り向く。

そこには、転移の魔方陣を展開するクロノと、ユーノさんとなのはさんがいた。

「申し訳ありませんが、艦長。

命令を無視して、勝手な行動をとります。

罰は後で受けますので、では。」

「あ、あの、ごめんなさい！

いつて！レイジングハート！」

『yes master』

「フェイトと勇の結界内へ……転送！！」

『ますます面白くなってきたな……。
マスター、後ろ盾はお任せを。』

Side out

「はあ……はあ……。」

『大丈夫ですかマスター？』

「おう……元気元気。」

「ま、魔力は切れそうだけど。」

『ホントにあなたは……まだ少し“再生”の疲労も残ってるんですからね。』

「無理しないでください。』

「お前は俺のオカンか。」

『なつて差し上げましょうか？』

「遠慮しとくわ。」

「ベッドの下からエロ本でも発掘されたらたまらん。」

『んな本一冊も無いくせに何をいつてるんですか。』

「なんで知ってるんだお前……。」

「あ、いつも付けてるからな。」

「今日は初めてイモータル外したけど。」

「さて、フェイトは終わったか。」

「じゃ、そろそろ来るかな……。」

『マスター、上空から魔力反応。
高町なのは、ユーノ・スクライア、クロノ・ハラオウンの三名で
す。』

「ん。」

じゃ、お出迎えと行こうか。」

降りてくる三人。

おお、みんなバリアジャケット着て、戦闘体勢ってか。

「みなさんお揃いで……ジュエルシールドなら四つはもらった……あ
あ、そうだ。

これを聞くの忘れてたな。」

「その前に、あなた、勇君だよな!？」

なんでこんなこと……。」

「そりゃあ……もう言っただろ?」

嘘つく必要もないしな。

ほとんど全部話したつもりだが。

「さて、さっきから睨みまくりのクロノ執務官。
なにか質問は?」

「……公務執行妨害で逮捕……ってことくらいだな。」

「それは怖い。」

では、精一杯抵抗させて頂きましょう?」

お互いデバイスを構える。

つと、その前に。

『おい、フェイト。

疲れてんだろ、先に帰れ。』

「え？でも……。」

「いいから、帰れ。」

アルフ、つれてけ。」

「あいよ。」

晩御飯の件よろしくね」

これでよし。

「さて、こちららも魔力が底をつきそうだね……。」

「そんなことは知ってる。」

だからこそ今、ここに来て、お前を倒そうとしてるんだろ。」

「そういえば……倒したらお話を聞ってくれる約束だったの……。」

勇君でも、今はフェイクさんだから、手加減しないからね！」

「弱つてるところを狙うとは流石は管理局。」

でもでも、そう簡単にやられるわけにもいかないの……ちよこ
とチートしようか。

アビス、？キーリリース。」

「yes master second key release .
」

クロノ side

「弱つてるところを狙うとは流石は管理局。」

でもでも、そう簡単にやられるわけにもいかないの……ちよこ
とチートしようか。

アビス、？キーリリース。」

「yes master second key release .
」

『「「「!!?」」」

魔力が馬鹿でかくなった。

さつきまで、小さかったあの魔力がだ。

「お前……なんなんだ……?」

「お前って言うなよ……」。

俺には幽亜勇って名前があるんだからさ。

あ、今はフェイクだっけ?」

まあ、どっちでも変わらねえさね。

そついうと、奴……幽亜はデバイスを構えた。

「Are you ready gay s!」?
『ready go!-!』

s i d e o u t

『m a c h i n e g u n m o d e』

アビスの形態、マシンガンモード。
その名の通り連射に特化している。
バルカンの方がいいと思うんだけどな……。

「ブラッディドレイン・マシンガン！」

ブラッディドレインを連射する技。

バックステップをしながら乱射し、弾幕をはる。

連射だけに少し吸える魔力は少ないが……。

「デイベイイイイン……！」

『buster』

「ブレイズキャノン！」

じゅぶぶぶつ！

「その程度じゃあドレイン4つも超えられねーぞ！

てめえらア！」

「「「！？」」」

セカンドキーまで開放した俺の魔力は、次元震こそ起こさないものの、SSS+ある。

ファーストキーが、SS+な面を考えると、絶対的に技に込められる魔力量に差が出る。

そのため、ブラッディドレインの魔力吸収限界はファーストキー開放時よりも格段に上がっている。

「一応、コレはまだまだ序の口だ……これが越えられないんじゃないやあ……お話になんねえぞ。

先行は譲ってやるからよあ……

さあ、なのは！ユーノ！クロノ執務官！？越えて見せる！！」

『bloody drain wall』

なのは side

『全員、奴を中心に三方向に展開！

その後、各々が出来る最高の砲撃で攻撃しろ！

ユーノはバインドでなるべくあの球体をどける！

効果があるかどうかは分からないが、やってみないよりはましだ
！』

クロノ君から念話が届く。

最高の砲撃を当てる。

恐らく突破は出来ないけど、懐に入り込む事は出来るかもしれない。
ユーノ君と顔を見合わせて、うなずく。

『了解！！』』

三方向に展開し、砲撃の準備。

「いくよ、レイジングハート！！」

『all light master！！』

「チェーンバインド！！」

ユーノくんがチェーンバインドでドレインを払おうと鎖を振るう。

「おいおい……魔力は全部吸い取るって言ってたんだろうが……。
その鎖も魔力で作ったもんだったら全部吸い取っちゃまうぞ。」

勇君が言った通り、鎖がドレインに当たった瞬間、鎖は消え去りドレインが大きくなった。

「くっ……!!」

「……なのは! いけるか!」

「はい!!」

s i d e o u t

つてここで俺なの!?

左に見えるのはユーノ。

変わらずチェーンバインドでブラッディドレインを払おうとしている。
いや、あれは少しでも俺に攻撃が通るようにドレインの魔力上限を
下げようとしている……か?

クロノは後ろ。

何やってるかなんてアビスをかいして見えるんだが……。
右になのは。

魔力を貯めているようだ。

ふむ。説明御苦労。いや、俺がしたんだがね?

「デイベイイイイイイイン……ブラスタアアアアアア！
！！」

「！？ブラスター！？」

なんだそりゃあ！？

んな技なかったやろがい！！

ドレインに着弾したと同時に、魔力爆発が起きた。

なるほど、着弾地点から周囲に爆発を起こすデイベインバスターの
改造版か。

着弾した一か所一か所が全部爆発してやがる……。

「こりゃあ幅広く殲滅出来るな、アビス。」

『当たらなければどうということはないですがね。』

「ちげえねえ。」

が、この壁を抜くには今一つ足りない。」

デイベインブラスターは俺に届く前に消滅した。

「ステインガーブレイド……エクスキューションシフト！！」

「！！」

バツと後ろを振り向くと無数の魔力刃がこちらを向いていた。

「おいおい……こいつは多いな……！！」

『一つのドレインであの魔力刃十八は吸えるでしょう。』

現在の未吸収ドレインが百二十。

吸収限界を迎えていないドレインが七十四。

吸収済が五十八。

ギリギリいけるかと。』

「なら、止まる義理はねーな！

「こいや!」
「ハアアアアアアアッ!!!」

気が付いたら魔王、淫獣、執務官と乱戦(?) (後書き)

燃える戦闘シーンが書けない。

ほのぼのギャグしか書けないのだろうか私は。

気が付いたら無双（前書き）

210000アクセス

ユニーク30000人

総合評価1000越えました。

何があっただんですか!？

気が付いたら無双

フェイト side

「アルフ……。」

「ダメだよフェイト！」

自宅。

私はジュエルシードを六個同時に封印しようとした。

姉さんの為に、全てのジュエルシードを持ち帰って、一刻も早く姉さんの身体を治してあげたかった。

でも、封印するには魔力が足りず、結局フェイク……。勇に力を借りることになってしまった。

「治療が終わってからでいいから……。」

「残念だけど、魔力がほぼ空の状態であの勇と戦うなんて無謀だね。」

「ご主人様のお願いでもそれは聞けないよ。」

「で、でも……ジュエルシードが……。」

「ジュエルシードは2つ取っただろ？」

「そ、そうだけど……。」

あの事態は私が引き起こしたものののに、勇を一人で残してしまった。

少なくとも、私がもっとしっかりしていればこうはならなかったのに。

「それに、勇……。いや、フェイクが負けと思うかい？」

「……。」

首を振る。

私達が4人でかかっても倒せなかった人だ。
確かにユーノもなのはも強くなってるとはいえ、勇を倒せるとは到底思えない。

「だろ？」

だからさ、また今度万全な状態で挑もうフェイト。」

「……それはそうだけど……。」

なのはを思い浮かべる。

「なのは……。」

「あ……。」

あれは……どうだろうね……？

フェイクだし大丈夫だと思いたい……。」

一度見せてもらったが、とんでもない。
敵じゃなくて良かったと思った。

ぴんぽん

「……誰？」

私の家に来るのは、勇か、向かいのおばさん位だ。
この時間に来るのは勇位の物だが。

「あ、フェイトは休んでな。

あたしが出てくるよ。」

「う、うん。」

お願いね、アルフ。」

そういうと玄関にかけていくアルフ。
よ、よし……今のうちに……。
つて……あれ？この魔力……。

「フェイト……探したわよ……。」

「か、母さん……？」

「なんでここに……。」

「フフフ……フェイト、どうやらお仕置きが必要のようですね……。」

「リ、リニスまで……？」

「な、なんで……？」

「時の庭園にいたはずじゃあ……。」

「あ、アリシアは？」

「アリシアはどうしたの？」

「アリシア？アリシアなら……。」

「そこよ。と母さんが指差した先にはアルフがいた。」

「ほれほれほれほれ〜!!」

「あぁっ……ちよっ!

アリシアっ! やめっ……ふぁあんっ!!」

私の姉であるアリシアに尻尾を弄られ、艶めかしい声を出していたが。

「はぁ……アルフもなんで止めなかったのよ……。」

「……まあ、ご主人様だし……。」

アルフと一緒に正座させられてお説教中。

目の前には、椅子に座って足を組んでいる母さん。

傍らにはアリシアがいた。

「ご、ごめんなさい……母さん……。」

『すみませんでした。』

「バルディツシュが謝る必要はないでしょ?」

『いえ、こちらとしてもマスターを止める事はできたと思いますので。』

「はぁ……うちの子はどうしてこう……。」

母さんがため息をつく。

「あの……聞きたい事があるんだけど……。
なんでアリシアの体が治ってるの？」

そう、アリシアの体は何故か完治していて、
先ほどから我が家の家具を物珍しそうに物色して回っているのだ。
この間まで、車椅子で生活してきたとは思えない。

「治してもらったのよ。

あなたもよく知ってる人に。」

「私もよく知ってる人……？」

とりあえず思い返してみる。

浮かんだのは、ピアスをしているいつもご飯を作ってくれるあの人。

「……まさか……勇？」

「正解。

幽亜勇、彼がいきなりやってきて、アリシアを治していったの。
それと、フェイトの居場所も勇に教えてもらってね。」

……フェイクの時からむちゃくちゃだと思っていたけど。

「時の庭園の座標を特定したばかりか、

アリシアの肉体とリンカーコアの再生。

彼のデバイスもさることながら、彼自身も規格外です……。」

「言つとくけど、勇相手に戦おうなんて思わないで。

あの子の戦術は知らないけど、魔力量は全解放するだけで次元
震が発生するレベルよ。」

ああ、本当に。
とりあえず勇。

「めちゃくちゃすぎるよ勇……。
いや、なんかもうくちゃくちゃだ……。」

早く帰ってきてね。

勇side

「ハアアアアアアッ!!」

「吸え!!ドレイン!!」

ドレインを操作し、魔力刃にぶつけていく。
魔力刃は粒子となり、ドレインに吸いこまれる。

「まだまだあ!!」

「いいかげんしつっこいな執務官!!」

しつこい男は嫌われるってどつかのアニメで言ってたぞ!

エイミィ狙ってたたらもうそろそろ諦めねえか!？」

「生憎だが……プライベートと仕事は切り替えるタイプなんだよ僕は!」

「出来る男ってやつ……かいっ!」

「くっ!？」

ドオオオオオオン!!

ドレインをクロノに向ける。

クロノはギリギリでブレイズキャノンを放ったみたいで、ドレインは相殺されたようだ。

「アビス!あと何本だ!」

『後、三十二本です!』

「おっしゃ!ラストスパートオ!」

残るドレインをブレイドに向けた。

「ふう……」

終わった……よな?」

『魔力刃、反応ロスト。』

お疲れ様です、マスター。』

クロノに向き直る。

クロノの顔には疲労が見えたが、眼から闘志は消えていない。

「まだ……終わらないっ！」

クロノが駆けてくる。

ドレインを軽くよけながらのそのフットワークに多少驚いた。

「立ち向かうか……その心意気やよし……！」

来い！全力で受け止めてやんよー！」

「ハアアアアアアアアッ……！」

クロノがS2Uを振りかぶる。

S2Uの柄をつかむと、手に力を込め、握りつぶす。

「！？」

「安全な場所でへらへら笑ってるだけだと思っただら大間違いだオラア……！」

クロノの顔を、軽く殴打する。

それだけでも、十分すぎる程の威力で、クロノは海面にどぼんと大きな音を立てて叩きつけられた。

「さて、次は……「バインドッ……」……ユーノか……！」

俺の左足に巻きつく鎖。

チェーんバインドでドレイン全てをバルーンに変えるまでぶち当て続けたってのか……？

「はあ……はあ……。」

「流石ユーユーコンビの片割れ……。」

良い根性さね……。」

「ほめても……何も出ないよ勇……。」

息切れを起こしながらも無駄口をたたくくらいの余裕はあったようだ。

「ユーノくん！

ナイスアシストなの！！」

『D i v i n e b u s t e r』

バインドで動けなくなったところにディバインバスターを撃ちこんでくる。

だが……。

「腕は縛られてないんでなあ！！」

バチン！！！！

ディバインバスターを拳で撃ち落とす。

「レストリクトロック！！」

「何！？」

撃ち落とした拳、もう片方の足にもバインドが追加された。
あれ……このパターンってまさか……。

「受けてみて！！ディバインバスターのバリエーション！！」

……スターライト……ブレイカー……だと……？
ってかおい。

ここまだフェイトとの一戦じゃないんですけど……？
俺フェイトじゃないんですけど……！！

ちよ、ちよっとまでよ……。

なのは
side

「はあ……はあ……。」

スターライトブレイカー。

レイジングハートと一緒にがんばって考えた対フェイクさんの魔法フェイクさんのアビスとのバトルにおいて、一番厄介なのはバルーン。

そのバルーンを、全て自分の力に収束し、圧縮。

自分の魔力にフェイクさん……いや、勇くんの魔力を練り込んで、収束し直し、放つ魔法。

周りの魔力を全て吸いこんで自分の力に変える魔法。

エイミィさんにもフェイトちゃんにも太鼓判を押された魔法だ。（
その時の笑顔が妙にひきつってたけど。）

「す、凄い……っていうか……海にクレーターが出来てない？コレ……」

隣でユーノ君が言う。

「……たく……痛てえたらありやしねえ。」

「「!?!」」

「俺のドレインもバルーンも残らず吸い込みやがって……。」

「ービィかおまえは……。」

「あはは……私達が一番強い魔法だったのにな……。」

煙から出て来た勇君は、上半身のバリアジャケットが消し飛んでいった。

更に、額から血がダラダラと流れていたけど、いたっていつも通りな勇君を見て、思った。

「完敗なの……。」

勇 side

あぶねー……。

グラヴィティマスターで引力を操作してスターライトブレイカーの軌道を逸らさなきゃ逝ってたわー……。

気が付いたら無双（後書き）

バトル描写はやっぱり苦手ですの……。

あ、そろそろ番外編入れたいですね。

どうしましょ？

気が付いたら提督フルボッコ(前書き)

270000PVありがたいことでもあります。

ヴラドゥツェペシュ様

うしお様。

感想ありがとうございます。

黒色火薬水溶液様

烏龍茶様。

アドバイスありがとうございます。
直します。

気が付いたら提督フルボッコ

『おめでとうございますマスター。』

「……イモータル…… お前単独転移なんて出来たのか。」

目の前に現れた俺のデバイス。

丸い眼をかたどった球体には黒い翼が生えていて、翼をパタパタと動かし飛行している。

家でおでんの鍋にぶち込んでおいたはずなのにな……。

「おでんはうまかったか？」

『出汁がしみていて結構なお味でした。』

『イモータル、あなたがいればマスターもここまで傷は付かなかつたでしょうに……。』

「いやいや、アビス、お前じゃなくちゃいけないんだよ。

正直イモータルはまだ使いこなせてないからな。

それに、能力を使ったのは俺の落ち度だ。

気にするべからず。」

そういつてアビスを励ます。

大体、傷は能力の副産物みたいなものだから仕方ない。

『申し訳ありませんマスター。』

「気にすんな気にすんな。」

『Put out』

なのはのいる方向から、機械音声が聞こえる。

そして手元にジュエルシードが浮いてきた。

……正直もついたらねえんだよな……。

フェイトの望みであるアリシアの治療はもう俺がやっちゃったし……。
ま、一応貰うか。

「ジュエルシード、三つ。」

確かに受け取った。」

『いえ、マスターがここまで強くなったのは貴方のおかげですので。

』
「ははは、強くなって何がしたいんだか。」

レイジングハートと談笑する。

……チャージに時間はかかるものの、相手の放出した魔力全てを自分の魔力に加算し、撃ち出す収束魔法ってどんなだよ……。
チートだろ。

冥王を生み出しちまったか……。

「本当に無駄にチートだよお前さんは。」

「ゆ……勇君にだけは言われたくないの……。」
「安心しな。」

自覚はある。」

だって転生オリ主だもの。

「さて、じゃ、イモータル、転移宜しく。」
「！？ま、待って！」

なのはが俺に手を伸ばす。
大方どこかに行っちまうとでも思ってたんだろうが……。

「アースラ到着でござる。」
「……ふえ？」

残念ながら俺が転移したのはアースラの内部。
それもリンディさんがいるブリッジにだ。

横にはクロノがびしょ濡れになって横たわっている。
何……？

頭を海底の岩にぶつけた？

そいつは非道い。

一体誰がそんなことを。

「へ？あれ？なんで僕らアースラにいるの？」
「転移したからに決まっておろうよユーノ。」

間髪入れずさらりと言う。
やっぱりこいつら俺が逃げると思っていたやがった。
ざまあ。

「さて、しつかり送り届けたことだし、帰るか。」

今日の俺紳士的。

どや。

「ま、待って！」

「んあ？」

リンディさんが呼び止めた。

なんだよ。

俺はさっさと逃げるんだよ。

スタコラサッサなんだよ。

ねーと。ま、とう。

ついに私はジュースの買い方をマスターしたんだよ！

インなんとかさん乙。

「そのロストログア、ジュエルシードは管理局に全権があります。

それを強奪するということは、それなりの覚悟があるのかしら？」

やたらとシリアスな顔つきでこちらを見据えるリンディさん。

「……はあ。

あのな？何考えてるのかはわかる。

俺みたいなガキが管理局に追い回されるとかテラカワイソスwww
的なかんじだろ？」

「……わかってるなら話は早いわ。

あなたが持っている全てのジュエルシードを渡して下さい。

あなたのような子供が生涯を管理局に追い回される人生になる
なんて見てられないの。」

目を見れば嘘をついてないのはわかる。
が……。

「それはおまえさんが言っているセリフではないな。」

「どういう……意味かしら？」

うん、若干思い当たる節があるようだ。

目が少し泳いだ。

「そのなのは、友達の為にジュエルシードを集めていた。

で、途中でフェイト……新しい友人ができた。

そんな中現れたのがあんたら。」

順を追って説明していくことにしよう。

「あんたらはなのはや俺達に、

“これからジュエルシードは管理局が全権を持つから帰ってもいい”と言った。

が、次に出て来た言葉は“納得できないだろうから一晩よく考える”

……お前バカか？」

「なっ！貴様艦長になんてことを！」

噛みついてくる局員A。

鬱陶しい。

「あなの？

納得できないだろうから一晩考えろ？

管理局が全権背負ってんなら一晩いくら考えたって管理局の掌の上だろうが。」

「……。」

だんまりですかそうですね。

「管理局は万年人手不足。

その前に現れた魔導士ランクA A A以上の魔導士二人……。

なのは、フェイト。

さらには結界魔法に長けたスクライアの者。

管理局が欲しがらない筈……ないだろ？」

「……………！」

「「え？え？」」

驚いた様子の2人。

ってか理解してんのかあれ。

「つまり、なのはとユーノが欲しかった為に、お前さんはなのはとフェイト、ユーノを誘導して、管理局の傘下になるようにしたんだよ。

……ま、さっきクロノが独断専行したのは予想外だったみてーだが。」

原作にもなかった展開だしな。

「第一、お前さんら皆、クロノよりも弱い。

艦長は抜きにするとしてな。

だからこそ欲しかったんだろ？

2人の優秀な魔導士を。」

わざとらしくため息をつき、なのはの方に顔を向ける。

「だから言っただろうに……管理局に利用されるって。

忠告の意味、わかってなかったんだろ？」

「あ、その……ごめんなさい……。」
「ごめんなさいなの……。」

しょんぼりする2人。

やれやれと首を振る俺。

俺を睨みつける局員。

甲斐甲斐しくクロノの介抱するエイミィ。

俯くリンディさん。

うむ、なかなかどうしてカオスではにゃーか。

「さて、とりあえず結論を言おう。

三人の子供、しかも民間人に、危険なロストログア回収を任せ
たお前が言っているいいセリフじゃないって言うてんだ。

意味、理解したか？」

「……それについては……返す言葉もないわ。」

「か、艦長！」

お、潔くて結構なことだ。

「でも、あえて言わせてもらいます。

ジュエルシードを渡して下さい。

その石を持つている限り……管理局はあなたを捕縛対象とみなし、
連行しなくてはなりません。」

開き直りやがったこの妖精。

ふむ。

これはナチュラルにあのセリフを言えるまたとない機会では……。
よし。

「だが断る！」

『転移開始。』

「……！待つて！」

リンディさんが手を伸ばしてくる。

残念ながら間に合わないな。

あ、最後に言わなきゃ。

なのはとユーノの方に向く。

とりあえず精一杯の笑顔で言う。

「じゃ、またな。

お前ら。」

なのは side

「じゃ、またな。

お前ら。」

勇くんが転移していった。

様々なもやもやを私達に埋め込んだまま。

リンディさんの腕は勇くんに届くことなく空を切る。

「おい！転移先はわかるか！？」

「待って下さい！今調べ」失礼。』な、なんだあ？」

見上げると、そこにはモニターに映る紅い瞳。

「アビスさん……。」

『なのは様。』

先程の戦闘、お見事でした。』

「あ、ど、どうもありがとうございます。」

思わずお辞儀をしてしまう。

「……何かご用かしら？」

『そう邪険になさらず、私はマスターの伝言を伝えに來ただけです。』

「伝言……？」

『はい、まずリンディ提督。』

“すまないが、管理局の方に勝手ながら報告書を送らせてもらった。”

アースラ内にあった俺に関する資料は全て消去させてもらったが。

やったね局員！

仕事が減るよ！”」

「……え？」

「「「え？」」「」」

リンディさんと局員のみんなが驚いている。

「……そういうの勝手にされるの困るんだけど……。」

『こちらとしても我々のことを報告されても困りますので。』

では次、これはこの場にいるほぼ全員へ。

“管理局員じゃなく、お前ら自身なら大歓迎なので一度遊びに来てね。

ただし、管理局の制服で来やがったらぶつ放す。”

そう言ったアビスさんがモニターに映し出したのは勇くんの家までの地図。

え、いいの？

勇くん捕まっちゃうんじゃない……。

「正気ですか？

乗り込みますよ？」

『そちらこそ正気ですか？

魔力残らず吸われて、二度と魔法使えなくなりますよ？』

……ドレインの怖さは身を持って知ってるの。

『では……次が最後です。』

クロノ執務官に。』

「クロノに……？」

『はい。』

特別に音声です。

《クロノ、エイミィの膝枕は気持ちいいか？》

「ビクッ」

.....。

「クロノ君……起きてるの？」

「……。」

『《エイミイの膝枕を楽しみたいのはわかるが早く起きとけ。》
『……すまん。』

次の瞬間、一人の執務官が天に舞った。

s i d e o u t

うむ。

こなもんだ。

あとは野となれ山となれ。

うっしゅしゅしゅしゅしゅしゅ。

『やっぱり悪役似合うよな？』

『そうですかね？』

『イモータル。』

濃いシチューに放り込むぞ。
『

「すみませんでした。」

気が付いたら提督フルボッコ（後書き）

アドバースとかあったら下さい。
次回、少し日常書きたいです。
ってかデュエルが書きたいです。

主人公能力の整理（前書き）

主人公の能力の整理をするよ！

主人公能力の整理

能力名

キーマスター

物質、場所を指定し、それを魔力でロックする。

ロックをかけられる数は決まっており、

現時点では三つロックをかけることが可能である。

現在は、勇が自分自身の魔力を封印するのに三つ全てを使用している。

能力名

グラヴィティマスター

その名の通り、重力を操れる能力。

引力も操ることが出来るが、

その範囲は非常に狭く、勇を中心とした半径二メートルのみ、この能力は適用する。

さらに身体がまだできていないためか、身体に切り傷ができる。

勇曰く、「使い勝手がいいとは言えないが、間合いに入れば後は楽」

拳墮

重力を拳に乗せてぶん殴る。

地球の重力を少し殴った対象にぶち込む為、威力の向上は勿論、動きをも遅くする。能力名

再生

自分の魔力を注ぎ込み、人体の損傷、リンカーコアを再生させる能

力。

自分にこの能力は使えない。

まだ未熟なためか、現時点では再生させる時に再生する標的に怪我にあつた激痛が走る。

デバイス

アビス

主人公のインテリジェントデバイス。

待機状態はピース。

人格は女性。

基本的にマスターである勇の身を案じるが、イモータルと長く付き合ってきた為か勇に危険がない程度ならからかうようになってきた。勇のデバイスは何か“食べる”という機能がついており、好物はすあま。

コンビニに行くとたまに売っているので勇にねだる。

device mode（銃形態）

アビスにセットアップした時の姿。

二丁拳銃をかたどっているのは単なる趣味である。

machine gun mode（連射型銃形態）

銃がマシンピストル型に変形する。

連射性能に優れており、弾幕をはって敬遠しながら鎮圧していくのが本来の戦い方である。

ショットソウルミラージュ

対象を結界の中に閉じ込め、魔力弾を打ち込む。
外部からの攻撃は全て通るが、内部からの攻撃は全てが結界内を乱反射して対象に襲いかかる。

その後、内部で爆発を起こし、小さな爆発音と共に破裂する。
そのあとにはただ魔力の残照が残るのみである。

ブラッディドレイン

魔力を吸収する球体を撃ち出す。

それに触れた者も物も魔力を持つていれば吸収できる。

そのひとつひとつを操ることも可能である。

球体にはひとつひとつ吸収限界があり、その限界に達すると、刺激を与えるだけで爆発する『ブラッディバルーン』になる。

ブラッディドレイン・マシガン

連射型銃形態のみ可能。

ブラッディドレインをひたすら乱射する。

通常のドレインより吸収限界値が低いが、乱射しているので数は尋常ではない。

それら全てのドレインを身体を中心に半径8mを回転するように操作するのを『ブラッディドレインウォール』と呼称している。

血の代償

勇の血をアビスに吸わせることで、魔力を急激に上昇させる。
各魔法の威力も上昇するが、いちいち血を出すのが面倒。

カオスブレイカー

体内の魔力を収束し、額のアビスから撃つ。

長距離砲撃魔法。

シンプル故に強力。

ぶつちやけ原作版スターライトブレイカー。

ヘルアンドアビス

肩のランチャーに魔力を集中し、その魔力を威力そのままに拡散して撃ち出す。

イモータル

主人公のインテリジェントデバイス。

待機状態はピース。

2ちゃんねる、VIPなどでいくらか有名になったSS作家。

さらにブログでは二次創作にまで手を出し、近々18禁にも手を出そうとしている。

特技はハッキング。

管理局の中枢にお邪魔したこともあり、そのハッキング技術は折り紙付きである。

面白そうなものにはなんでも手を出すが、やり過ぎると勇に煮込まれる。

それでもオーバーヒートしないことを知っていてやる勇のイモータルに対する信頼(?)を評価するのか、

イモータルの無駄にチートな耐久性を評価するのか。
どちらが正解かは不明である。

好物は柏餅。

柏の葉まで喰らい尽くす。

まあ、基本的にはなんでも喰う。

月喰
げっしゅく

魔力を喰らい尽くす盾を張る。

喰った魔力はどこにいくのか。

それはイモータルかしらない。

絡弾 からめたま

魔力を持つ何かに着弾した瞬間バインドを発生させる。
そのバインドは魔力どころか魔法までもを喰らい尽くし、これに絡みつかれるとバリアジャケットまで喰らい尽くされる。
リンカーコアに被害はないから安心で安全。
むしろ喰われた後の魔力上限が上昇する。
修行にもってこい。
やったねみんな！
強化フラグだよ！

白道 はくどう

魔力を身に纏って突撃する。

白道とは、月の専門用語で月の軌道の意。

勇が機動戦艦ナデ。コ見て思いついた。

めたみ「以上、勇が今まで使用したやつでした。」

勇「厨二センスが鈍く黒ずんでるな。」

めたみ「どやあ」

勇「どや顔すんなし」

めたみ「ちなみに、イモータルの白道ってのは太陽の通り道の黄道の月verのこと。」

勇「わかりやすく説明したつもりか？」

めたみ「いつから私が説明していたと錯覚していた？」

勇「なん……だと……？」

主人公能力の整理（後書き）

さて、いままで使用した技をさらしました。

一応ジュエルシード事件は幕を閉じますが、まだ書いてないところの描写があるんです。

何故か転移先が月村家で、そこで何があったのか。

フェイトに伝言ってなんだったの？

とか。

そこらへんを書いて行きたいと思います。

「Σ」は早々に取っ払ってしまいたいのですが、まだできそうになりです。

本当に申し訳ない。

転移先が月村家だった（前書き）

400000PVって何があったんでしょう。

さて、これハーレムってタグにあるけど違うね？

って最近思い始めてきました。

フェイトとはやてにはフラグたてたと思ったんですが……。
ってことでいきます。

転移先が月村家だった

これは時の庭園から勇が帰ってくるちよいと前から始まるお話だよ！

すずか side

「今日は勇くん学校来るかな？」

私は、目の前にいる親友のアリサちゃんに質問を投げかけた。

昨日、勇くんは学校を休んだ。

何があつたかは知らないけれど、先生に聞いただと、「諸事情により今週中は休みます。」だそうだ。

「今日？」

さあね。

どうせ来ないわよ。」

「それはいくらなんでも冷たくないかな……。」「

今は朝。

私とアリサちゃんはお泊まり会を開いていた。

まあ、実際はアリサちゃんのご両親の出張の日と執事の鮫島さんの

年に一度のお休みの日が重なったからなんだけど。

「だ、だってしょうがないでしょ！」

あいつそういう認識なんだもん！」

確かに勇くんは私たちを避けている。

何故かはわからないけど、でも最近は時々塾にも来てくれるようになったし、お話もしてくれるようになった。

「最近はかなり改善されてきてると思うけど……。」

「……それは……まあ……。」

私も頑張ったし……。

とか言いながらうつむき始めるアリサちゃん。

ちらつと見えるアリサちゃんの顔は少し赤かった。

……へえ……。

「何赤くなってるのかな？」

「なっ！赤くなってるないわよ！」

「鏡をどうぞ。」

「あ、赤い……！」

自覚したようです。

「そつえばさー。」

「ん？」

アリサちゃんがベッドで足をばたつかせながら答える。

「あの人、誰だったんだろうね。」

「あの人？」

「ほら、あの人。」

誘拐事件。」

「ああ、天空宙真拳の人ね。」

「……？」

よくわからないけど多分その人。」

なんだっけそれ？

「名前も聞けなかったし、顔はHMDで隠れてたし。」

「ああ、なんかピアスしてたわよね。」

なんか勇みたいいな球体のやつ。」

「近所のスーパールのレジ袋下げてたよね。」

そういえばあの人の下げてたレジ袋のスーパー、勇君がよく行
つてたスーパーだったね。」

前に無理矢理スーパーまでついて行った時のことを思い出す。

そういえば、その時晩御飯と呼ばれたなあ……。

ちなみにその時の図。

「ほいつ」シュラララララララ

「「たつた一太刀で皮を含めたけのこがバラバラに！？」」

随分スピード料理だったなあ……。
ちなみにその日のメニューはたけのご飯とたけのこの皮の梅和え。
おいしかったです。

「ん？」

「どうしたのすずか？」

「うん、あの人の髪型を思い出してた。」

「髪型？」

怪訝そうな顔でアリサちゃんがこつちをみる。

「うん、髪型。」

朝起きて寝癖も直さずに出てきたみたいな髪型してなかった？」

「うーん……言われてみたら……。」

「で、勇君の髪型は？」

「いつも寝癖直さないで学校来るわね。」

「それにあの人のレジ袋は勇君行きつけのスーパー。」

ピアスは勇君と同じような球体のピアス。」

「すずか？まさかあれが勇だったっていうの？」

「可能性としてはあり得ると思うけど？」

今考えてみれば、勇君とあの人。

共通点がありすぎる。

今までなんで気づかなかったのか不思議な位。

「あいつが私たちを助けたねえ……ま、憶測に過ぎないわけだけど。」

「それはそうだけど、でも今度とりあえず聞いてみるつもりだよ。」

もし、本当にそうだとしたらお礼も言いたいし。
それに……。

「……／／／」

「すずか？」

な、なんでもないからこっちみないでよう……／／／

アリサ side

すずかが急に俯いてしまった。
な、なんか悪いことしちゃったかな？

「あ、そ、そうだ。」

トランプ持ってきたんだけどやる？」

「そ、そうだね！」

何やるうか？」

すずかが顔をあげる。

良かった。別に怒ってないみたい。

うーん……普通の七並べとかだとつまらないわよね。

「ポーカーでもする？」

「ポーカー？」

ってことは何か賭けるの？」

「あつたりまえよ！」

賭けのないポーカーなんてポーカーじゃないわ！

「さあ、アンティールよ！

カードを提示しなさい！」

「アリサちゃん段々勇君に毒されてない？

えーと……じゃあ、ギガプラントでいい？」

すずかもデュエルやってるかって？

当たり前よ！

「そ、それは……勇が欲しがってたカード！

文句ないわ！

私が差し出すカードは……カオスソルジャーとカオスの儀式のセツト！」

「いちいち大仰にするところとか勇君みたい……」。

文句なしだよ。」

「そう……なら！」

「「デュエル！」」

すずか

手札？

アリサ

手札

ハート3

スピード3

ダイヤK

ハートQ
スペード7

「三枚チェンジだよ。」

すずかは三枚を捨て、山札から三枚をドローした。
顔をみる限り手は芳しくないようだ。

これは……ワンペアでもいける……？

いや、油断は禁物よアリサ・バニングス！

「（たかがポーカ―に凄い悩んでるなあ……。）」

賭け事は負けた場合を考えたら負けなのよ！
それなら……。

「三枚チェンジよ！（あえてワンペアの3と7を捨てて勝負に出る
！）」

ドローカード
ハート3
クローバーK
ハートK

よし！手札のKが三枚……スリーカード……！
なかなかいい手札になったわ……贅沢を言えばQでフルハウスを狙

いたかったけど。

「じゃ、いくよ?」

「うん、それじゃせーのd「帰ってきたぜ我が……家?」」

……え?

勇?なんでここに?

「あ、あんた……どこから入ってきたの勇!?」
そう言う私に対して、どこからともなく入って(?)きた勇は首を
傾げながら目のあたりに手をあてる。

「俺HMDつけてない!?」

何故か慌てふためいている勇。
つてHMD?

「い、いつからHMD外れてやがった!?」

『魔力を限界まで再生に回したからでしょう。
昨日から外れてましたよ?』

『うむ、転移先を失敗したようだ。

申し訳ありませんマスター。』

「もっと早く言え!」

なんかピアスと話してるし……。

つてあのピアス…… あんな眼みたいなデザインだったっけ？
もっところ…… 紅と黒の球体のやつだったと…… あれ？

どっかでみたような…… っていうかなんでピアスと会話できるの？

「侵入者ですか！？」 「捕獲です！！」

「え？ちよ、ま、俺ですよノエルさん！

ん？ノエル？

もしかしてノエルさんヴァーミリオンって名字だったりしな「
ハアツ！！」 しませんよねっ！！」 バキィッ！

オプティックバレルは撃てないと思うわよ？
縛られていく勇を見ながらそう思った。

「……で、転移？してきたと？」

「はい…… なんかもうすいませんでした……。

ほら、イモータルも謝れよ。

バラされなくなったら。」

『このイモータル、一生の不覚でございました忍様。

だからバラさないでください。

あれですから、ピアスの姿でも土下座してますから。
見えないでしょうが電脳世界的なあれがあるんで。

そこで土下座してるんで。』

縛り上げた後、すずかと私。

忍さんとノエルさんで事情聴取をしている。

今までの経緯

勇現る

←

捕獲

←

事情聴取開始

←

勇「オラ魔法使い！」

←

ピアスが喋った。

←

忍さんが荒ぶる。

←

ここに来た経緯 k w s k

←

友達の家からの帰り道に馬鹿デバイスに跳ばされたでござる。
不法侵入とかじゃないでござる。

←

一同呆れる。 ↑ 今ここ

「あの……もういいですか？

帰りたいんですが……」

「つてか夜中ツスよ？」

「寝ようぜ小学生。」

「あんたも小学生でしょうが。」

「そいつは盲点だった。」

こちららあんたがいきなり現れて眠気吹っ飛んだのよ！
おまけにすずかとのポーカー勝負は決着つかなかったじゃない！
ギガプラントが手に入ると思ったのに！

「だからもういいじゃないっすかあ……魔法関係はなのはの方に聞いて……アウチ。」

「……なのは？」

「なんでなのはに聞くの？」

「いや、あの……なんでもないんで『なのは様もマスターと同じ魔導士だからです。』アアアアアアビイイイイイス！！？」

「な、なのはも？」

「って、もしかして魔導士云々って本当だったの！？」

「おい、信用されてないぞ俺。」

『涙拭けよ。』

「死ね。氏ねじゃなくて死ね。」

漫才を繰り広げる友人とピアス。
カオス。

「以上が魔法ってことになってます。」

「……どっちかと言うと科学に近いわね。」

忍さんが勇に魔法の説明をしている間、
すずかと紅茶を飲む。

っていうか勇、なんで縛られながら教鞭ふってんの。

「で、その魔法を使う為のリンカーコアだっけ？」

って私達にもあるの？」

「えー？教えなきゃ駄目ですか？」

「解剖してリンカーコア摘出するって言う「アビス、魔力探知開始
！！」ちっ
」

「ちっ」！！？

今解剖できないからって「ちっ」って言った！？

『はい、終了です。』

「で、どう？」

「ないことはないですね。」

一人だけですけど。」

そついうと、勇は私の方を見た。

……………私？

え？

「あいつ。」

『アリサ・バニングス嬢。

魔力ランクC+です。

レアスキル、炎熱変換付きです。

なんというバーニング。』

「誰がバーニングよ！」

「っていうか私！？」

「は？ど、ど、ど、どうということ！？」

「な、なんで私？」

「知らん。」

「っていうかこっちじゃ感じ取れないんだけど？」

「アビス、それマジで言ってる？」

『すずか様、忍様共々魔力は一切持ってないですね。

しかし、アリサ様はC+ランクに加え、レアスキル炎熱変換持ちです。』

「それってこないだ勇君が私達を助けた時に使ったっていうアレみたいなのやっただよね？」

「まあ……そんな感じ。」

「しかしほんとに感じ取れないんだけど？」

「おい、アビス。」

解説。」

『yes master』

アビスと呼ばれた紅いピアスから立体映像がでる。

「もう突っ込まない。」

突っ込まないわよ私は……。

立体映像なんて複雑な機能がこんな小さなピアスに搭載されて、さらに人格データまで積んでるなんて……」

忍さんがぶつぶつ何かをつぶやいている。

「ふふふ……解体^{バラ}したいわあ……。」「なんてつぶやいているのは聞こえなかった。

ええ、聞こえなかった。

『さて、図を見ていただきます。』

これは、アリサ様の体の立体図。

そして、胸のあたりにある光がアリサ様のリンカーコアとなります。』

確かに胸のあたりに光がある。

っていうかこれ私の身体なのよね？

ゆ、勇に見られて……… / / /

『一見問題がないように思えますが、よく見ると小さなリンカーコアがそこにバラけています。』

「あらま。」

つまり、これ一つ一つがC+ランクのリンカーコアってことか？」

勇が対して驚いてなさそうな口調でアビスに聞く。
顔は結構深刻そうだけど。

『はい。』

さらに各リンカーコアが心臓、右肺、左十字筋、残りは全て右

腕に集中し、融合してます。

ぶっちゃけ我々……いや、私でもイモータルの手助けがなかったら見つけれなかった程見事に融合してます。

推定魔力ランクS＋ランク。

高町なのは、及びフェイト・テストロッサの魔力ランクを上回ります。」

「……おいおい、あいつらを超えるってマジか？」
「はい。」

さらにアビスの探索能力は私を超えています。

それを、隠しきる寸前までのリンカーコアと人体の融合による同調。

しかもそれ一つ一つが炎熱変換できます。

やろつとおもえば、彼女一人で123世帯分火力発電できますね。」

「なんというバーニング。」

これはもはやアリサ・バーニングスに改名「するかあ！」それは残念。

ま、ぶっちゃけると、逸材。

なのは以上の“天才”かな。」

「第一、なのはちゃんの才能がわからないんだけど……。」

「なのはが表遊戯だしたらアリサが海馬。」

「納得してしまった私が怖い……！」
「なんか私まで納得しちゃった……。」

でも表遊戯は最終的にアテムと三幻神に勝ったじゃない。

閑話休題（↑二回目でござるby作者）

「とりあえずよ……イモータル。」

「はいはい、デバイス使いが荒いマスターですこと。」

「帰ったらおでん鍋に放り込むわ。」

「ちょ、勘弁。」

非常に帰りたくない……。

と、言いながらイモータルが眼を閉じる。
瞬間、私の目の前に巨大な剣が現れた。

「……………」

「……………」

啞然。

巨大な剣は私の身長の二倍程の大きさで、
刀身は朱色に染められている。

刀だと鐔にあたる場所には緑色の宝玉がはめ込まれており、
その宝玉の中には緑色の炎が燃え盛っている。

「……………あの。」

「は、はい!？」

「一応、あなたがマスターですよ？アリサ様。」

「え？」

剣から女性の声が聞こえてくる。
ま、マスター？
どうということ？

「ゆ、勇！

これ、どうということなの！？」

私がマスターって何よ！」

「そいつはイモータルがたった今造ったインテリジェントデバイスだ。」

マスター登録はしたが、名前はお前が決めてくれ。それと、もしセットアップする時は初めてだと詠唱しなきゃいけないから注意しろよ。」

「そういうことじゃなくてよ！」

「え？何？」

私は勇をキツと睨みつけた。

勇は頭をかきながらけだるそうにこちらに視線を向ける。

「なんで私がこんなでかい剣担いで魔法使わなきゃならないのよ！

私は魔導士やらなんやらになる気はないわよ！」

「……うん、そうだな。」

それもそうだ。

アリサは……戦わなくていいんだよな。」

勇は意味深につぶやいて、ため息をついた。

そして、今までとは打って変わって真面目な顔になる。
思わずドキッとしてしまった。

「アビス、セットアップ。」

『yes master』

勇が光に包まれる。

光が収まった中から出てきた勇は紅いコートを着て、両手に銃を持っていた。

銃を構える。

その銃口は一本の樹に向けられていた。

「な、何する気なの勇君!？」

「……シュート。」

ズガン!

轟音が鳴り響くと共に樹に穴が開いた。

「……え？」

樹はメキメキと音をたてて倒れていく。

勇は無表情にその樹を見つめている。

「……こんな力を持った奴が襲ってくるかもしれないぞ?」

「……。」

「自衛手段として……持つとくべきだと思うが?」

「………そうね。」

なんていうか……もう少しシリアスになれなかったのかなあ。

と思った。

でも、少し思った。

「この力があれば……すずかをくだらない血筋から……守れる……?」

転移先が月村家だった（後書き）

アリサ強化フラグ。

恋愛フラグは建設できてない……。

こうなったら最終手段でござる。

と、いうわけでアリサ、A・Sに参加……するの？

参加するとしてもどうなるかはその時の気分次第かと。
では。

すずかエ……。

気が付いたら夜天の主誕生でござる（前書き）

今年ラスト投稿

気が付いたら夜天の主誕生でござる

「いやあ……遊んだ遊んだ。」

「ほんまやで〜！」

私の家があんなに賑やかやったんわ初めてやわ！」

はい、本日はやての誕生日前日です。

先程までデュエルパーティーしておりました。

月村家、バニングス家、そしてテストロッサ家が総じて参加してくれました。

いや、デュエルパーティーといっても、

デュエルでトーナメントして、あとは料理食べたり、ゲームしたり、デュエルしたりしただけだが。

アリサからの一言。

「とりあえず魔法は練習しとくわ……。」

頑張れバーニング。

すずかから一言。

「私に魔力ないの？」

……残念。」

そこまで魔法が使いたいか。

忍さんから一言。

「デバース解体させてくれない？」

アリサに頼んで。

鮫島さんから一言。

「アリサお嬢様をよろしくお願いします。

……どうやらあなたがたにはお嬢様も懐いていらっしやいます
ようですよ。」

執事の鏡。

ノエル、ファリン、プレシア、リニスから一言

「……頑張つてね（下さい）。」「」「」

何をだ。

アリシアから一言。

「勇！勇！私にもやらせてやらせてやらせて〜！」

俺の魂^{デッキ}に触るな！

アルフから一言。

「なんかいい匂いがする……ここか！」

人様の家の冷蔵庫漁るな。

フェイトから一言。

「伝言つてこういうことだったんだね……。

でも、なんか楽しいな。えへへ。」

あなたは癒やしか。

家族総出でニコニコしゃがって。

おじさん癒やされちゃうよ？

あとアリシア。

俺の腕はブランコじゃありません。
ぶら下がるべからず。

「いや」でもちよつと疲れたなあ。

勇くんなんか作ってーなー。」

「あ、私も私も！」

勇の料理食べたい！」

「わ、私も！」

現在、アリシア、フェイト姉妹。
はやて、俺の4人で二次会です。
プレシアとアルフリニス？
帰りました。

あとはお若い方たちに任せて……的な空気作って帰りました。
アリサとすずかは明日も学校だからと、帰りました。

「はいはい、五分待て。

材料はあるからそうめんチャンプルーを作ってやろう。

ゴーヤを残した奴はアイアンクロード。」

「やっほう！」

期待してんでーっ！！」

「につぽんいちーっ！」

「え、えと……？」

わ、私も手伝おうか？」

「フェイト、お前だけが癒しだ。」ギユウ

「——っ！！！？／／／／」

思わず抱きしめてしまったのは言うまでもない。

「さて、そろそろ11時を過ぎるわけだが……。
寝ろよ小学生。」

「なんや？

勇くんは私とフェイトちゃんとアリシアちゃんと一緒に布団で寝たいんか？

もう、ハーレムは空想上だけにしとき？」

「私は別に一緒に寝ても良いよ？」

「わ、私は……あの……ちょっと恥ずかしいけど、勇がそういうなら……。」

「誰がそんなことを言った子狸風情が。」

むにーっとはやての頬を引っ張る。

おお、面白いように伸びやがる。

「ひひゃいひひゃいひひゃい！！

もう……勇くんたらこんな薄幸の美少女相手に乱暴するなんて……鬼畜やなあ。」

「ほう、余程小顔ダイエットをしたいと見える。

よかるう、そぎ落とし「すんませんでした。」よかるう。」

こちらとしても本意ではない。

はやての部屋でたむろしております。

フエイトとアリシアは本を読んでいます。

俺とはやてはデュエル。

そつえば今日はやてとデュエマしてなかったし。

「でも、今現在ハーレム状態やん。

なんなんそれ。どこでフラグ回収したん？

ダフトヘッドで最後のシールドをブレイク。

勇くん手札みせてや。」

「ん。

つてラ・バイルウウウウウウウウウ！！！！

……フラグとか皆目見当も着かんな。

とりあえずリーサでブロック。

シルヴァーグロリーあるから破壊な。」

「じゃあダークルピアの効果でリーサ破壊。

またまたそんな嘘ついて〜。

ほいほい、バルガライザーでブレイク。

デッキトップは……お、ボルシャック大和。」

「仕込みやがったなこのやろう！！

いやいや、全然ないから。

だって俺よ？

銀髪オツドアイのとんでもなく厨二なイケメンだったらまだしも俺よ？

ムルムルでブロック！」

「ダルピ（ダークルピア）の効果でラ・ウラ・ギガ破壊や。

いやあ、それはそれで勇くんなら乱立できそうやね。

ゲキメツで最後のシールドブレイク。」

「ブロッカーがいない……だと……。

お前さんは俺をどんな奴だと思ってるんだ？

シールドトリガーへブンスゲート。

手札からチーキークーレがぼぼーん。」

「ダークルピアでとどめ！

第一級フラグ建築士？」

「チーキークーレでブロック！

バトルは行われないドン。

俺はお前の中でどんな人物設定になってるんだよ……。」

「コッコルピアでとどめや。

んー……… どんなんて言われても……… 友達やんな？」

「orz

お、おう……… そりやそうだって。

当たり前だろうが？」

「せ、せやな？」

ま、まあ……… 友達以上に行っても……… ええんやで？」

「何故だ……… 何故なんだ……… マナ加速が足りないのか………？」

くっ……… もっとブロンズアームトライブを入れなければだめなの

か………？」

「（き、聞いてへん………。）はあ………。」

どうすれば……… どうすれば奴に勝てる………？

て、転生最強オリ主にも勝てない奴がいるもんだ………。

「ね、ねえ勇？」

そろそろ十二時だよ？」

「あ、ほんとだな……… そろそろ寝るか。

はやて、布団はどこだ？」

ちよつと俺の分敷いてくるわ。」

「あ、それならあれや。

一回の和室にあるで？」

「よし、んじゃ、おやすみ。」

「「「おやすみ」。」」

二次会からお泊り会に発展したようです。

階段を駆け下りる。

和室って……どこだっけか？

『そこを左ですよマスター。』

『あ、ほんとだ。』

ありがとイモータル……お前ここに侵入してないよな？』

『失礼な。』

私はこのような場所ごときにもぐるとでも？』

『ごときと言った貴方のほうが失礼だと思えますよイモータル。』
『アビスがいいこと言った。』

ま、下らん会話はコレくらいにして……寝ましょうか。

フエイト side

「なあ、フエイトちゃん。」

「ふえ？」

なあに？はやて？」

勇が出て行った後、私達三人ははやてのベッドにお邪魔して、三人で寝転がっていた。

「いや、ちょっと聞きたいことがあるんよ。」

あ、アリシアちゃんにもな？」

「え？うん、いいよ？」

「じゃあ遠慮なく……」。

二人のうち、もしくは二人共。

勇くんは好きか？」

「え？」

「好きだけど……なんで？」

「いやいや、多分フェイトちゃん達が考えてる方とは別なやつや。」

別なやつ？

アリシアに聞こうと思ったけど、アリシアも首を傾げているのでわからないのだろう。

「せやなあ……例えば……こんな感じに勇くんになりたいかってこ
とやな。」

そう言うてはやてが向けてきた一冊の本。
それはさっきまで私が読んでた本。

恋愛小説の短編集だ。

「……つまり、勇と恋したいか？」

「うん、そゆこと。」

「うーん……？」

「わかんない。」

「あれ？そうなん？」

「うん。」

だって私達男の子とは無縁な生活してたから。」

私は生まれてこの方男の子と接触したのは地球に降りてきて初めてだったし、
アリシアも眼が見えなかったから男の子を見るのも久しぶりだったはずだ。

「だから、そういうのはわからないんだ。」

「じゃあじゃあ、逆に聞くけど、はやては勇と恋したい？」

アリシアがはやてに質問を投げかける。

「せやなあ………したいで？」

勇くんと恋。」

「それって、どういう気持ちなの？」

やっぱり苦しい？

それとも、胸が締めつけられたり、泣きたくなったりするの？」

「アリシアちゃん悲恋モノ読み過ぎちゃう？」

よくわかったねはやて。

さっきまでアリシアが読んだの、“悲恋”ってタイトルの短編集だよ。

「うーん……苦しくはないなあ……」

でも、勇くんの隣にいと、なんていうか……落ち着くんよ。」

「落ち着く？」

「うん。」

確かにドキドキしたり、頭撫でられると、心臓が爆発しそうになるけど、

うちは両親がどっちもないから、いつも一人だったんよ。

そこに来てくれたのが勇くんで、その日からちよくちよく晩御飯一緒に食べてくれて、

なんていうたら合ってるのかわからんけど……。

隣に居たい……って思う……かな？」

あれ、途中から何言ってるのかわからなくなってきたもったな。

そういうと、はやては恥ずかしそうに顔を赤らめながらほつたをかいた。

「……恋……。」「」

勇が助けてくれた。

アリシアも私も助けてくれたし。

母さんやリニスだって勇には助けてもらっているだろう。

最初は私が火から逃げた時、駆けつけてきてくれた。

まるでヒーローみたいに見えて、思わず抱きついて、泣いてしまった。

膝枕もしてくれた。

悔しいだろう？って言ってたけど、不思議と嫌じゃなかった。

ジュエルシードの時も助けてくれた。

確かに管理局にとってはあれかもしれないけど、私達にとってはごくかつこよかったし、おとぎ話のヒーローさながらだった。

「隣に居たい……かあ……。」

そうだ。

あんな風に、なりたい。

とは思った。

それは憧れ。

でも、隣に居たい。

肩を並べたい。

一緒に遊びたい。

頭を撫でてほしい。

もっと、ずっと一緒に居て欲しい。

これは、“恋”なのだろうか？

「改めて聞くけど、どう？

勇くんと、“恋”したいか？」

「うーん……わかんない。」

「うん、私も。」

「そっか……。」

「でもね。」

「もっとずっと一緒に居たいとは思ってるよ!」

「うん、私も。」

「ずっと、一緒に、母さんとかリニス、なのはとは違うような……そんな感じが……する……かな？」

「ご飯を作ってくれるヒーロー。」

「残さず食べると、頭を撫でってくれるヒーロー。」

「困ったときは助けてくれる。」

「時々いじわるとかもするけど、でも、それでも、私は……。」

「うーん……せやったら、それがフェイトちゃんとアリシアちゃんの“恋”かもしれんな。」

「……え？」

「“恋”なんて人それぞれやし。」

ま、決め付けるのもあれやけど。」

そうなのかな？

これが“恋”なのかな？

アリシアを見る。

なんか難しい顔をしていた。

アリシアもわからないんだ。

「……やっぱりわかんない。」

「そつか……ま、そこらへんは追々やな。」

さ、寝よか。

明日は勇くんと一緒に全力でご飯作るでー。

おやすみ二人とも。」

「あ、うん。」

おやすみ。」

「おやすみー！」

布団に潜る。

何故か勇の顔がチラついてる。

眼をつぶる。

勇が笑ってる。

布団に顔をうずめてみる。

勇の背中が見えた。

フェイクの時のバリアジャケットで。

私を守るように背中を向けて、佇んでる。

ああ、大丈夫だよ。

今度は、私も一緒に戦うから。
横に並ぶ。

顔を見合わせて、構える。
そうか……私はこうなりたかった。
守られてるばかりじゃなくて、勇を守る。
パートナーになりたい。
これは……。

『マスター、付近に魔力反応です。』
「「え？」」

飛び起きる。
本棚の本が光っていた。
鎖で雁字搦めになっている分厚い本だ。

ダダダダダダダダダダダダバタン！
「なんだあ！」

何があつたあつ！」
「あ、勇くん！」

いつの間にか起きていたはやてが振り返る。
私は念の為、目線を外さないでアリシアを庇うように立ちふさがる。
光が、三角型の魔法陣を形成した。
その魔法陣がさらなる光を放ち、部屋を覆う。

「くっ……！！」
「まぶしっ！」

眼を開ける。

目の前にいたのは、黒いタンクトップを着た4人の人間がひざまずいていた。

「……闇の書の起動を確認しました……。」

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士でございます。」

「夜天の主の元に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を……。」

気が付いたら夜天の主誕生でござる（後書き）

ガキ使面白いつすわw
w
さて、皆様よいお年を

JS 事件報告書（前書き）

報告書

リンディ・ハラオウン提督

JS 事件報告書

スクライア一族により発掘されたロストロギア“ジュエルシード”計二十一個。

第97管理外世界“地球”の海鳴市にて、現地の民間魔導士の協力を得、それら全てを封印することに成功。

その際、クロノ・ハラウン執務官が魔力ダメージでリンカーコアを負傷。

治療にかかる時間は、およそ半年と判断。

彼が完治するまでこの世界にとどまることとする。

現地の民間魔導士が教導を申請したため、こちらの世界に近い世界の次元犯罪の解決と平行して行う。

なお、クロノ・ハラウン執務官の負傷の原因については封印の際に次元震の中単独で封印に向かったためである。

そして、現地の民間魔導士には謝礼として、第97管理外世界の通貨で一二〇万円をそれぞれに進呈した。

ジュエルシードは、スクライア一族の少年があまりに危険と判断。

調査の結果耐久性が低いらしく、

管理局の監視の下、全て破壊した。

次元震による被害はクロノ・ハラウン執務官一名である。

JS 事件報告書（後書き）

「ジュエルシードがありません！」

「しかも、何故か半年間有給です提督！」

「支援要請があつた場合のみ行けばいいんだよな？」

「なんだこれ？」

まあ、いいや！

そうだ！“キョウト”に行こうぜ！」

「おっしゃバカンスだ！」

休暇だアアアアアアアアアア！！！」

等という喧騒がアースラ内部で起こり、

さり気なくエイミィがクロノをデートに誘ったりしていたことを黒い眼がじつと見ていた。

ってかジュエルシードについては何もないのかよ。

皆様へのお詫びと500000PV感謝

めたみ「普段表立って出てこない作者です。」

めたみ「今回これを急遽書いたのは他でもありません。」

めたみ「この作品、“気が付いたら転生してチートなりリカルだった。”がいつの間にか完結済になっていました。」

めたみ「お気に入りに加えていただいていた方々、『中途半端なんだよ屑が……！』って御意見が届く前に見つけれられたのは不幸中の幸いでした。」

めたみ「本当に、申し訳ありませんでした。」

めたみ「今後は、このようなことが無いように充分に配慮をするつもりですが、同じことが起こった場合、コメント等で知らせていただけると嬉しいです。」

めたみ「そして、500000PV達成。」

めたみ「私自身驚きを隠せません。」

めたみ「皆様、本当にありがとうございます。」

めたみ「では皆様、最後に一言。」

めたみ「明けましておめでとうございます。」

めたみ「今年も是非、この作品をよろしくお願い致します。」

気が付いたら囲まれた（前書き）

イモータル、本領発揮？

ってか厨二すぎ……？

で、でも書いてて楽しかった……！

気が付いたら囲まれた

「構えろ。」

「いや、ちよつと待ってくんね?」

「……なんだ?」

「いやいや、あのさあ……。」

「コレどういう状況?」

幽亜勇。

闇の書の守護騎士達に囲まれております。

「はあああああああつ!?!」

「ちょちょちょ!!」

「うわわわわ!!」

「らあっ!!」

「やめろつつてんだろっ!!」

「ってちょwwおまww何そのハンマーww」

「ラケーテン……ハンマーッ!!」

「死ぬ気で回避だこの野郎オオオオオオオオオ!!!!」

「なんでこうなった!

どうしてこうなった!!」

「ってかこの展開二度目じゃね?

死ぬ!コレは死ぬ!!」

「ふざけんな!

マジでふざけんな!

「なんだその明らかなるfire!

やめてくださいお願いします!!」

「紫電……一閃!」

「当たらん当たらん当たりたくない!

やらせないよ!!ってかやらせたくない……そおい!」

「ちっ!

いい加減ぶっ飛ばされろ!」

「だが断る!

フェイト!アリシア!はやて!助けてマジで!

「ってか超ガチムチの犬耳あんちゃんが構えてんだけど!

マジで待って!

何!なんで光纏ってんの?

「サイヤ人なの?気なの?」

「オオオオオッ!!」「回避でござるオルアアアアアアア!!」

ひたすら避けてます。

あまりに回避しすぎて逆に楽しいわ！

ふざけんなコラァ！

はい！また回避！今ので得点1,000超えました！

「貴様……我々をおちよくっているのか！？」

「な、なんで！？」

なんでそういう結論に至るの！？

お前バトルジャンキーかよ！」

「魔力はAはあるし、デバイスだって持ってる！

そんなやつが避けるだけとかナメられてるとしか思えないっつ

ーの！」

「あ、ほんとだ。

魔力A+ある。」

「え、この短期間で進化して、“鍵”を上回ったって言うんですか？」

「どうやらそのようだ。」

「お前ら喋ったら本末転倒だよな！」

「『いや、面白そうだったので！』」

「やっぱりお前らバトルジャンキーだろ！？

ってか久々の運命力か！？これえ！！

って、そおおおおい！！！！」

シグナムが斬りつけてくるのを白刃取りする。
危ないわ！

「甲冑がなくとも我等ヴォルケンリッター！誇り高きベルカの騎士！

貴様如きに遅れは取らん！

さっさと戦え！」

「やだよ！

最近平和だったんだからその平和を崩さないでくれよ！」
「飛竜……」……っ！イモータル！セットアップ！」一閃！」
ズギャアアアアアアア！！

さて、ここまでの経緯を回想するでしょう。

俺がはやての部屋に入った時、部屋がとてつもない光が部屋から放たれていた。

そりゃあもう凄い。

東電に売れるレベルの光だ。こんなまぶしかったんですね。

入った瞬間眼をつぶりました。

ようやく光がやんだ。

恐る恐る目を開けると、予想通り4人の人物がひざまずいていた。

「……闇の書の起動を確認しました……」

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士でございます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を……」

うん、見事に……タンクトップ。

今が冬だとしたら……寒そう……。

「……なあ……シグナム……。」

「なんだヴィータ……主の前だぞ、私語をする……な？」

「なんか……多くねーか？」

「……あなた達は……誰ですか？」

主とは？」

フエイトがヴォルケンリッターを見ながら問う。

アリシアとはやてを後ろに庇いながら睨み付けている。

敵意剥き出しじゃん……。

つてはやて気絶してね？

ここは原作通りなんだな。

「貴様……主に何をした！」

「え、俺？」

俺に敵意を向けている……だと……？

フエイトへの敵意が……消えた……？

あ、あれか？

フエイトははやてを庇ってたからとか？

「……つてあれ？」

な、何ここ？」

しばらく安心してたらしく、目の前に広がるのは荒野。

……と、何故か構えている4人の騎士達。

「ここは生物がない無人世界……。」

「ここなら思う存分戦えるわ。」

「あたしらは古代ベルカの騎士。」

「騎士甲冑がなくても、ベルカの騎士に一对一で負けはない……。」「構える。」

どうやらシヤマルさんに転移されたみたい。

以上、回想終了。

話？そんな暇ないわ。

シグナム side

奴は……なんだ？

魔力A+……だが、奴の力はまだ先がある。

なんなんだ奴は……？

我々の攻撃をアクロバティックにかわし、
確実に入ったと思った攻撃をかわし、
私の太刀を白刃取る。

「甲冑がなくとも我等ヴォルケンリッター！誇り高きベルカの騎士！

貴様如きに遅れは取らん！

さっさと戦え！」

さらにこいつはデバイスも持っていると言うのに展開さえしない。
我々をナメているのか……？

「やだよ！

最近平和だったんだからその平和を崩さないでくれよ！」

こうなつたら意地でもデバイスを展開させてくれる……！
レヴァンティンに魔力を込め、カートリッジをロードする。

「飛竜………っ！イモータル！セットアップ！」一閃！
ズギアアアアアアア！

直撃。

いくら奴でもただでは済まないだろう。
私は煙を後ろに飛んで見据える。

「……………ふざけやがって……。」

背筋が凍る。

たった一言、奴の声がただけでだ。

「？キーリリース………！」

「………！？」

魔力が跳ね上がった。

こんな……こんな馬鹿みたいな量の魔力が………？

奴はまだ奥があると思っただけだが、これほどまでとは………！

「話も聞かず、理不尽な野郎共だ……。」

そんな奴らには灸を据えてやらねばならんようだな……?」

煙から出て来た奴は黒い鎧を着け、腰に一振りの刀が刺さっていた。
額に漆黒の眼が蠢いている。

「自己紹介がまだだったな。

幽亜勇。

見ての通り、魔導士だ。

こいつはイモータル。

あと、俺がしてた紅いピアスがアビス。」

自己紹介の間も威圧感が私を襲う。
他のヴォルケンリッターには向けてないらしく、私だけが奴を畏れている。

「……烈火の将……剣の騎士シグナム。

その魂……炎の魔剣、レヴァンティン。」

「湖の騎士シャマルと、風のリング、クラールヴィント。」

「鉄槌の騎士ヴィータとクロガネの伯爵グラーファイゼン!」

「盾の守護獣、ザフィーラ。」

威圧感は収まらない。

額の眼は止まることなく蠢き続け、

そしてまばたきをした。

次の瞬間、眼は私を睨みつけた。

「ーっ!」

「さて、自己紹介が終わった所で……お前らをねじ伏せる。

で、さっさとデュエルがしたいんでね。

………イモータル、解放しろ。」

『all light master
rock release

“Kaguya” stand by OK』

「不死の靈藥。

月の姫君。

我はこの一振りにて護るべきものを守護し、
その為ならば不死となろう。」

『release』

『レイトウカグヤ
“靈刀赫夜”。」

腰の剣の鞘の鎖が光となって消え去った。

奴はその剣を抜く。

月明かりに照らされたその剣は、妖しく、静かに輝いていた。

柄には、黒い水晶のようなもの埋め込まれていて、その剣の美しさを際立てていた。

一見質量兵器にも見えるそれは、僅かながら奴の魔力光であろう紅黒い光を纏っている。

「……………ヴィータ、シャル、ザフィーラ。

私がやる。

手を出すな。」

「なっ!？」

お前だけで何とかできんのかよ!?!?。」

「無茶よ!

あの魔力に身のこなし!

あんな子に太刀打ちできるわけが…………!。」

「何故だシグナム。

全員でも勝てるかどうか分からん相手だぞ。」

そんなものは決まっている…………!」

畏れはすでに高揚感に変わり、手が震える。
武者震いが止まらない。

この上ない相手。

その太刀筋、確かめてみたい。

我が剣がどこまで通用するか……！

「私が……闘いたいからだ……！」

s i d e o u t

赫夜を抜いた。

久しぶりだな……コイツを使うの。

『まあ、管理局に追い回された時以来ですね。

普段の素振りには鞘つけたままでしたし。

二年ぶりですかね。』

『もうそんなになるか……。

あの時はやばかったなあ。

……来たか。』

シグナムが一人、こちらに向かってくる。

その顔には笑顔。

ひたすらに笑顔だ。

流石バトルジャンキー……この状況を楽しむか……！

「一人でよかったのか？」

「良い。」

それよりも何よりも、お前のような相手と闘えることが……嬉しくてしょうがない……！」

『Schlange form』

シグナムが剣を構える。

カートリッジをロードする機械的な音と、葉莢が飛び出た。うわお。いい笑顔しやがってこのおっぱい魔人。

「バトルジャンキー乙……！」

俺も赫夜を両手に持ち、構えた。

今の俺らに合図は必要ない。

シグナムは振りかぶり、俺は赫夜を隠すように居合いの構えを取る。

「飛竜……」

「寒月……」

「「一閃……」」

シグナムは炎で、俺は氷で互いを迎え撃った。

気が付いたら囲まれた（後書き）

レイトウカゲヤ
霊刀 赫夜

イモータルにセットアップした場合の追加武装デバイス。
アビスの時のレーザーランチャーシステムのようなもの。

デザインは日本刀の柄に黒い水晶を埋め込み……いや、ぶっちゃけると柄にイモータル埋め込んでるだけです。

イモータル自身の持っている魔力変換機関が使える。

魔力変換機関とは、デバイスが自動で魔力を変換する機能である。

カンゲツイッセン
寒月 一閃

横薙ぎに赫夜を振るときに、赫夜に搭載されている魔力変換機関を凍結に設定することで氷の剣撃を放つ技。

寒月

冷たく冴えた冬の月のこと。

厨二過ぎて恥ずかしい…… / / /
でも気持ちいい…… / / /
変態かよ俺…… or z

気が付いたらフラグが増築されていた。(前書き)

多少無理矢理感が否めないですが、
突っ込みます。

我が霸道！止められるものなら止めてグエグボロオ！

気が付いたらフラグが増築されていた。

「オオオオオオ!!」

互いの剣が激しくぶつかり合い、
鏝迫り合いになる。

シグナムのレヴァンティン。

俺の霊刀赫夜。

そして、俺達二人の視線が交差する。

「ふっ……先程はすまなかったな……。」

「ああ？さつき？」

「いや、話も聞かず、襲い掛かる等無礼な振る舞いだった。

すまない。」

「ってこたあ誤解は解けたか？」

「一度剣を交えたのだ。」

そいつが敵意を持っているか等すぐにわかる。」

「そいつは……達人思考なこつてえっ!!」

剣を力ずくで押し返し、

横薙ぎに切り払う。

シグナムは後ろに引き下がり回避した。

俺は素早く赫夜を鞘に収める。

「月ノ剣」

振り抜く。

剣から放たれる三日月型の衝撃波がシグナムに襲い掛かる。
月ノ剣。

剣を収めた状態から高速で振り抜くことで衝撃波を放つ技。

俺の希少能力である重力操作や、イモータルの魔力変換機関で色々効果を付属して放つことが出来るので、なかなか重宝した技だ。

「はあっ！」

シグナムはそれをレヴァンティンで斬ると、まっすぐ俺の方に突進してきた。

再び剣の打ち合いになる。

「で？」

俺の考えはどう、だった!？」

ガキーン！

「敵意等微塵も、ないっ！」

実に、シンプルな考えが……一つだけだ！」

ギギーン！

「ほほう！」

そいつはすげー！

俺の考え丸見えか……よっと！」

「ふっ！」ギャリリリリリ……！」

再び鏢迫り合い。

楽しい……！」

楽しいねえ……！」

「フフフフ……！」

「……てゝ?」

むっ!

皆デツキを持つてる……ほほう、私とやるんないな?

ええで!受けてたつわ!

「はや……?」

さあ、デュエル開始の宣言をし「起きない場合は小顔ダイエットの刑「八神はやて!ただいま起床致しました!」よろしい。」

なんやねんもう!

今からデュエルやつたんやで!

「さて、起きたな?

紹介したい奴がいるから、リビングにGo。」

「しょ、紹介したい奴?

つてうわあ!?」

そういうと、勇くんは私を抱きかかえ、車椅子に乗せてくれた。
細めな体して、相変わらず力持ちやな……//

side out

「はい、自己紹介。」

左から。」

「闇の書の守護騎士。

ヴォルケンリッターが将、剣の騎士、シグナムと申します。」

「同じくヴォルケンリッター、湖の騎士シャマルです。」

「鉄槌の騎士ヴィータ……。」

「盾の守護獣、ザフィーラと申します。

我が主。」

「……わつつ？」

うん。

言いたいことは分かる。

「お前の持ってたあの鎖でがっちり固めてあった本。

あれの中にこいつらが入ってたんだと。

で、どうやら魔法が使えるようになる本がどーたらこーたらで
俺TUEEEEEEEEE!!!!!!

できるけど全部のページ魔力で埋めなくちゃいけないからその
間本の持ち主を守ってくれるのがこの人達。」

「さっぱりや。」

「だから俺こういう役目しなくなかったんだよぉ……。」

俺説明下手なんだよこのやろー。

さて、俺がテーブルの下でいじけてる間にシグナムが全容を話して
くれたみたいだ。

で、足も治るから集めさせろ。

いや、人様に迷惑かけてまで治したいとは思わない。

まで終わったところで、何故だかヴィータがテーブルの下に潜り込
んできた。

「……どした？」

「いや、あの……わ、悪かった……な？」

「……何が？」

「いや、いきなり襲い掛かったりして。

あたしら出て来ていきなり魔力反応見つけて、とりあえず小さい方から潰そうとしたんだけど……。」

まさかお前があんなに強いなんて……。

と言って、手を合わせて謝ってきた。

いや、そんな気にするあれでもないやん。

「気にすんな気にすんな」。

確かにびびったけども、過ぎたことですしおすし。」

そうこう言ってる間に服を買いに行こう！という話になった。

そこで、俺は机から這い出す。

「飯は俺が作っておこう。

ザフィーラ？だっけか？

手伝いな。

後は女同士ういんどうしょっぴんぐとやらにでもいつてらっさい。
い。」

「お、ええの？」

それは助かると言いたいけども、ザフィーラは渡せんな。
荷物持って貰わなあかんから。」

「ほう……よろしい。

ならば……。」

「フフフフ……あれやな。」

「「デュエル！」」

ザフィーラ side

今回の主はどこか変だ。

今までの主ならば、すぐにでも蒐集をさせるはずだが……。

「あ、主……あつ……そん……なっ……！」

「な、なんという質量……これが……これが私と同じ胸の部位……
やと……？」

……布の覆いの向こうから艶のある声が聞こえてくる。

……盾の守護獣たるもの、理性は完全。

欲情等はないが……周りにいる男が先程から顔を真っ赤にしながら去っていく。

そして、横にいるヴィータも、シャマルも頬を紅潮させている。

覆いの中には我が主、八神はやたと我らの将、シグナム。

もつとも、彼女のこのような声を聞くのは初めてだが。

「サイズ……まさか……100……オーバー……！」

なんという戦闘力……！

隠れ巨乳の石田先生をも凌駕するとは……末恐ろしいおっぱいや……！」

「あ、ある……じい……！」

も、もうよろしいで……しょう？サイズはわかったのですか……

…ふやぁん！」

先程幽亜と激戦を繰り広げていた将は一体どこへやら。

「シャル。

……冥福を祈る。」

「え？

……あ、次……私？」

「初めて自分が小さくて良かったと思った瞬間だ……。」

ヴィータが安堵のため息を吐く。

すまん、シャル。

「シャル？」

こっち……きて？」

「あ、あの……せめて優しく……。」

私は胸の前で十字を切った。

side out

「アリシア、これテーブルに。」

「うん！

フェイト、どう？

うまくできた？」

「うん。

勇が教えてくれるから大丈夫。」

ただいまフェイトを育成中。
料理スキルを上げれば素晴らしいお嫁さん間違いなしと言ったらノ
リノリで受けてくれました。
アリシアはまだ手足に少し不安が残るのでまた今度。

「そ。

出来たら火を止めて、豆板醤を少し、醤油とみりん、あと砂糖
を入れて絡めて出来上がり。」

「で、できた……！」

やったよ勇！

私出来た！」

「よしよくやった！

頭なでなでしちやろう。」ナデナデ

「んっ……ふう……ん」

「あ、ずるいーっ！

私もなでなでーっ！」

ハイハイ、とことんお相手いたそう。

「……イチャイチャイチャしよってからに、何様や勇くん！
？」

「俺様だ。」

「返されたやと！？」

「下らんネタはいいから手エ洗ってこいや。

あ、その前におかえり。」

「はいはい、ただいま。」

はやてが車椅子で洗面所に向かう。
その後ろでは、シグナムその他守護騎士達が首を傾げていた。

「なあ、テストロッサ。」

「どうしたの？ザフィーラ？」

荷物を両手に持っているザフィーラがフェイトを呼び止めた。

「“ただいま”とはどういう意味合いがあるのだ？」

「うーん……？」

勇「……“ただいま”ってどういう意味？」

「急になんだね。」

今私はデザート作成に忙しいのだが？

ふむ……シグナム見かけに寄らず甘いものは好きそうだが、和な感じのような気がするな……。

「うん、ザフィーラが教えて欲しいんだって。」

「ふむ……帰るべきところに帰った時に言う言葉じゃね？」

うん、なかなかいい出来。

これは勝つる。

どれ、ちよいと味見を。

「ちゅぷっ……うん。」

うまい。」

「帰るべき場所？」

それはなんだ？」

今度はシグナムが俺に問う。

「言つなれば……そーだな……“家族”の待つ場所かね？」

フェイトやアリシアは自分の家族がいるからそこに帰れば“ただいま”くらいは言うよな？

ま、俺とはやては家族なんざいないけど。

でも、はやてには新しく家族が出来たしな。」

冷蔵庫を開く。

お、プリンがいい感じに冷えて固まってる。

あとはソースをかけて完成でござるな。

「新しく出来た……？」

「え？」

家族になつてくれないのか？

はやてはそう思ってると思うけど？」

ん、流石夏。

そうめんパラダイスだな……お中元……差出人ギル・グレアム……。茹でるとしよう。

それはそれはもう無惨に茹で上げることになろう。

「ふむ……そうか……。」

「スピードクッキングがモットーなんだよ……。」

早く沸騰しろこの野郎……。」

湯……早く沸騰しろ……。

我は求め訴えたり……！

「……いただきます。」
「……いただきます?」

八人で食卓を囲んでの挨拶をする。
が、疑問の声が上がった。

「主、いただきますとはなんですか?」
「ああ、それはやな?」

食材を作ってくれた人と料理した人にありがとうって意味の挨拶や。」

「え?」
「じゃあなんで幽亜まで挨拶したんだ?」
「これ幽亜が作ったんだろ?」

「そりゃああれだよ。」
「百姓さんに向かって。」

まるで子供のように何度となく質問を繰り返す騎士達。

次第に緊張とかもほぐれていったのか、賑やかになっていく食卓。
フェイトもはやても、アリシアも、小難しい顔をしていた騎士でさえ、笑みを浮かべ、食事をしている。

「いやあ……平和だねえ……。」

「ふふ……。」
「……。」

その俺の顔を、はやてと、フェイト、そしてシグナムがぼーっと見

つめていたなんて、俺は見えない。
見てないっただけ見えない。

気が付いたらフラグが増築されていた。（後書き）

はい、ここから少々短編が続くと思います。

そして、多分オリキャラでます。

脇役中の脇役ですが。

そういうのが嫌いと言う方は、遠慮無くコメントしていただければ再考致します。

気が付いたら短編ってた？（前書き）

短編だからなのか……書きたいネタを放り込んでみたからなのか……。
書いてて、楽しかった。

気が付いたら短編ってた？

ヴィータと呪いうさぎ

「ん？」

ある日の昼間。

はやての家に遊びにきた。

すると、ソファーにヴィータが寝ていた。

汗だくである。

そりゃあそうだ。

夏だしな。

そして、どうやら今日はゲートボールは休みらしい。

が、そんな中で何かを抱きしめて寝ている。

「じつ……これは……っ！」

そう、呪いうさぎである。

ちなみに、家にも一匹居る。

「……おろ？」

俺は、ヴィータの腕から呪いうさぎをゆっくりと抜き取った。

ヴィータ side

「ないないない……っ！」

あたしが寝てる時にいつも肌身離さず持っているもの。
呪いうさがなくなつた。

せつかくはやてが買ってくれたのに……！

あたしの宝物なのに……！

「シャル！」

あたしの呪いうさが知らねーか！？」

「え？」

知らないわよ？

ヴィータちゃん、いつも抱きしめて寝てるじゃない。」

ダメだ、こいつ役にたたねー。

くそっ！どこにいったんだよ呪いうさが……！

「うーっす。

ヴィータ居るかー？」

「ああ？今忙しいんだよ！

後にしろ！」

「いや、多分探し物はこれかと。」

そう言つて勇がハンドバッグから取り出したのは呪いうさが。

……。

「……テメー……！」

「い、いや、ちょっとほつれてたから……ってあれ？

アイゼン展開するの？

ちよつと落ち着け。

話せばわかる。

だから少々お待ちをお嬢さ(r y

「光になれええええつ!!!」

そしてアイゼンの頑固な汚れになれ。

s i d e o u t

「強化したあ？」

「おふこーす。」

さて、俺がアイゼンの頑固な汚れになった数分後、
ヴィータに呪いうさをぎを渡した。

が、そいつは最早ただの呪いうさにあらず。

「そう、そいつの名は……“呪いうさに m k 2”!!」

「お、おお！」

なんだそれ！なんかカッケーことになってる!!」

どや。

見た目は、そんなに代わってないけども！
かつこいいだろ？

「その驚きの機能とは！

ヴィータよ！

そのお花の髪飾りを押してみろ！」

「え？これか？」ぽちっ

『れーきやくもーど。

きどー。』

幼女なボイスが聞こえ髪飾りが青く染まる。

「お、おおおおー！！

涼しい！」

「それは冷却モードと言って、呪いうさぎの体内に精製した擬似リ
ンカーコアが、呪いうさぎ自体を氷枕みたいな感じにする機能だ！
ちなみに、暖房モードもある。

その時の気温ごとに使用者に会的な眠りをお届けし、さらには戦
闘までサポート！

完全補助型自立起動デバイス“呪いうさぎmk2”。

それが新たなそいつの名前だっ！」

「か、かつけー！

な、なあ、他に何か機能はないのか！？」

ふっふっふ、焦るでないわ。

「さらに！ほつれを直したついでに！

そいつに俺の魔力を糸一本一本に流し込むことにより、強度の上
昇させた！

さらには回復魔法を一定時間毎に使用者にかけてくれる！

回復魔法の回数は五回！

五回までなら多少の傷は治る！

ちなみに回復モードを起動したときは片方折れている耳をま
っすぐに立てればいいのだ！」

「おおお！」

「さらにさらに！

驚きの新機能！」

「な、なんだ！？」

ふっふっふ、眼をキラキラさせてやがる……。
では、最後の機能を話してやるう。
聞いて驚け見て驚愕せよ！！

「そいつは動ける。」

「……え？」

「あ、信じてないな！

よしわかった！

呪いうさぎ！

起動！！」

俺が呼びかけると、呪いうさぎはピクリと震え、
背伸びの動作をした。

『はい、どしたのぱ？』

「今日からその子がマスターだ。」

「ご挨拶は？」

『はい！

ぱぱにつくられたかんぜんほじょがたじりつきどーではいすの、
“のろいうさぎまーくつー”です。

よろしくね！おねーちゃん！』

「……………お、お、おねーちゃ……………」

『？

どうしたの？おねーちゃん？』

次の瞬間、呪いうさぎはヴィータによってだいしゅきホールドみた
いなことされていた。

この日から、どこに行くにも呪いうさぎと一緒に。

そして、これまた妙にヴィータに懐かれることになった。

「勇！勇！飯まだか！？」

『あー！おねーちゃん！』

おつくえのうえにのっちゃんおぎょうぎがわるいよ！』

「はいはい！」

はやて！速攻仕上げるぞ！」

「あいよ！」

夜も快適に寝れているようだなにより。

なのはは訓練中

『200……201……。』

現在、なのはの魔法訓練に付き合っている。

空き缶を魔力弾で弾き続ける単純そうで難しい訓練。

現在のカウント。

あ、250だった。

「ええい！」

魔力弾が空き缶の芯を捉え、ゴミ箱へ一直線。
ナイスショット！

『上出来ですマスター。』

「うん、上出来上出来。」

流石天才。」

「え、えへへ？」

でも、勇くんに言われても微妙かな？」

「……………泣いていいっスか？」

あ、上がりに上がった魔力ですが、そのおかげでキーマスターが進化致しました。

4つ目の“鍵”の作成に成功しました。

おかげで魔力ランクをEまで下げられます。

「にははは……………ごめんごめん。」

あ、そうだ。

私の家に来ない？

勇くんだったらケーキホール位無料にしてくれるの！」

「その代わり、来週限定ケーキの作成だろ？」

「そのとーりなの！」

こないだ、桃子さんに俺オリジナルケーキを食べていただいたところ、

「翠屋を継ぐ気は無いかしら？」

と、言われました。

翠屋ケーキを食いながら、思わず「みゆ？」などと言ってしまった俺は悪くない。

それからというもの、週に一度のペースで俺オリジナルケーキをひとつだけ翠屋に置いている。

一名様限定である。

まず真っ先に売り切れるらしい。
どういふことなの。

「いや、でもさあ……恭也さんが怖いんだけ「私がしっかりお話し
るの！」さいですか……。」

恭也さん。
ドンマイ。

「ん？」

「どうしたの勇くん？」

翠屋へと向かう途中。

手を繋いでいるカップルの方がいた。
っていうか知ってる顔だった。

「クロノとエイミィ……？」
「え？」

確かにクロノとエイミィだ。
つてか手繋いでるじゃん……！

「こ、これは尾行せざるを得ない……！」

レイジングハート！

なのはの魔力を隠してやれ！」

『はい。』

「ちょ、私もついていくことは確定なの？」

「当然だ！」

こんな面白そうなイベント見逃してたまつかよ！」

追跡開始！

「遊園地とは……またまたベターなチョイスだぜ……！」

流石はクロノ……！

大方観覧車でキメる気だ……。

おい！なのは！遊びながらも追跡を続行するぞ！」

「わあ……！」

遊園地なんて久しぶりなの……！」

いざ……参る……！！

「あはははは！」

「勇くん見て見て〜」

「おーう！」

「見てますよ〜！」

「真横でな〜！」

「で、デバイスをビデオ代わりにしてやがる……！」

クロノ、職権乱用。

昼食

「勇くんあーん！」

「何故？」

「何故あーん？」

「ちょ、わかった！」

「泣きそうな顔すんな！」

「食べる！食べるから！」

なのは、若干暴走す。

ミラーラビリンズ

「綺麗……。」

「右手法でいくか……幸い鏡があつて、奴らを観察しやすいが、見つからないようにしなくては……！」

「なのは！迷子になるかもしれないから俺から離れるなよ？」

「え？あの……その……うん……／＼／」

クロノ、そろそろ夕方だぜ……決めるか……？

「どうだ？なのは？」

「うん。」

二人とも、観覧車に乗り込んだよ。」

「よし、なのは、お前はアビスを使え。」

アビスを外して、なのはに投げる。

「あわわ……！」

『ようやく出番がと思ったら……はあ……』

form change』

『あなた方は無駄に万能ですね。』

『自覚はあるぞレイジングハートよ。』

アビスとイモータルが双眼鏡の形になる。

ちなみにこいつら、形を変えることが出来たらしい。

早めに言えよ。

まあ、それで、双眼鏡になっていただいて……。

「うほっ、見える見える。」

「エイミイさん子供みたいにはしゃいでるの……。」

ナイスだお前ら。

後ですあまと柏餅を買ってやろう。

え？なのはの分の入場料？

勿論奢りですが何か？

「そろそろ頂上だな……おい、イモータル！

音声拾えるか？」

「楽勝。」

「本当に無駄に高性能ですよ……。」

「数少ないデバイスの友人に呆れられてしまった……。」

お、音声キター！

「今日は……楽しかったよクロノ君。」

「いや、いいんだ。」

日頃君にも世話になってるからな。

……ま、書類はもう少し早めに片付けてほしいが。」

「あはは、クロノ君仕事の話は言わないでよー！」

「この間も締め切り過ぎて大慌てで『く、クロノ君どうしようっ！』
つてきたばかりじゃないか。」

「うう……反省してます……。」

「ま、今回も楽しかったし、帰りに缶ジュース一本奢りで勘弁する
としよう。」

「ほほう……それは私に一任させてもらってもいいのかね執務官？」

「アイスコーヒーを頼むよ。」

「ちえっ、つまんないの。」

「そう言って君がこの間買って来たジュース。」

その後、アースラにその映像を送ったところ、

「G」

とサムズアップをアースラクルー全員から頂きました。
あれ？なのは魔法訓練の話じゃなかったっけ？

「えへへ……♪」

遊園地なんて久しぶりに行ったの……♪」

「楽しかったようで何より。」

そうだ、また来るか。

今度は追跡とか無しで思いっきり楽しもうぜ！」

「え？

……いいの？」

「私がいついけないといったかね？」

「ぷっ……ははは、変な口調。」

……ありがとう。」

『『建築完了………か？』』

何がじゃ。

ちなみに、桃子さんに怒られてしまいました。

来週のケーキは三つ作る事で示談にしていたきました。

気が付いたら短編ってた？（後書き）

ヴィータ強化フラグ……なるか？

そしてさりげなくなのはにフラグか……？

いや、まあ、置いといて。

なのは、完全に強化されてます。

二百五十回出来たんで。

確か原作 A・s 開始時に百回ですよ。

魔力のコントロールの上昇値が半端無い。

これから、ちよっぴり日常が続きます。

いやあ……それにしても……二徹は辛いですねえ……。

受験生の皆さまの息抜きにでもなればいいかと思っています。

勿論他の方々も読んで頂けたらありがたいですが……。

あまり徹夜で根詰め過ぎて体調を崩さないようにお気を付け下さい。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5813w/>

気が付いたら転生してチートなリリカルだった。

2012年1月15日04時55分発行